日本青年心理学会　第34 回大会

発表論文集

Proceedings of Annual Meeting of
JAPAN SOCIETY OF YOUTH AND ADOLESCENT PSYCHOLOGY
28th and 29th November 2026
Nagoya University, Higashiyama Campus, Nagoya, Japan



2026 年 11 月 28 日･29 日
名古屋大学教育学部（東山キャンパス）

JSYAP 2026

〇大会ポスターおよび大会ロゴマークについて
作成者：信太寿理（大会準備委員）

・ロゴマークについて
　今とは異なる形へと変化していく 10 年，20 年先の未来を思い描きながら，どのような未来であっても「誰かを想う気持ち」は変わらずにいてほしいという願いを込め，実行委員会の先生方のご意見も頂きながら作成しました。水面が表す穏やかさは未来を，植物が表す成長や可能性は青年をイメージし，未来への広がりを表現しました。

・大会ポスターについて
　第 22 回大会（2014 年）の名古屋大学の開催時にもロゴマークとポスターのデザインをさせて頂きました。私事ですが，22 回大会時は妊娠中で，なおかつ初めての実行委員だったこともあり，とても印象に残っています。その子どもも今は 11 歳となりました。あの時よりも，誰かを願う「未来」への気持ちは強いように感じています。今大会のポスターは，秋の名古屋大学教育学部棟を水彩画タッチにしています。紅葉に色づく木々はメタセコイアで，メタセコイアの花言葉は「平和」「楽しい思い出」だそうです。大会に参加されたみなさまにとって，楽しい思い出となるように作成しました。

日本青年心理学会 第 34 回大会 発表論文集

目次

ご挨拶 …… 1

大会プログラム …… 2

会期･会場のご案内 …… 4

大会参加者へのご案内 …… 8

発表者および自主シンポジウム企画者へのご案内 …… 11

名誉会員就任記念講演 …… 15

シンポジウム …… 17

口頭発表 …… 27

ポスター発表 …… 45

【巻末】日本青年心理学会第 34 回大会ハラスメント防止のための基本方針

ようこそ，日本青年心理学会第 34 回大会へ



ここは，研究の話も，思いつきも，ちょっとした迷いも，
安心して語り合える場でありたいと思います。

- だれもが気持ちよく参加できるように，
  相手の立場や考えに**ちょっと想像力**を。
- 性別，年齢，職位，国籍，障がい，性的指向などの違いを尊重し，
  互いの価値観を押しつけない対話を大切にしましょう。
- セクシュアル，パワー，アカデミック，マタニティ／パタニティ（出産・育児に関する）
  ハラスメントはもちろん NG です。
- 議論は歓迎。でも，攻撃はナシ。
  学問の自由を大切にしながら，ユーモアと敬意を忘れずに。

この大会が，「語り合うことの楽しさ」と
「人と人とが支え合うあたたかさ」に満ちた場になりますように。

＊発表論文集末尾に，本大会での「ハラスメント防止のための基本方針」を掲載しています。ぜひご参照ください。

ご挨拶

このたび，日本青年心理学会第 34 回大会を名古屋大学で開催させていただくことになりました。名古屋大学での開催は，第 5 回大会，第 22 回大会に続き 3 回目となります。名古屋大学は自由闊達な学風であること，勇気ある知識人であることを大切にしています。本大会においても参加される皆様と共に自由闊達で，知に向き合う勇気ある姿勢をもって議論と交流ができることを願っております。

本大会は前大会（第 33 回）に引き続き，大会運営改革ワーキンググループと大会準備委員会が協働して，大会準備作業を行なってきました。また，「私たちの学会」，「アンチハラスメント」の合言葉（バトン）も継承しております。すべての皆様が安心して大会に参加し，大会での経験を楽しみ，有意義なものにしていただけるように大会運営を行なっていきたいと考えております。

本大会のテーマは，「未来に向かって」としました。第1号通信でも述べましたが，このテーマには，私の日本青年心理学会の未来に向かう持続可能な発展を祈る思いと，未来に向かって生きる青年たちにエールを送りたいという2つの想いが込められています。大会準備委員会では，この大会テーマに関連する企画として「未来に向かう青年心理学――変わる青年，変わる社会，変わる研究――」と題するシンポジウムを計画しました。企画趣旨にご賛同いただき，快く話題提供者をお引き受けいただきました3名の先生方には深く感謝申し上げます。後半の時間帯ではフロアの参加者同士の意見交換や会場全体での討論ができるよう進行の工夫をする予定です。どうぞご期待ください。

また，本大会では口頭発表 9 件，ポスター発表 21 件，自主シンポジウム 3 件のお申し込みをいただきました。さらに，大野久先生の名誉会員就任記念講演，研究委員会企画ワークショップを加え，充実した企画をプログラムに盛り込むことができましたことを大変嬉しく思っております。

大会開催時期の名古屋大学東山キャンパスは，イチョウの黄葉とメタセコイア並木の紅葉が綺麗です。授業や入試関連業務などでお忙しい時期かとは存じますが，多くの皆様のご参加をお待ちしております。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

第 34 回大会準備委員長

平石賢二

大会プログラム

大会第1日目＜2026年11月28日(土)＞

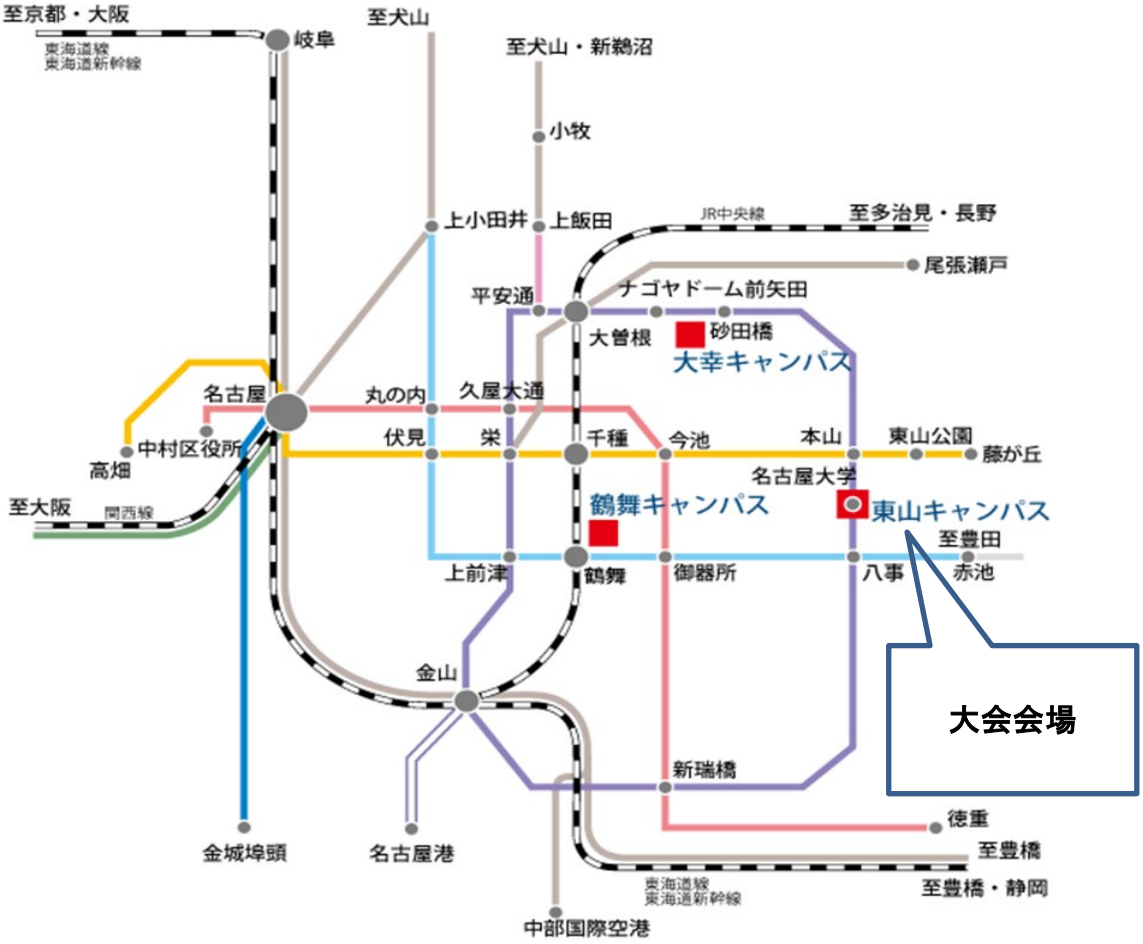
9:30	受付開始		
	口頭発表A(大講義室)	**口頭発表B**(第3講義室)	**口頭発表C**(第2講義室)
10:00	座長:佐藤有耕	座長:山田剛史	座長:天谷祐子
10:50	**OP1-A1 日本の青年心理学がめざしたこと ――日本青年心理学会前史――** 白井利明(大阪教育大学名誉教授)	**OP1-B1 自己基準的・他者基準的意思決定尺度の作成とモラトリアムとの関連** 髙坂康雅(和光大学)	**OP1-C1 大学生における「人生に選択肢がある」という認知の特徴――キャリア発達と他者との関わりから――** 溝口　侑(関西大学)
11:00 11:50	**OP1-A2 大学生の友人に対する「寛容」の構造――複数の葛藤生起場面における構造の検討および特性共感との関連――** 服部　茜(関西学院大学大学院)・藤井恭子(関西学院大学)	**OP1-B2 青年期クローン病当事者におけるアイデンティティの変容プロセス――代替療法への傾倒と「よりよく生きる」主体の再構築――** 多田真太朗(北海道大学大学院)	**OP1-C2 大学生のキャリア選択自己効力感とメディア上のロールモデルの関連 ――主観的類似性およびパラソーシャル関係(PSR)に着目して――** 土澤優里(慶應義塾大学大学院)
昼休憩(13:00まで)			
	名誉会員就任記念講演(大講義室)		
13:00 14:00	**【記念講演】 私のアイデンティティ研究史** 講演者:大野　久(立教大学名誉教授) 司　会:平石賢二(名古屋大学)		
休憩			
	準備委員会企画シンポジウム(大講義室)		
14:15 16:30	**準備委員会企画シンポジウム「未来に向かう青年心理学――変わる青年，変わる社会，変わる研究――」** 企　画　者:日本青年心理学会第34回大会準備委員会 話題提供者:日原尚吾(広島大学) 小川豊武(日本大学) 千島雄太(筑波大学) 司　会:風間惇希(三重大学)・亀田研(朝日大学)・川島一晃(椙山女学園大学)		
休憩			
	総会(大講義室)		
16:40 17:40	総会		
移動			
	懇親会(名古屋大学生協　レストラン花の木)		
18:20 20:30	懇親会		

大会第2日目＜2026年11月29日(日)＞

9:00	受付開始		
	ポスター発表(E･F演習室)		
9:30 11:00	責任在席発表(奇数番号:9:30～10:30) 責任在席発表(偶数番号:10:00～11:00)		
	休憩		
	口頭発表D(大講義室)	**口頭発表E**(第3講義室)	**口頭発表F**(第2講義室)
11:10	座長:小高恵	座長:小塩真司	座長:藤井恭子
    12:00	**OP2-D 青年期後期から成人期にわたる感謝を規定する心理的要因の検討** 池田幸恭(和洋女子大学)	**OP2-E 動機づけ調整方略の具体例を提案するAIを用いた学業行動への介入――動機づけ調整への自己効力感の調整効果――** 千島雄太(筑波大学)･河辺優菜(筑波大学)･湯　立(長崎大学)	**OP2-F 高校生における目標達成への努力を続けるか諦めるか迷った際の決断スタイルに関する研究** 長村圭吾(筑波大学大学院)･外山美樹(筑波大学)
	昼休憩(13:00まで)		
	自主シンポジウムA(大講義室)	**自主シンポジウムB**(第3講義室)	**自主シンポジウムC**(第2講義室)
13:00 14:30	**マクロな発達軌道からミクロ･質的･文化的視点へ――アイデンティティ研究の現在地と展望――** 企　画　者:畑野　快(大阪公立大学) 話題提供者:畑野　快(大阪公立大学) 日原尚吾(広島大学) 杉村和美(広島大学) 指定討論者:加藤弘通(北海道大学)	**伝記資料を用いて人格発達にアプローチする伝記分析――主題分析により否定的アイデンティティを探る――** 企　画　者:三好昭子(日本女子体育大学) 企画者･司会:赤木真弓(立教大学) 話題提供者:大野久(立教大学名誉教授) 茂垣まどか(帝京大学短期大学) 三好昭子(日本女子体育大学)	**居場所研究のこれまでとこれから** 企　画　者:小沢一仁(東京工芸大学) 話題提供者:益川優子(中部学院大学) 岡村季光(奈良学園大学) 則定百合子(和歌山大学) 石本雄真(鳥取大学) 鎌苅慧哉(株式会社suiten) 高田治樹(一橋大学) 神崎真実(京都教育大学)
	休憩		
	研究委員会企画ワークショップ(大講義室)		
14:45 16:45	**「推し活」から現代青年を考える** 企　画　者:日本青年心理学会研究委員会 佐藤奈月(福山市立大学) 松木太郎(広島国際大学) 溝口　侑(関西大学) 吉野伸哉(千葉県立保健医療大学) 話題提供者:中村香住(慶應義塾大学大学院社会学研究科等 非常勤講師) 久保(川合)南海子(愛知淑徳大学心理学部) 佐藤奈月(福山市立大学)		
	クロージングセッション(大講義室)		
16:45 17:00	**ご挨拶** 第34回大会準備委員会(大会準備委員長:平石賢ニ)		

会期・会場のご案内

会期：2026 年 11 月 28 日(土)・11 月 29 日(日)
会場：名古屋大学教育学部(東山キャンパス)(愛知県名古屋市千種区不老町)
アクセス：https://www2.educa.nagoya-u.ac.jp/about/access/
最寄り駅：名古屋市営地下鉄・名城線「名古屋大学」駅(1 番出口)



会場までの交通経路



受付までのアクセス

受付：教育学部本館　玄関ホール



受付までのアクセス：



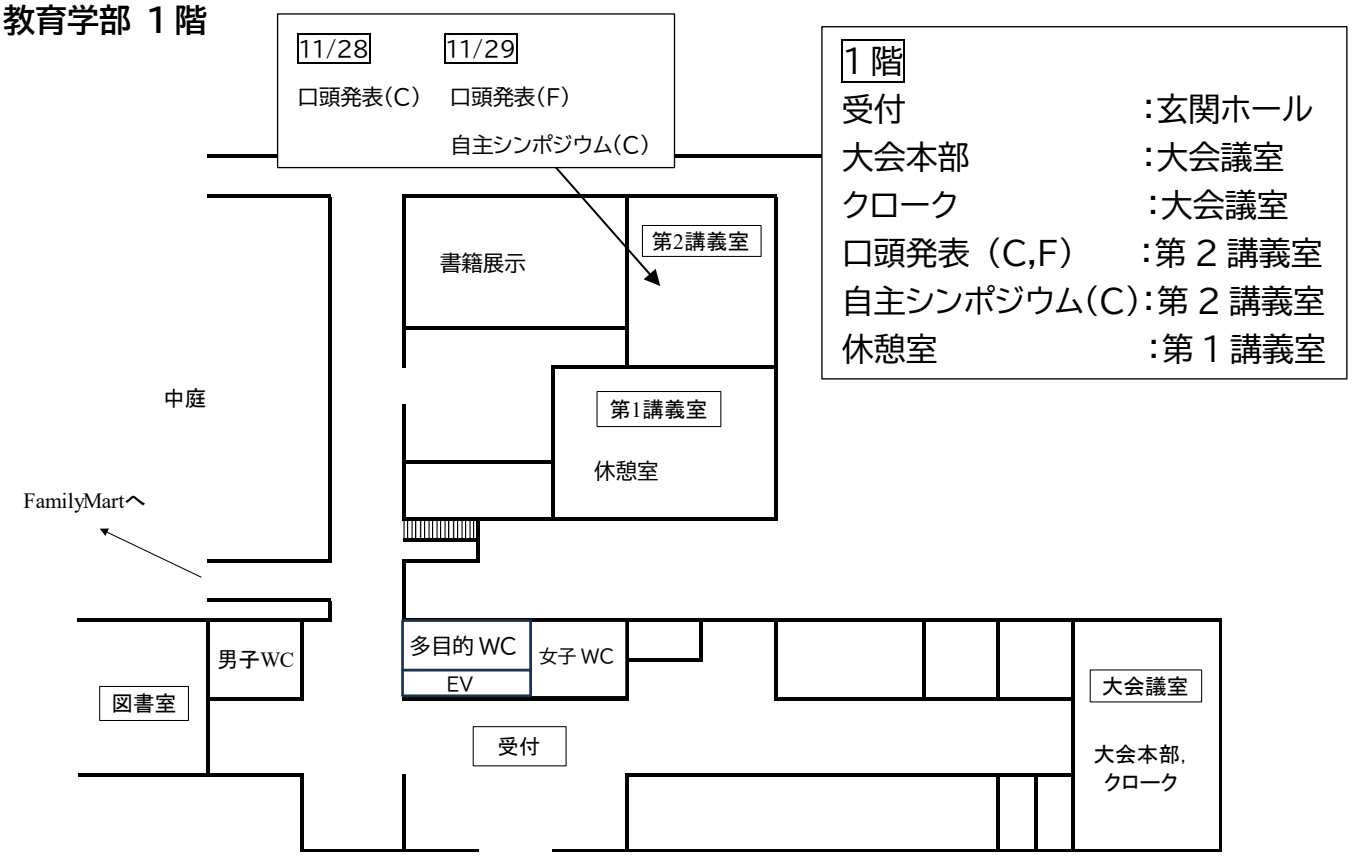
①名古屋市営地下鉄・名城線「名古屋大学駅」1 番出口より地上に出て，徒歩5分です。時計塔がある豊田講堂とは，道路をはさんで反対側になります。右手に Common Nexus，左手は学部棟が立ち並ぶ広い道を，豊田講堂に背を向けてまっすぐ進んでください。案内板①で「教育学部」の位置をご確認ください。

②経済学部・文学部の前を通り，図書館に向かっていくと左折する道があります。曲がり角にある案内板②で「教育学部」の方向を，再度ご確認ください。

③共通教育棟とコンビニ（FamilyMart）の間の道を進むと，つきあたりに大学生協南部食堂 Mei-dining があります。さらに，そこで左折すると，左側に教育学部の正面玄関があります。

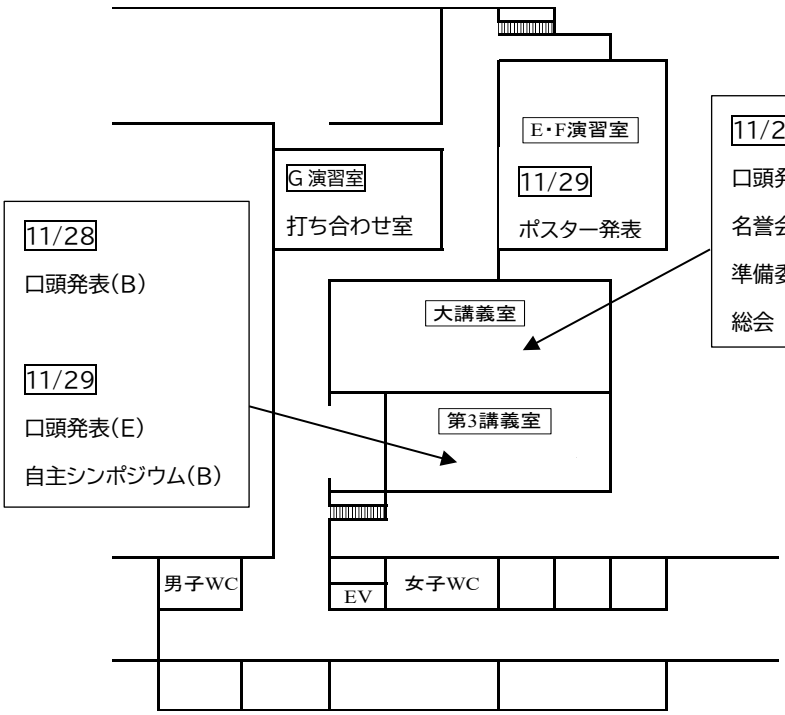
教育学部内会場図

教育学部 1 階



1 階
受付　:玄関ホール
大会本部　:大会議室
クローク　:大会議室
口頭発表（C,F）　:第 2 講義室
自主シンポジウム(C):第 2 講義室
休憩室　:第 1 講義室

教育学部 2 階



11/28
口頭発表(A)
名誉会員就任記念講演
準備委員会企画シンポジウム
総会

11/29
口頭発表(D)
自主シンポジウム(A)
研究委員会ワークショップ
クロージングセッション

2階
口頭発表(A,D)　:大講義室
口頭発表(B,E)　:第 3 講義室
自主シンポジウム(A)　:大講義室
自主シンポジウム(B)　:第 3 講義室
ポスター発表　:E・F 演習室
名誉会員就任記念講演　:大講義室
準備委員会企画シンポジウム　:大講義室
研究委員会ワークショップ　:大講義室
総会　:大講義室
クロージングセッション　:大講義室

NU MAPS（Web Site）

名古屋大学内地図アプリ

　名古屋大学東山キャンパス内の地図を表示，検索できる「NU MAPS」アプリを利用すると，現在地から目的地までのルートを示してくれます。ぜひご活用ください。



大会参加者へのご案内

1. 会場及び受付

■大会は，名古屋大学教育学部本館（東山キャンパス）で行います。

■受付時間

1 日目 9:30（最初のプログラム開始時間 10:00） ～ 16:40（総会開始時刻）

2 日目 9:00（最初のプログラム開始時間 9:30） ～ 14:30

2. 参加

■予約参加（早期申込または通常申込として，大会参加費申し込みを行い，参加費を前納した方）

予約参加者受付（玄関ホール）でお名前をお申し出ください。名札をお渡しします。

■当日参加

当日参加者受付（玄関ホール）にお越しください。大会参加費は受付でお支払いください。

＜当日参加費＞

・会員（一般）： 8,000 円

・会員（院生）： 6,000 円

・非会員（一般）: 9,000 円

・非会員（院生）: 7,000 円

・学部生　　: 3,000 円

■同伴参加

参加者のご家族で中学生以下の方，介助を必要としておられる参加者の介助を行う方は同伴者として無料で来場することができます。ただし，大会準備委員会事務局への申請が必要ですので受付でお申し出ください。

■障害のある方へのサポート

障害のある方にもできる限り大会に参加していただけるよう対応を検討いたします。サポートが必要な方は事前に大会準備委員会事務局（jsyap34am@gmail.com）にご相談ください。なお，会場内にはエレベーター，多目的トイレはございます。

3.クローク

■場所 大会議室

■お預かり時間　1日目 9:30～18:00

2日目 9:00～17:20

■スタッフより「預かり札」をお受け取りください。

■貴重品・傘・上着等は各自で保管をお願いします。

■大会1日目の懇親会に参加される方は，荷物受け取り後に会場に向かってください。

4. 休憩室

■場所　第1講義室

■飲み物，愛知・なごやゆかりの懐かしいお菓子をご用意致します。この機会にぜひご利用ください。

5. 書籍展示

■場所　第1講義室・第2講義室前のロビー

■福村出版の展示があります。

6. 打ち合せ室

■場所　G 演習室

■自主シンポジウム，研究発表，研究委員会企画シンポジウム，準備委員会企画シンポジウムなどの打ち合わせのためにどうぞ自由にご利用ください。

7. 昼食

■各教室（含む休憩室），中庭，ホール等でお食事をしていただけます。ゴミ袋は休憩室と受付付近に設置しますが，できるだけゴミは各自でお持ち帰りください。

■お弁当の受け取り

お弁当の予約をされた方は受付（玄関ホール）まで受け取りに来てください。

8. 懇親会

■日時 大会 1 日目の 11 月 28 日（土） 18:20～20:30

事前予約者のみ参加可能です。必ず予約・参加費の事前納入をお願いします。

■場所 名古屋大学生協 レストラン花の木（教職員が利用することの多い，ちょっと高級な学食です）

総会終了後，懇親会参加者は教育学部正面玄関に集合してください。引率者がご案内いたします。

9. 発表者の資料共有

■発表資料　大会準備委員会事務局にて共有ドライブを用意します。

当日受付にてお渡しする URL（QR コード）から，各自ダウンロードしてください。

発表者が紙媒体での資料配布を行う場合はそれを受け取ってください。

10. Wi-Fi の利用について

■大会会場で学外者が名古屋大学の Wi-Fi を使用する場合には，名古屋大学情報連携基盤本部にゲスト利用申請を行う必要があります。できるだけご自身のスマートフォンやモバイル Wi-Fi を使用していただけますと幸いですが，利用したい方は以下の URL にアクセスしていただき，お名前と連絡先を記入してください。申込期限は 2026 年 11 月 20 日金曜日 17 時とさせていただきます。大会当日に受付にて，お一人ずつに個別の ID とパスワードと利用説明書をお渡し致します。

＜Wi-Fi 申込先＞

https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLScjWp0FIL0goksz AyarE-icOyLE228nUP3bH-L73NH-9GOuw/viewform?usp=publish-editor

11. アンチハラスメント宣言について

第34回大会準備委員会は，本大会に関わるすべての人の人権や尊厳を守るために，ハラスメントの発生を予防することに努めます。また，本会に関わるすべての人たちがお互いに安心して学会活動に参加し，従事できる環境を作ることに努めます。

12. 会期中のお問い合わせ

大会本部を大会議室（受付右手奥）に設置します。

ご不明の点は，お近くのスタッフにお尋ねください。

発表者および自主シンポジウム企画者へのご案内

【研究発表（ポスター発表）】

1. 発表の枠組み

本大会でも前々大会，前回大会に引き続き，研究発表（ポスター発表）の枠を設けました。日本青年心理学会では長い間，口頭発表だけの発表形態をとってきましたが，ポスター発表にも特有の魅力があると思います。近い距離で，時間の限り発表内容について有意義な議論や意見交換ができることを願っています。また本大会での交流が発表者の未来につながるかけがえのない経験になることを祈っています。

2. 発表成立の要件

研究発表（ポスター発表）は，以下の条件を満たすことで正式な発表として認められます。

・発表論文集への原稿掲載。
・ポスター発表の時間帯（11 月 29 日（日）9：30～11：00）の会場でのポスター掲示。
・責任在席時間（60 分間） 中の質疑応答。

＊やむを得ない事情から，上記について困難な条件がある場合は，お早めに大会準備委員会事務局（ jsyap34am@gmail.com ）にご連絡ください。

3. 発表会場と受付

・発表および受付は，E・F 演習室で行われます。
・発表者は，10 分前（9：20）までにはポスターの掲示を終えて，発表できる準備を整えてください。前日からの掲示はできません。
・会場内で発表者用のリボンを配付しますので，参加者から見える位置につけてください。
・掲示用の画鋲なども会場内に準備しています。

4. ポスターの掲示

発表者は発表用のポスターを持参し，指定された位置に掲示してください。ポスターの仕様等は，以下の通りです。

・本大会では，設置されたパネルの指定箇所にポスターを掲示していただきます。
・パネルのサイズは【横 870mm×縦 1500mm】です。A0 サイズ（横 841mm×縦 1189mm）が目安となります（A3 で作成される場合は 8 枚，A4 で作成される場合は 16 枚です）。
・ポスターの最上部に大きく，発表題目，発表者の氏名，所属を表示してください。
・文字サイズは，ポスターから離れた位置（約 2m）でも読める大きさを目安にしてください。
・書式は自由ですが，多様性に配慮し，識別しやすい配色やフォント等をご利用ください。
・発表について，倫理的配慮事項や開示すべき利害関係（利益相反：COI）がある場合は，ポスター内で詳細を開示してください。
・希望する方は，ポスターの横に「研究のアピール・ポイント」「議論したいこと」を掲示してください。なお，当日は付箋やマジックペン等を用意していますので，手書きで作成していただくことも可能です。

5. 責任在席時間

ポスター発表の時間は 90 分です。責任在席時間はご自身のポスター付近に留まり，参加者からの質疑に応じてください。なお責任在席時間は，発表番号が奇数の方は 9:30～10:30 まで，偶数の方は 10:00～11:00 です。重複する時間が 30 分間ありますがポスターを掲示するパネルの距離は十分に離れているのでご心配はいりません。ご自身の発表番号は，本論文集掲載の大会スケジュールや，ご自身の発表論文のページでご確認ください。また活発な交流を促進するため，可能な限り，ポスターセッションのプログラムの時間帯は，責任在席時間以外にも会場内にいらしてください。

6. 資料配付について

・共有ドライブの設置 ： 本大会では，資料配付用の共有ドライブを大会準備委員会事務局で設定します。フォルダへのアクセス用の URL は，大会参加者全員に配付します。この形で資料を電子配付することを希望する発表者は，11 月 25 日(水)17:00 までに準備委員会事務局(jsyap34am@gmail.com)に資料を送ってください。

・紙媒体での資料配付 ： 会場内に使用できるコピー機はありません。印刷した資料を配付される場合には各自でご準備ください。

7. その他

・研究発表(ポスター発表)終了後，11:15 までに各自でポスターを取り外してください。また，掲示に用いた画鋲は各自で返却するようお願いいたします。

・その他ご不明な点がある方は，ポスター発表会場内の発表者受付にてお尋ねください。

・ポスター発表について事前にご相談がある方は，大会準備委員会事務局(jsyap34am@gmail.com)にご連絡ください。

【研究発表(口頭発表)】

1. 発表の枠組み

日本青年心理学会では伝統的に一つの研究発表に十分な時間をかけて，発表と質疑応答，議論をする場を大切にしてきました。50 分というのは必ずしも十分な長さではありませんが，座長の采配により，発表者とフロアとの活発で有意義な交流ができるセッションになると思います。質疑応答と議論のための十分な時間を確保できるよう発表時間の調整をお願い致します。

2. 発表成立の要件

研究発表(口頭発表)は，以下の条件を満たすことで正式な発表として認められます。

・発表論文集への原稿掲載。
・指定の時間(11 月 28 日(土)10:00～10:50／11:00～11:50;11 月 29 日(日)11:10～12:00)での研究発表。
・座長・参加者との質疑応答。

3. 発表会場

発表は，大講義室・第 2 講義室・第 3 講義室で行われます。発表者は，発表時間の 10 分前までに会場にお越しになり，発表開始前に機器の確認等を行ってください。各会場には会場担当のスタッフがおりますのでご不明な点はスタッフにお尋ねください。発表時間と教室は，本論文集掲載の大会プログラムやご自身の発表論文のページで，あらかじめご確認ください。

4. 発表の進行

口頭発表は 50 分間です。各発表に座長の先生がいますので，事前に発表と質疑応答の時間配分について打ち合わせを行なってください。なお，各会場には発表のためのプロジェクタと接続用の HDMI ケーブルを用意しています。コンピュータの用意はしませんので，ご自身のラップトップパソコンをご用意ください。HDMI および Type-C の変換アダプターも若干の用意はありますが，HDMI とラップトップパソコンの接続に必要なコネクタ類は各自でご準備ください。

5. 資料配付について

・共有ドライブの設置 ： 本大会では，資料配付用の共有ドライブを大会準備委員会事務局で設定します。フォルダへのアクセス用の URL は，大会参加者全員に配付します。この形で資料を電子配付することを希望する発表者は，11 月 25 日(水)17:00 までに準備委員会事務局(jsyap34am@gmail.com)に資料を送ってください。
・紙媒体での資料配付 ： 会場内に使用できるコピー機はありません。印刷した資料を配付される場合には各自でご準備ください。

6. その他

・口頭発表について事前にご相談がある方は，大会準備委員会事務局(jsyap34am@gmail.com)にご連絡ください。

【自主シンポジウム】

1. 自主シンポジウムの枠組み

自主シンポジウムは会員の自主運営による企画です。企画者の発案による特定のテーマに基づいた話題提供，討論を目的としています。登壇者によるご発表だけに留まらず，フロアの参加者との活発な意見交換，交流によって登壇者とフロアの参加者の双方にとって意義のある時間になるように時間配分や進行の仕方については十分なご配慮をお願い致します。

2. シンポジウム成立の要件

自主シンポジウムは，以下の条件を満たすことで正式な発表として認められます。

・発表論文集への原稿掲載。

・指定の時間(11 月 29 日(日)13:00～14:30)でのシンポジウム開催。

・参加者との質疑応答。

3. シンポジウム会場

自主シンポジウムは，大講義室・第 2 講義室・第 3 講義室で行われます。企画者，話題提供者，指定討論者は，開始時間の 10 分前までに会場にお越しになり，シンポジウム開始前に機器の確認等を行ってください。各会場には会場担当のスタッフがおりますので，ご不明な点はスタッフにお尋ねください。

シンポジウムの時間と教室は，本論文集掲載の大会スケジュールやご自身の発表論文のページで，あらかじめご確認ください。

4. シンポジウムの進行

自主シンポジウムの時間は 90 分間です。タイムテーブルの設定は企画者にお任せしますが，フロアとの意見交換，質疑応答の時間の確保をお願いします。なお，各会場には発表のためのプロジェクタと接続用の HDMI ケーブルを用意しています。コンピュータの用意はしませんので，ご自身のラップトップパソコンをご用意ください。HDMI および Type-C の変換アダプターも若干の用意はありますが，HDMI とラップトップパソコンの接続に必要なコネクタ類は各自でご準備ください。

5. 資料配付について

・共有ドライブの設置 ： 本大会では，資料配付用の共有ドライブを大会準備委員会事務局で設定します。フォルダへのアクセス用の URL は，大会参加者全員に配付します。この形で資料を電子配付することを希望する発表者は，11 月 25 日(水)17:00 までに準備委員会事務局(jsyap34am@gmail.com)に資料を送ってください。

・紙媒体での資料配付 ： 会場内に使用できるコピー機はありません。印刷した資料を配付される場合には各自でご準備ください。

6. その他

自主シンポジウムについて事前にご相談がある方は，日本青年心理学会大34回大会準備委員会事務局(jsyap34am@gmail.com)にご連絡ください。

名誉会員就任記念講演



私のアイデンティティ研究史

大野 久
（立教大学名誉教授・立教セカンドステージ大学統括特命教員）

Tracing My Identity Research: A Personal History

Hisashi ŌNO
(Emeritus professor of Rikkyo University)

はじめに

山梨大学教育学部，名古屋大学教育学研究科で心理学を学び始めて，西平直喜先生，久世敏雄先生はじめたくさんの先生方から教えをいただいた。また，先輩，同輩，後輩の皆さんにもめぐまれ，幸せな研究者人生だったと思う。深く感謝したい。本講演では，様々なアプローチから50年以上携わってきた私のアイデンティティ研究史を振り返ってみたい。

1. 青年期の充実感研究

院生時代から取り組んできた青年期の充実感研究を「大野久（1984） 現代青年の充実感に関する研究――現代日本青年の心情モデルについての検討 教育心理学研究 32,2 100-109.」として発表した。この中で青年期の充実感を健康なアイデンティティの実感と位置づけ，充実感尺度を作成した。さらにその構造を「充実感モデル」（通称）として示した。生活気分の側面である「充実感気分」とアイデンティティに関連の深い「自立・自信，連帯，信頼・時間的展望」をidentical factor score methodを用いて分析し，「充実感気分」は時系列に見て相対的に変動するが，その他の因子は安定しており，アイデンティティに関連の深いそれらの因子が「充実感気分」の原因であるという因果関係を推測した。ちなみに，学会誌に投稿しようとした際，久世先生が「充実感は（その当時）学術用語ではないので論文が通るかどうかわからない」とおっしゃったことが強く印象に残っている。さらに，20年後の「大野久，茂垣まどか，三好昭子，内島香絵（2004） MIMICモデルによるアイデンティティの実感としての充実感の構造の検討 教育心理学研究 52,3 320-330.」では，その当時，新たに開発された共分散構造分析を用いて，「充実感モデル」の構造に変化がないこと（時代を超えた安定性があること），気分の側面とアイデンティティの側面の関係性について時系列の安定性を確認した。

2.「アイデンティティのための恋愛」研究

初めて赴任した新潟青陵女子短期大学において，青年の心理を講義にする中で，アイデンティティと恋愛の関係の講義のレポート分析を開始した。そこを起点として，特にエリクソンが述べた「時としてアイデンティティが不確定である青年期の恋愛は，親密性の発揮（愛情）よりも自己のアイデンティティを見つける手段に終始してしまう。」（意訳）という現象を，約30年間にわたって学生から収集したレポートを対象に，その特徴，メカニズムをアイデンティティ理論および生涯発達を示した漸成発達理論から分析した。集大成として「大野久 2021「アイデンティティのための恋愛」研究と方法論に関する理論的考察 青年心理学研究 33,1 1-20.」を発表した。この研究内容は，現在に至っても青年や元青年たちからも説得力があるといわれる内容で青年期の心理のある本質を突いているように考えている。

3. 伝記分析

私が学部の3年生のとき，西平先生がゼミで初めて伝記分析を始められ初回から参加した。このときからすでに50年以上経過したことになる。この当時，伝記分析を青年心理学で行っている研究者は西平先生のみであり，当時の評判は「西平先生の名人芸，ほかの人には真似できない」というものであった。私も院生時代や大学院を出てからも伝記分析に着手することはできなかったのであるが，立教大学に移籍してから大学院を担当することになり，大学院のゼミで伝記分析を試みることにした。そもそも，伝記分析はエリクソンがアイデンティティ研究において約20名の伝記分析を行っていること，また，西平直喜先生が10冊ほどの専門書を出版していることに基礎を置いている。立教大学大学院において約20年間，院生たちと伝記分析のゼミを行った。その結果，その成果は多くの学会におけるシンポジウム，指導生たちの学会論文，学会発表論文として，日の目を見ることになった。「大野久・三好昭子・茂垣まどか・赤木真弓 （2023） アイデンティティ研究のための伝記分析―生涯発達の質的心理学－　福村出版」は，その集大成である。

4. アイデンティティ研究のための理論と方法論の検討

こうした研究を進めながら，それぞれの研究のための理論と方法論の検討の必要があり，様々な壁にぶつかりながらも工夫を行ってきた。

① 体系的折衷主義に関する方法論

Allport,G.W. (1977)の「人格研究は次元的方法(数量的方法)だけでは不十分であり，型態生成的方法(質的方法)によって補完されなければならない」(意訳)という体系的折衷主義の主張に基づき，次元的方法，型態生成的方法双方の長短所について検討し，それを補完する方法，具体的には量的方法(質問紙法など)と質的方法(面接法，自由記述法など)の補完をいくつか提案した。

大野久・三好昭子・茂垣まどか・キン・イクン・今井美智子.(2010b). 質的・量的心理－社会的アイデンティティ接近法の提案. 日本青年心理学会第18回大会発表論文集. 43-46.

大野久.(2011). 量的研究と質的研究の長短所と補完的折衷：体系的折衷調査法の提案. 日本発達心理学会(編). 研究法と尺度 (発達科学ハンドブック　第2巻) . 新曜社. (pp.174-185.).

大野久(2013). 青年心理学研究の方法論　新・青年心理学ハンドブック 福村出版Pp.26-37.

② 「アイデンティティのための恋愛」研究と方法論

「アイデンティティのための恋愛」研究に必要な方法論については，大野久(2021)のなかで展開している。

③ 伝記分析の方法論

伝記分析に必要な方法論と理論については大野久ほか(2023)のなかで展開している。

④ 魂現象の実在性と超越的アイデンティティとの関連

アイデンティティ理論に関する包括的考察と，超越的アイデンティティを考える上での魂現象の実証に耐えうる実在性，さらには量子論まで含みこんだ体系的な科学的仮説である魂理論についての著作を，11月に福村出版から出版予定である。

おわりに

以上，ここまでの研究史を振り返ってみた。年齢も71歳を超えたが，まだまだやり残していることもあるように感じている。伝記分析やかつての指導生たちとの研究会も現在進行形で継続しており，これからもまだ若いつもりで，ひと頑張りする所存である。

未来に向かう青年心理学
――変わる青年，変わる社会，変わる研究――
Adolescent Psychology Toward the Future: Changing Adolescents, Society, and Research

企　画　者：日本青年心理学会第 34 回大会準備委員会
司　　会：風間惇希（三重大学）
　　亀田研（朝日大学）
　　川島一晃（椙山女学園大学）
話題提供者：日原尚吾（広島大学）
　　小川豊武（日本大学）
　　千島雄太（筑波大学）

企画趣旨

青年期は，自己を見つめ，社会との関わりを広げながら，現在そして未来の生き方を模索する時期である。青年心理学はこれまで，アイデンティティ発達や自己形成，自立，対人関係，時間的展望等を中心に，青年の発達を捉えてきた。近年，SNS や生成 AI の普及，価値観やライフコースの多様化，社会的不確実性の高まり等，青年を取り巻く環境は大きく変化している。こうした変化は，青年の発達や心理にどのような影響を及ぼしているだろうか。また，変わりゆく青年を捉えるために，青年心理学はどのように変化していく必要があるだろうか。青年の姿や発達を理解するためには，個々の特徴に目を向けることはもちろん，青年が生きる社会との関係や，青年を捉える理論・研究方法についても改めて考える必要がある。

本シンポジウムでは，『未来に向かって』という学会テーマのもと，「青年はどう変わっているのか」「社会は青年をどう変えているか」「青年心理学はどこへ向かうのか」という問いに対して，青年・社会・研究の三つの視点から話題提供いただき，その後フロアを含めた全体でこれからの青年心理学の可能性を考える機会とする。これら三つの問いは，それぞれ独立したものではなく，相互に深く関わっている。青年の変化を理解することは，その背景にある社会の変化を捉えることにつながり，社会との関係から青年を捉え直すことは，青年心理学がこれまで積み重ねてきた知見や研究のあり方を再検討する契機にもなる。話題提供と全体討論を通して，それぞれの視点から得られる知見を共有し，現代の青年や社会を理解するための新たな問いや今後の研究課題について考えたい。今回の議論を通して，変わる青年と社会を捉えながら，未来の青年心理学が目指すべき方向性について参加者とともに議論を深める。

変わる社会，未来をつくる青年：アイデンティティの視点から



日原尚吾（広島大学）

近年，青年を取り巻く社会は大きく変化している。成人期への移行は長期化し，就職・結婚・家族形成といったライフコースは多様化している。また，デジタル空間は，青年にとって友人関係や情報探索，自己表現を模索する日常的な発達文脈となっている。さらに，非行などの外在化された問題よりも，不安や抑うつなどの内在化された問題への関心が高まっている。こうした変化は，青年が社会から与えられた標準的な生き方に沿うだけでなく，社会的期待との交渉を通して自らの生き方を選択し，自身の人生を構築

していく潮流と結びついている可能性がある。本発表では，まず国内外の研究知見をもとに，現代青年の変化を概観する。そのうえで，アイデンティティ発達研究の観点から，青年が社会から期待される「望ましい生き方」をどのように捉え，問い直し，時にそれとは異なる生き方を構築しているのかを論じる。そして，青年を社会変動の影響に翻弄される存在としてのみ捉えるのではなく，自らの生き方を模索しながら社会的期待と交渉し，バランスをとりながら未来の自身と社会を形づくる主体として捉える，青年心理学研究者の視点・方法論の重要性を強調する。

「青年」の変化をどう捉えるか――まなざしの問い直しから実証的研究へ



小川豊武（日本大学）

「いまの青年は変わった」と語るとき，私たちは何を基準に，誰と誰を比較しているのだろうか。2000 年代以降の社会学では，「青年の変化」を論じる際に，年長者や研究者が依拠する前提を問い直す作業が行われてきた。「青年」を成長過程にある存在として捉えるまなざしには，先行世代が抱く望ましい成長観や成人観が入りうる。また，若年層の変化とされる現象が，観察者の社会的状況の変化によって生み出されている可能性もある（青年ではなく観察している年長者の方が，対人関係が希薄化しているなど）。しかし，こうした指摘は，若年層の変化を否定したり，その把握を断念したりすることを意味しない。むしろ，何を「青年の変化」として捉えるのかを明確にし，印象や規範的評価と実態とを区別するために必要な作業である。本報告では，1990 年代以降，心理学と社会学において共通のトピックとして議論されてきた「対人関係の希薄化論」を改めて取り上げる。そのうえで，観察者の前提が変化している可能性を考慮しながら，社会における「青年の変化」をどのように捉えうるのかについて，参加者とともに考えることを目的としたい。

青年心理学はどこへ向かうのか：方法論の発展がもたらす「個別化」の可能性



千島雄太（筑波大学）

青年心理学の未来を考えるうえで，近年の二つの動向に注目したい。第一に，青年の経験や価値観が多様化し，集団の平均的な傾向を追うだけでは青年の姿を捉えきれなくなっている。第二に，技術の発展により，個人単位の詳細なデータを継続的に取得できるようになりつつある。

この二つが重なり，研究の関心は「個別化」へと回帰しつつあるように見受けられる。かつてオルポートが提起した個性記述的アプローチが再評価され，一人ひとりの独自性や個人内の変化を細やかに追うミクロな視点が重視されている。その一例として，近年普及しつつある JITAI（Just-in-Time Adaptive Intervention）が挙げられる。個人の特性に加え，「今どこにいて，誰といて，どのような気分か」といったその時々の状況に応じ，最適なタイミングで働きかける手法である。

こうした研究を支えるのは，実生活に根ざしたデータである。一時点の質問紙調査だけでは限界があり，アプリの利用履歴や SNS 投稿，行動ログ，センシングデータ等の活用が求められる。その取得と分析には，情報科学をはじめとする他領域や企業との協働が欠かせない。一人ひとりの青年に寄り添った研究を実現するために何が必要か，フロアの皆様とともに考えたい。

「推し活」から現代青年を考える

Exploring Contemporary Youth through “Oshi-katsu”

企　画　者：日本青年心理学会研究委員会
佐藤奈月（福山市立大学），松木太郎（広島国際大学），
溝口侑（関西大学），吉野伸哉（千葉県立保健医療大学）
話題提供者：中村香住（慶應義塾大学大学院社会学研究科等 非常勤講師）
久保（川合）南海子（愛知淑徳大学心理学部）
佐藤奈月（福山市立大学）

企画趣旨

近年，「推し」や「推し活」という言葉は広く社会に浸透し，とりわけ若年層にとっては身近なものとなってきた。メディア報道においても，2019 年頃から「推し活」が取り上げられるようになり，2020 年以降にはその具体的な活動が紹介されるとともに，「推す」対象のジャンルも多様化していることが指摘されている（田島，2022）。

こうした広がりは，様々な調査からも確認できる。消費者庁の調査では，「有名人やキャラクター等を応援する活動」にお金を使う割合は若年層で高く，「推し活」は若者に特徴的な消費形態の一つとして位置づけられている（消費者庁，2022）。また，全国 10～69 歳の 5 万人を対象とした調査では，「推しがいる／いると思う」者は全体の 34.6%であり，10 代では男性 57.0%，女性 83.3%，20 代では男性 45.3%，女性 59.0%と，特に若年層で高い割合であることが示されている（博報堂・SIGNING，2024）。

さらに，推し活は，推しに対する消費だけでなく，イベントへの参加や旅行など日常の行動にも広がっており，推しの存在と主観的幸福感との関連も報告されている（博報堂・SIGNING，2024）。

このように，「推し」や「推し活」は，現代の青年に広くみられ，その対象も多様化するとともに，日常生活とも結びついた社会現象といえるだろう。こうした現象を手がかりとすることは，現代青年のありようを考える一つの視点になりうる。

本ワークショップへ至る経緯

本年 2 月末に開催された研究委員会ワークショップでは，「推し活」をテーマに，田島悠来先生（帝京大学・非会員），三好昭子先生から「推し活」を取り巻く社会状況や，「推し活」をする青年の心性について話題提供をいただいた。 また，ニューズレター第 99 号の特集「推し・推し活と青年心理学」では，本ワークショップの企画者を含む 5 名の研究委員が，それぞれの専門的視点から短い論考を寄稿した。

こうした異なる機会を通して，「推し」や「推し活」を青年心理学の立場からどのように捉えることができるのかについて検討してきた。本ワークショップでは，さらに多様な研究領域から「推し」「推し活」と現代青年との関わりを検討する。

ワークショップのテーマ

本ワークショップでは，第1部では，現代青年の「推し」との関わり，「推し活」について，3 つ話題提供を行う。第 2 部はワークショップ形式で行う。参加者それぞれの研究分野から，現代青年における「推し活」をどのように位置づけることができるのかを検討する。そのうえで，「推し」や「推し活」という現象を手がかりとすることが，現代青年の様相を捉えるうえでどのような可能性をもつのかを議論したい。

「女が女を推す」という現象――「女ヲタ」の現在

中村香住

本話題提供では，女性の演者を「推す」女性ファン，つまり「女ヲタ」の現在に焦点を当て，その実践について検討を行う。「（異性愛）男性向け」，つまり女性の演者やキャラクターがメインのコンテンツのコミュニティでは，女性ファンを「女ヲタ」と名指すことがある。そんな「女ヲタ」たちによる「女が女を推す」こと

の実践については，体系化できるような言説の蓄積がまだあまりない。

しかし，フィクション作品において「女ヲタ」が描かれる機会は増えている。たとえば，漫画としては平尾アウリ『推しが武道館いってくれたら死ぬ』，小説としては松田青子『持続可能な魂の利用』や年森瑛『N/A』，ドラマとしては NHK ドラマ『だから私は推しました』などが存在する。また，「女ヲタ」たち自身による語りやエッセイを目にする機会も増えた。

そこで，本話題提供では，上記のような「女ヲタ」にまつわる資料を分析することで，「女が女を推す」という実践の内実について検討したい。その際には，こうした実践に介在するメディア環境や，こうした実践にまつわる困難として横たわる異性愛主義や家父長制についても，議論の俎上に上げる予定である。

「推し活」にみるプロジェクションとウェルビーイング

久保(川合)南海子

「推し活」は世代や価値観を超え，現代社会に定着した文化的ムーブメントである。認知科学の「プロジェクション（自己の表象を外部の対象に重ね合わせて意味づける心の働き）」の概念からみれば，対象がフィクションであっても心身の強い反応を生み，行動を駆動する点が特徴的である。また従来の趣味と異なり，「推す私」「対象」「コミュニティ」の「三項関係」を軸とし，他者と共有される社会的活動という側面も持つ。推し活によるウェルビーイングは次の 3 つの観点から捉えられる。(1) 世界の拡張（対象を通じて興味関心や人間関係が広がる），(2) 利他行動（対象を応援・支援する行為自体から満足感を得る），(3) 居場所（価値観を同じくする仲間と繋がり，受容感を得る）。一方で，生存に必要な資源（時間・金銭・労力など）の配分という点からは負の側面も存在する。推し活への過度な没入は，現実の人間関係の疎遠化や経済的リスクを引き起こす可能性がある。したがって，日常生活という現実の基盤を失わず，客観的な視点と適度な距離感を保つことが，健全な推し活には重要であると考えられる。

青年期における「推す」経験とその意味づけ

佐藤奈月

研究委員会は，推し活を行っている大学生 8 名を対象に，「推す」経験が当事者にどのように意味づけられているのか，また「推す」ことが青年自身にとってどのような経験として位置づけられているのか検討することを目的として，インタビュー調査を行った。その結果，①推しが増える，推しに対して冷める，推すことを一時休止するといった，推しとの関わり方の変化，②推しのぬいぐるみを外出先で撮影する「ぬい撮り」や，推しの公式のグッズではないものに推しを見出すといった，推しの世界観を現実世界に拡張すること，③実在する人間である 3 次元の対象を推す際の配慮や葛藤，④推すことを介して自己を再認識する，他者との関係を築く，編み物やイラスト制作などの新たな活動に取り組むといった，推し活が自己にもたらす影響についての語りなどが得られた。本話題提供では，こうした現代青年の「推し活」をめぐる多様な語りを示し，第 2 部のワークショップにおける議論の端緒としたい。

文献

博報堂・SIGNING （2024）. OSHINOMICS REPORT (https://www.hakuhodo.co.jp/humanomics-studio/assets/pdf/OSHINOMICS_Report.pdf)

消費者庁 （2022）. 令和 4 年版 消費者白書

田島悠来 （2022）. メディアが描く「推し活」――メディア報道と表象の分析から―― 帝京社会学，35 87-115.

マクロな発達軌道からミクロ・質的・文化的視点へ
――アイデンティティ研究の現在地と展望――
Macro to Micro, Qualitative, and Cultural Perspectives: Present and Future of Identity Research

企　画　者：畑野 快（大阪公立大学）
話題提供者：提供者1畑野 快（大阪公立大学）
提供者2日原尚吾（広島大学）
提供者3杉村和美（広島大学）
指定討論者：加藤弘通（北海道大学）

企画趣旨

青年期から成人形成期におけるアイデンティティ発達の軌跡と精神的健康との関連の解明は，発達心理学における中心的な研究課題である。2008 年に 3 プロセスモデル（Crocetti et al., 2008）および 5 次元モデル（Luyckx et al., 2008）に基づく尺度が開発されて以来，長期縦断研究を通じて文化によるアイデンティティの発達軌跡の多様性（e.g., Bogaerts et al., 2021; Hatano et al., 2020a; Meeus et al., 2010）や，コミットメントの適応的意義および反芻的探求の不適応性といった普遍的関連（Becht et al., 2019; Hatano et al., 2020b）が明らかにされてきた。

しかし，自己報告式質問紙による長期縦断調査に基づく研究は飽和しつつあり（Branje et al., 2021），国際的にも新たなフェーズへと移行している。本企画はこれらの流れを受け，マクロな長期発達研究からミクロ・ナラティブ・文化的視点へと展開した最新の研究を紹介する。具体的には，①長期発達を支える日常意識（ミクロ）の水準に着目した研究（畑野），②アイデンティティの質的内容を捉えるナラティブ（質的）研究（日原），③日本独自のアイデンティティ統合を検討した文化的研究（杉村）を取り上げる。従来の成果を踏まえつつ，今後のアイデンティティ研究の展望と青年・若年成人の支援のあり方を議論する。

日常におけるアイデンティティ・プロセスと感情のダイナミクス：個人内・個人間アプローチ

畑野 快

アイデンティティ発達は大局的な長期変化として捉えられてきたが，本来は日々の文脈における経験や感情の蓄積というミクロなプロセスから構築される。近年では，アイデンティティを固定的な個人差構造としてだけでなく，日常のダイナミックな「個人内プロセス」として捉え直す視点に関心が集まっている（Klimstra & Schwab, 2021）。

5 次元モデル（Luyckx et al., 2008）におけるコミットメントや探求は，日々の感情状態と密接に連動している。しかし，従来の個人間比較を中心とする研究では，日々の探求・コミットメントがもたらす一時的な心理的コスト（個人内変動）と，平均的な探求・コミットメント傾向がもたらす長期的適応（個人間差）が混同され，それらの関連性が十分に解明されてこなかった。そこで本研究では，10 日間の日誌法（290 名）を用いて，アイデンティティの 5 次元と日常の感情（抑うつ・人生満足感・幸福感）との関連を個人内・個人間レベルで分離して検証した。その結果，コミットメントへの同一化は両レベルで良好な感情と関連する一方，「深い探求」にはレベル間の解離が見られ，日々の深い探求の高まりは一時的に抑うつを高めるものの，平均して深い探求を積極的に行う人は人生満足感が高いことが明らかとなった。

当日は，この日誌法データの分析結果を踏まえ，日々のアイデンティティ・プロセスと感情のダイナミクスを報告する。さらに，こうした日常のアイデンティティと感情の関連に対して，ライフイベントの発生や特性的なアイデンティティの発達水準がどのように調整効果を持つのかについても報告する。

「普通の人生」の期待との交渉から捉える青年のアイデンティティ発達

日原尚吾

アイデンティティ発達には，時間的・空間的に一貫した自己の感覚だけでなく，自分が社会に受け入れられているという感覚も重要である。アイデンティティが他者との関係の中で発達することはこれまでも示されてきたが，近年では，青年のアイデンティティ発達を方向づけ，ときに制約する，より広い社会文化的な期待や制度の役割に注目が集まっている。その有力な視点の一つが，マスター・ナラティブの枠組みである（McLean & Syed, 2015）。

個人が重要な人生の出来事を想起し，その意味を解釈し，将来の目標を思い描きながら構築するライフストーリーは，ナラティブ・アイデンティティと呼ばれる。しかし，青年はこうしたストーリーを一人で自由に構築するわけではない。社会文化において共有される「普通の人生」についての支配的な期待，すなわちマスター・ナラティブは，青年が自らの人生を語るための枠組みとなる。一方，様々な理由からマスター・ナラティブから逸脱した青年は，偏見や孤立を経験しやすく，マスター・ナラティブとは異なる，あるいはそれに抵抗するオルタナティブ・ナラティブを用いて，自らのアイデンティティを構築することがある。

では，マスター・ナラティブから逸脱する青年は，どのようにして自らを社会の中に位置づけ，社会に受け入れられている感覚を得るのであろうか。本報告では，その鍵として，自らのオルタナティブ・ナラティブに社会的に肯定的な意味を見出すことに着目する。例えば，「病気で『普通の人生』は送れないが，同じ境遇の人を助ける生き方を見つけた」のように，自らの生き方が社会に貢献したり，他者に受け入れられたり，社会の中で重要な役割を果たしたりすると意味づけることである（Hihara et al., 2025）。

当日は，104 名の青年のライフストーリーのデータを混合研究法によって分析し，オルタナティブ・ナラティブの社会的に肯定的・否定的な意味がどのように形成され，それが青年のアイデンティティ発達とどのように関連するのかを報告する。

日本人青年における文化に根ざしたアイデンティティ統合の解明

杉村和美

アイデンティティの統合（integration）のあり方には，文化による多様性がある。アイデンティティの統合とは，潜在的に対立しうるアイデンティティの要素を取り込んだ成全性（wholeness）の感覚を指す（Erikson, 1968）。個人が成全性をどのように達成するかを理解するための有望なアプローチは，困難な人生経験に関する自己物語（narrative）を検討することである。こうした経験はしばしばアイデンティティの安定性を脅かすからである。最近の研究は，自己物語のスタイルは文化によって著しく異なることを示唆している（e.g., Wängqvist & Eriksson, 2024）。実際，日本人は西洋文化圏の人々に比べて，困難な経験に対して明確な意味付けや肯定的な解決策を示す傾向が低い（Turner et al., 2024）。これは，自己物語の肯定的な結末を重視する欧米（特に米国）の人々とは対照的である（McAdams, 2013）。しかし，こうした「未解決」な自己物語にもかかわらず，日本人がどのように成全性という感覚を構築しているのかについては，未だ明らかになっていない。

そこで当日は，適応的に機能している日本人青年の自己物語に焦点を当てた質的研究の途中経過を報告し，彼らが困難なアイデンティティの要素を受け入れつつ，いかにしてアイデンティティを統合しようとしているかを探求することで，この知見の空白を埋めることを試みる。この課題を解決することは，日本人青年の多くがなぜ重要なアイデンティティの選択を決定しない状態に留まるのかを理解する上で重要である（Sugimura, 2020）。加えて，非西洋も含めた多様な文化圏でのアイデンティティ発達の理解を目指す現在の研究動向（Adams & van de Vijver, 2021）に洞察を与えうる。

文献（一部）

Branje, S., de Moor, E.L., Spitzer, J. and Becht, A.I. (2021). Dynamics of identity development in adolescence: A decade in review. *J Res Adolesc*, 31: 908-927.

伝記資料を用いて人格発達にアプローチする伝記分析
――主題分析により否定的アイデンティティを探る――
Approaching Personality Development through Biographical Materials(Biographical Analysis): Exploring Negative Identity Through Thematic Analysis

企　画　者：三好昭子（日本女子体育大学）
企画者・司会：赤木真弓（立教大学）
話題提供者：大野　久（立教大学名誉教授）
茂垣まどか（帝京大学短期大学）
三好昭子（日本女子体育大学）

企画趣旨

2025 年 3 月に大妻女子大学で開催された本学会研究委員会企画の第 21 回ワークショップ「青年を知るための心理学的研究法」において，伝記分析について話題提供し，第 33 回大会シンポジウムではワークショップ形式で，1 人の人物を対象として分析する「個別分析」を体験していただいた。今回（第 34 回大会）は，伝記分析の中でも，1 人ではなかなか体験できない「主題分析」を体験していただく機会としたい。

伝記分析とは，歴史上の人物の伝記資料に基づいて，人格の生涯発達やアイデンティティ形成を研究する質的研究方法のことである。1 人の人物を対象として分析する「個別分析」に始まり，次の段階として，何らかの類似性，共通性，もしくは異質性，対照性をもつ 2 人の人物の伝記資料を比較し，生涯における人格形成の機序を探究しようとする「比較分析」がある。さらに第 3 の段階として，多くの人に共通する青年心理学的諸概念について伝記資料を用いた分析を行う「主題分析」がある。主題分析で扱われる主題，テーマについて西平（1983）は，モラトリアムやナルチシズム，生活感情などをあげている。「主題分析では，ある事象を経験した複数の人物，もしくはある共通した心理学的なメカニズムを経験した複数の人物をあげ，その事象がその人物に心理学的にどのような影響を及ぼしたのか，ある心理学的メカニズムの共通した原因や影響について分析を行う」（大野，2023，p46）。だからこそ，1 人で伝記分析を行う中で，主題分析に到達するには時間がかかる。

そこで本シンポジウム（ワークショップ）では，「主題分析」をグループで，いっしょに行ってみたい。実際に歴史上の人物の伝記資料に触れ，1 人ではなかなか体験できない「主題分析」を体験してほしい。

個別分析・比較分析・主題分析の考え方

大野　久（立教大学・名誉教授）

伝記分析の最終的な目的は，個人の生育史ではなく，普遍性を持った一般的な心理的現象の把握である。まず個別分析において，ある人物の生涯という縦断的視点から生育史に現れる人格形成の因果性に関する個別性の把握を行う。この作業を何人かの人物に繰り返し，さらに以下の手順を経て，事象の原因，もしくは結果に関する共通する要因を発見することができる。

比較分析の段階では，共通点を持つ二人の人物について，共通する部分と異なる部分に注目し，なぜその違いが起こるのかの視点からの分析を行う。比較分析では，個別分析におけるある人物の生育史の把握よりも，二人の人物の共通点と異なる点についての因果関係のメカニズムの違いに分析視点が相対的に移ることになる。

さらに主題分析では，ある事象を経験した複数の人物，もしくはある共通した心理学的なメカニズムを経験した複数の人物を挙げ，その事象がその人物に心理学的にどのような影響を及ぼしたのか，ある心理学的メカニズムの共通した原因や影響について分析をおこなう。したがって，主題分析では，個人の生育史の分析よりも，一般的な心理現象のメカニズムに分析視点が移ることになる。

主題分析の実例

茂垣まどか（帝京大学短期大学）

ここでは代表的実例として，西平（1981, 1996）の示した「モラトリアム」と「ナルシシズム」を挙げる。

モラトリアム：マルティン・ルターやチャールズ・ダーウィン，ジョージ・バーナード・ショウなどの資料から，まず共通の分析として「より適切なアイデンティティ選択のために，一時的にアイデンティティ決定を延期する」様相を示した。たとえば 20 才のショウは実業家としての業績・収入・名声という外的評価を得ながらも主観的認識との齟齬があった「アイデンティティなき成功」（Erikson, 1980/2011, p. 114）の状態だったため，それらを一度捨て，ひたすら執筆活動に励んだ。またさらなる分析として，モラトリアムを①享受した人，②享受できなかった人，③特殊な形で享受した人の三つに類型化し分析している。たとえば①について例示すると，レオナルド・ダ・ヴィンチは青年期の 14 年間を工房で過ごし，観察力，描写力，身体構造から宇宙天体力学まで多岐にわたって修行僧的に学んだ。これは課題解決にひたすら打ち込む特権が与えられた状態であり，思うままモラトリアム状態を活用できたと解釈された。

ナルシシズム傾向：フレデリック・ショパン，ヘレーネ・ドイチェ，平塚らいてう，太宰治，サン・テグジュペリなどの資料から，共通して「ある種の自己中心性，うぬぼれ，自信，自己顕示欲など，いわゆる＜ナルシシズム傾向＞」が示され，幼少期に育まれるとされた。この傾向についても更に，①それがストレートに示され，自己評価が非常に高く自信のあるタイプ（“中心層のナーシスト”）と②そうでないタイプ（“周辺層のナーシスト）があると分析された。たとえば①については先に挙げたショパンが示され，ナルシシズムが作品をつくりだすエネルギー源となるなど自己実現傾向に創造的・生産的にはたらく様子が示されている。一方②では，太宰治が極度に賞賛欲求が強く、しかも自己感受性も非常に強く傷つきやすく，そこから自己防衛や他者への甘えが生じたと分析された。

否定的アイデンティティについての主題分析

三好昭子（日本女子体育大学）

Erikson は否定的アイデンティティについて，「発達の危機的な段階において，最も望まれない・危険な・しかし最もリアルなものとしてその人に示された，あらゆる同一化や役割にひねくれた基礎を持つアイデンティティである（Erikson, 1980/2011, p151）と定義している。否定的アイデンティティの選択について Erikson は，アイデンティティ拡散の諸相の1つとして非行青年の例をあげることが多いが，何者にもならないことや自殺についてもふれている。しかしながら抽象度が高かったり，具体的であっても断片的であったりして，全生活空間における心理力動性までは見えてこない。そこで本シンポジウムではワークショップ形式で，ボードレール，谷崎潤一郎，芥川龍之介の伝記資料を用いて，否定的アイデンティティについての主題分析を体験していただく。

西平（1983）が個別分析を行ったボードレールは，若年にして飲酒・喫煙，暴力などによって中学を退学になり，その後も放蕩を重ねるといった荒廃した青年期を過ごした。谷崎潤一郎もまた，青年期に，自分は悪人である，背徳漢であると自己定義し，放浪生活に身を投じ親不孝を繰り返した（三好, 2008）。まさに典型的な非行青年であり，否定的アイデンティティを選択した事例だと考えられるが，芥川龍之介はいわゆる非行青年ではなく，むしろ優等生だった。にもかかわらず「僕は意気地のない無価値な人間」「あまり碌な事の出来る人間ぢゃない」など否定的アイデンティティを選択していた。これらの事例の共通点や相違点，さらには共通した原因や影響などについて実際の伝記資料を用いて分析していただく。

文献

Erikson, E. H. (1980). Identity and the Life Cycle. W. W. Norton （西平直・中島由恵 訳 2011 アイデンティティとライフサイクル 誠信書房）

西平直喜（1981）. 伝記にみる人間形成物語（2）：子どもが世界に出会う日 有斐閣選書

西平直喜（1983）. 青年心理学方法論 有斐閣

西平直喜（1996）. 生育史心理学序説 金子書房

大野 久・三好昭子・茂垣まどか・赤木真弓 （2023）. アイデンティティ研究のための伝記分析：生涯発達の質的心理学 福村出版

居場所研究のこれまでとこれから

”Ibasho” Research: Looking Back and Moving Forward

企　画　者：小沢一仁（東京工芸大学）
話題提供者：益川優子（中部学院大学）　岡村季光（奈良学園大学）　則定百合子（和歌山大学）
石本雄真（鳥取大学）　鎌苅慧哉（株式会社 suiten）　高田治樹（一橋大学）　神崎真実（京都教育大学）

企画趣旨

「居場所」という言葉は日常的に親しまれており，着手しやすい研究テーマである反面，居場所をどう扱うかについて特有の難しさがつきまとう。本学会では，第 6 回大会（1998）においてシンポジウム「青年心理学から見た『居場所』の問題」（企画・都筑）が開催され，その後，量的・質的双方のアプローチから様々な居場所研究が蓄積されてきた。本シンポジウムでは、居場所研究者が集い，これまでの研究におけるそれぞれの成果を振り返り，居場所研究が抱える独特の壁や課題を共有し，居場所研究の発展をめざして議論を深める場としたい。

対人関係における居場所の今後について

益川優子

これまでの研究で，対人関係の中でもたらされる心理的居場所である居場所感について，対象者を特定せず，居場所感の概念を対象者に委ねた調査では自己存在意義授与，指南授与，親近感，気軽さの因子が抽出された（益川，2019）。多くの青年が，居場所感をもたらされる対象者は友人と母親としている。その中で，親友一人を想定してもらい，上記の調査で得られた項目について調査を行った（益川，2020）。また，上記の調査で最も居場所感を得られる人物を母親とした者の居場所感を分析したところ，（母親の）自己世界所有の因子が抽出された（益川，2023）。また，対人関係の中で居場所がないと感じる時や教師に対する居場所感についても研究を行った（益川，2019）。今後は，友人に対する居場所感について，友人の詳細，複数の友人関係，そして，母親との心理的距離と居場所感，友人関係と母親との関係，母親以外の家族との関係と居場所感についても検討していきたい。

安心感を手掛かりに居場所を捉える試み

岡村季光

これまで，居場所を「自分が安心していられる場所」（豊田・岡村，2001）と定義づけ，空間を基点とした時間・人間という観点で居場所の検討を行った。その結果，誰と同じ時間を過ごすかにより安心感に差異を見出した。また，人への安心感の志向と対人感情，情動知能，アタッチメントスタイル，ひとりで過ごすことの感情・評価との関連，大学入学前後の各友人への安心感と現在の学校適応感との関連を検討した。加えて，日本・台湾在住の各大学生を対象とした人への安心感の地域間及び性別比較も試みた。従前より安心感は居場所の基底概念であるという指摘は数多くあるものの，安心感を手掛かりに居場所を捉えるという試みは課題もある。居場所を実証的に研究することの難しさについて共有を図りつつ，今後の居場所研究の展望について議論を行いたい。

心理的居場所感の転換と展望

則定百合子

これまで，中学生から大学生までを対象とし，重要な他者との関係性における心理的居場所感の構造と機能に関する研究を行い，心理的居場所感が「安心感」「被受容感」「本来感」「役割感」といった感覚から成ることを明らかにしてきた。一方，近年，SNS の普及，仮想空間の拡大，AI の急激な発展をはじめとした種々の社会的変化は対人関係の在り方に影響を及ぼしており，こうした情勢に伴って個々の心理的居場所も多様化している可能性がある。また，発達的観点からは，青年期から成人期への移行期において，安心感や被受容感といった受動的な心理的居場所感にとどまらず，所属コミュニティへ主体的に関与し，自らの役割や存在意義を構築していく「能動的な心理的居場所感」への転換という視点も重要であろ

う。本話題提供では，こうした社会的変化と心理的居場所感の能動的転換をふまえ，今後の展望について議論を深めるきっかけとしたい。

「居場所」の研究と居場所欠乏感をなくすための研究と　石本雄真

これまで，居場所感が心理的健康や学校適応にどのように影響するのかについて検討したのち，居場所欠乏感をもちにくい環境づくりや居場所欠乏感を減らすための具体的支援について検討してきた。「居場所」という言葉が心理的な意味を伴って用いられるようになって 30 年が経ち，近年では盛んに「居場所づくり」が行われている。しかしながら，現在居場所という言葉は多様な意味をもって用いられており，一意の意味を共通理解することは不可能である。この状況では，可能な限り「居場所」という言葉を用いることを避け，より具体的な他の表現を用いる必要があるとさえ言える。それでも，「居場所」や「居場所づくり」という表現はその意味内容を明確にすることなく支援の現場で多用され，居場所欠乏感をもつ者と提供側とのすれ違いも懸念される。このことを踏まえて，現在，上記の具体的支援等の検討に加えて，「居場所」とされる支援者側がどのように居場所を捉えているのかについての調査を行っている。

経営者の青年期の関係経験と「居場所」――継続的対話にみる意味づけの動態　鎌苅慧哉

現在，組織開発や人事の実践に携わりながら，中小企業経営者との継続的な対話記録をもとに，経営者の認知や意味づけの変容過程を研究している。ある経営者は，幼少期から青年期にかけて父親に抱いた怖さと尊敬・憧れを，現在の経営者像や従業員との関わりを理解する文脈として自ら語る。また，青年期には身近な大人から「重要視されていた」と振り返り，その人を介してスポーツに親しみ，身体の小さな選手が工夫や技で大きな相手に勝つ姿に惹かれた経験を語る。継続的な対話の中では，これらの経験と，本質や原理原則を捉える現在の思考とのつながりも，新たに意味づけられている。居場所には被受容感等の心理的機能が示されるが（杉本・庄司，2006），こうした人を支える関係や経験をどこまで「居場所」と捉えうるのか，その概念上の境界が課題となる。今後は，対話の中で青年期の経験がどのように意味づけ直され，現在の自己理解や経営者としてのあり方と関連していくのかを検討したい。

青年の居場所となる集団の広がりと展望　高田治樹

青年期において，様々な集団が居場所となることを，これまでの研究で明らかにした。大学生を対象とした研究（高田，2014；高田・松井，2017）では，学生がサークル集団を「居場所」と表現する語りが得られ，集団への愛着的態度の背後に居場所感が存在すると示した。また高校生では，自宅や学校だけでなく，SNS 等のインターネット空間も居場所として認識され，居場所の対象が物理的な場所を超えて広がっている一方，居場所があることが必ずしも適応を促すとは限らないことも明らかにした（高田,2024）。今後は，「推し活」に代表されるような対面でのつながりが薄いファンダムのような集団も居場所となりうるか，また運動部活動の地域移行が進む中で，学校という制度を離れた地域の集団や指導者との関係が新たな居場所となりうるかなど，集団の形態や結びつきの強さそのものが多様化していく中で，居場所研究がどのように発展しうるかを検討していきたい。

公共的な居場所の経験をとらえる―Matteringを手掛かりとして　神崎真実

居場所は，安心して過ごせる場や自分らしくいられる経験として研究されてきた。主に，家族や友人など身近な他者や，対人援助職者との関係性が想定されてきた。一方で，居場所は，身近な他者との関係性に留まらず，異質性を含む様々な人が集うなかでも生じうる。こうした場は，特定の関係性に閉じず様々な人にひらかれている点で，公共性がある。本話題提供では，公共的な場における居場所経験に注目し，社会文化的アプローチに基づき，居場所を個人の心理状態としてのみ捉えるのではなく，他者との関係や活動のなかで生成する経験として捉えることを試みる。Mattering を手掛かりに，公共的な居場所における注意と関心について考察したい。

日本の青年心理学がめざしたこと
――日本青年心理学会前史――

白井利明
（大阪教育大学名誉教授）

The initial intention of adolescent psychology in Japan: The history leading to the foundation of Japan Society of Youth and Adolescent Psychology

Toshiaki SHIRAI
(Emeritus Professor of Osaka Kyoiku University)

1. 問題と目的

日本青年心理学会は青年心理談話会（1963～1968：会の呼び名は人によって違うがこれで統一する）と青年心理学研究会（1968～1993）（どちらも「日本」はつかない）の発展として設立された。この3つの組織はいずれも「青年心理」をキーワードに学際的な研究交流を行うが，青年心理学とは何かは絶えず問われなければならない。その意義と課題について，歴史をとおして考える。

2. 方法

青年心理談話会と青年心理学研究会の会員とそれに関係する人の論文や回想（例：「青年心理学研究」第 20 号の特集），白井の青年心理学研究会会員での体験（1982～1993）に基づいて考察した。

3. 結果

青年心理談話会は，依田新（1905-1987）を囲む形で，1963 年に発足した。依田（1968, p. 1）は，発足の会合で，青年心理学の研究が立ち後れている現状を嘆き，児童心理学からの独立を訴えた。「児童心理学はたんに児童を理解するというよりは，精神の発生（Genese）が問題であり，そのかぎり多くの心理学者の関心を集め，動物心理学や学習心理学の理論によってその研究が刺激された」が，「青年心理学では，そのような発生の問題よりは，むしろ青年の理解そのものが課題になっている」。青年期は「すでに複雑な 1 つのまとまった構造をなしているものが再構造化される過程であるから，児童心理学のように，単純化された原始的精神として容易に一般化しうる場合とは，その研究のむずかしさは比較にならない」。しかも，「青年を理解するということは，青年の内面的世界に立ち入ることであり，それはかれらにとって現実がどのような意味をもっているかをとらえることである」。「だから青年心理学では，青年の内面的世界に探りを入れるために，質問紙法によって青年自身に内省を求めるという方法がとられてきた」が，「あまり成果的ではなかった。それは多くの場合，研究者に明確な問題意識がなかったことによる」。「問題意識がないということは，理論的立場をもたないということである。青年心理学不振の原因の 1 つは，たしかにこの点にあったと言ってよい」と問題提起した。

依田はまた「自然科学をモデルにした実証的，要素的，分析的な方法だけが科学という名に値する」という「狭義の科学主義，実証主義」（依田, 1977, pp. 52-53）に疑問を持っていた。

依田は大日本図書の現代心理学ブックスの広告（『青年の心理』（依田新編，全6巻，1965～1966，大日本図書）の巻末）で「われわれの生活には，つねに多くの問題があり，解決を迫られる。そんなときに心理学は少なくとも一つの見方を教えてくれる。結局，人生は問題の連続であり，悩みの繰り返しであるかも知れない」とし，心理学は「人生のさまざまな問題について」「知見を語ってくれる」「人生の良き伴侶」となると書いた。依田の心理学への期待だった。

西平直喜（1926- ）は依田の問いに正面から答えた。西平（1964, p. 102）はまず「青年心理学でいうと

ころの科学性とは何か？」と問い，児童心理学が行うような，各機能に分解し，その綜合として子どもの心を捉える，といった自然科学に準じた方法は不適当であるとし，「人文＝社会科学の枠の中で，弁証法理論，ことに変化―発現―発展の論理として用いられるカテゴリー論を駆使する」べきだとした（西平, 1964, p. 111）。具体的には，第1に，「青年期はどういう発達の時期なのか」（p. 102）と問い，「生活力と生活関係の照応」という原理から，青年期の身体の成熟や自我感情の昂揚（生活力）などからくる矛盾の激化と不安定性の増大や自我の再構成（古い生活関係の混乱・分裂と新しい生活関係の創造）という動きで説明した。第2に，「現代日本青年は，どのような感情を持ち，どのように考え，どのような生き方をしているのか？」（p. 104）と問い，第1の問いへの答えである「青年性」を必然性とした上で，「必然性は偶然性を媒介してのみ発現する」として，つまり歴史＝社会的状況を反映したものとして，農村と都市，戦前と戦後の青年の違いを説明し，それを「世代性」と名づけた。第3に，「現代日本青年はどのように生きる可能性を持っているのか？ この一人の青年はどう指導すべきであるか？」（p. 105）と問い，第1と第2の知見を適用する応用問題であるが，第3の問いこそが「青年心理学の中核」であるという。それは一人ひとりの個々の心理現象を「（自然科学的に孤立してとらえて組み立てるのではなく），全生活空間の中でもつ意味という観点から再構成して（青年に：白井）認識させる点である」（p. 105）とした。

1968 年，青年心理談話会は青年心理学研究会に発展的に解消した。学会にする意見があったが，学会になると形式化し，温かい雰囲気の中での率直な議論ができないとして実現しなかった。

青年心理学研究会を大きく揺さぶったのは 1970 年代初頭の学園紛争だった。西平（1973, p. 3）は「青年心理学は現在，危機的状況下に立たされている」と述べた。「青年心理学は無力なのか」という問いは，青年心理学者が青年と共に在る存在をめざしたものの，いやそれをめざしたからこそ問わざるをえなかったものだろう。

青年心理学研究会の内部で学園紛争の受け止め方には世代差があった。大学の側に立って学園紛争をおさめなければならない上の世代，学生と同世代の子どもを持ち，かつ戦前に陰鬱な青年期を過ごした次の世代，戦後生まれで戦前の軍国主義を知らない若い世代では，大学や学問に対する態度も含めて感覚が違った。その後の展開をみると，そのころから，今日につながる青年心理学のさまざまなかたちが現れてきたと思われる。

研究会自体の開催はないが，1975 年から 3 年間にわたり日本教育心理学会の自主シンポジウムで多様な方法論が議論された。1980 年からは発足以来，東京学芸大学にあった事務局が全国の各地区の持ち回りとなって研究会を毎年開き，学会誌も創刊した。若い会員を積極的に勧誘し，活躍させ，1993 年の日本青年心理学会の設立にこぎつけた。

4. 考察

以上から，第1に，青年期の発達特性に合った研究方法を開発する意義，第2に，誰かが問いかけ，他の誰かが答える，といった「問い」の共有の意義が示された。今後は，第1に，青年心理学の成果を児童心理学や生涯発達心理学，他の心理学領域や諸学問と往還する課題，第2に，査読付論文のような“閉じたもの”だけでなく、対面でも誌上でも「問い」を共有しあう“開かれたやりとり”を今後も豊かにしていく課題がある。

引用文献

西平直喜（1964）. 青年の心理学的特性の形成機構―方法論的視点から― 心理学評論, *8*, 102-111.

西平直喜（1973）. 青年心理学の現代的課題 依田 新ら（編） 青年心理学研究の課題と方法 現代青年心理学講座 第1巻 金子書房, pp. 1-30.

依田 新（1968）. まえがき 依田 新（編） 現代青年の人格形成 金子書房, pp. 1-7.

依田 新（1977）. 心理学における折衷主義（eclecticism）―心理学者の苦悶の表現― 愛知学院大学論叢, *7*, 50-55.

大学生の友人に対する「寛容」の構造
――複数の葛藤生起場面における構造の検討および特性共感との関連――

服部茜[1]・藤井恭子[2]
([1]関西学院大学大学院　教育学研究科・[2]関西学院大学)

The Structure of *Kan-yo* Toward Friends Among University Students:
Structure Across Multiple Conflict Situations and Its Association with Trait Empathy

Akane HATTORI[1], Kyoko FUJII[2]
([1] Graduate School of Education, Kwansei Gakuin University [2] Kwansei Gakuin University)

1. 問題と目的

本研究は，寛容研究において焦点が当てられてこなかった友人関係に着目し，青年期の友人関係における「寛容」の構造を明らかにするものである。

心理学における「寛容」は，主として容認(tolerance)とゆるし(forgiveness)の 2 つの観点から検討されてきた。また，いずれの研究においても，寛容を比較的安定した個人差として捉える立場と，特定の相手や状況に対する文脈依存的な反応として捉える立場が存在する。実際，容認については，個人があらゆる状況で一様に寛容あるいは不寛容なのではないことが指摘されている(Butrus & Witenberg, 2013)。また，ゆるしについても，一般的なゆるし傾向が存在する一方で，そのような特性から個別の出来事におけるゆるしを十分に予測できるとは限らず，謝罪の有無，侵害の深刻さ，関係の親密さなどの状況要因が重要であるとされる(Riek & Mania, 2012)。

服部(2025)は，こうした文脈依存的立場を採用し，葛藤生起場面を提示したうえで寛容尺度への回答を求めている。しかし，Khullar et al.（2021）が親しい同性友人との間で生じる困難を複数の側面に分類しているように，友人関係における葛藤にはさまざまな形態が存在する。そこで本研究では，容認とゆるしの 2 因子構造を想定した寛容尺度の改訂版を作成し，服部（印刷中）をもとに新たに作成した 4 つの葛藤生起場面において，共通した因子構造が認められるかを検討する。

さらに，本研究では，文脈依存的な寛容と比較的安定した個人特性との関連が，異なる葛藤場面を越えて一貫して認められるのかを検討するため，特性共感を取り上げる。先行研究では，共感的関心が容認の予測因となること(Butrus & Witenberg, 2013)や，共感とゆるしの関連(Riek & Mania, 2012)などが報告されている。

一方，特性共感は比較的持続的で一般的な個人傾向であるのに対し，寛容は対象や状況によって変化する文脈依存的な判断である。実際，共感の各側面がどの程度重要となるかは状況によって異なることも指摘されている(Demel et al., 2025)。そこで本研究では，4 つの友人間葛藤場面における「寛容」と，特性共感のうち視点取得および共感的関心との関連を検討し，特性共感と寛容との関連が場面を越えて一貫して認められるのかを明らかにする。

2. 方法

調査時期　2026 年 6 月～8 月

調査協力者　大学生 1277 名(男性 599 名，女性 670 名，その他 8 名)，平均年齢は 19.73 歳(SD=1.29)であった。

調査内容　関西圏の国立・私立大学において対面で質問紙調査を実施した(計 902 名)。関西圏以外の大学生については，アイブリッジ株式会社の Freeasy を利用して調査を行った(計 375 名)。

調査では普段最もかかわりの多い友人を想定してもらい，当該友人と会う頻度，親密度，付き合いの期間について回答を求めた。その後，服部(印刷中)を参考に作成した，優位性主張・心情軽視・無責任・傲慢の 4 場面のいずれかを提示し，当該友人に対する不快感の有無，寛容尺度改訂版，対人反応性指標(日道他, 2017)への回答を求めた。

3. 結果

寛容尺度 32 項目について，4 場面ごとに最尤法 Promax 回転による探索的因子分析を行った。いずれかの場面で因子負荷量が.40 未満となった項目を除外し，21 項目を抽出した。21 項目について再度因子分析を行ったところ，全場面で「否定的な感情・認知・行動の低減(ゆるし)」と「考えや価値観に対する異質性認知(容認)」の 2 因子構造が認められた(Table1)。さらに場面ごとに確認的因子分析を行った結果，KT18 は容認因子への標準化因子負荷量が 4 場面を通して相対的に低かったため削除した。以上より，容認 11 項目，ゆるし 9 項目の計 20 項目を最終項目とした。

Table1
寛容尺度（心情軽視）21項目版　因子分析（最尤法・プロマックス回転）

項目		Factor1	Factor2
否定的な感情・認知・行動の低減（α=.91, ω=.91）			
KF32	イライラした気持ちを長く引きずらない	**.91**	-.17
KF24	受けた不快な仕打ちを根に持たない	**.81**	-.10
KF31	いつまでも心の中で友人を批判し続けない	**.76**	-.07
KF21	不快に感じたことばかりに意識を向けない	**.76**	-.06
KF20	友人への否定的な評価にこだわり続けない	**.71**	-.06
KF16	友人を責める気持ちを持ち続けない	**.68**	.15
KF12	友人への怒りや不満にとらわれ続けない	**.67**	.06
KF10	不満や不快感についてあまり深く考えない	**.62**	.05
KF23	不満や不快感にいったん区切りをつける	**.62**	.04
考えや価値観に対する異質性認知（α=.89, ω=.90）			
KT6	自分とは違う考えだと諦める	-.27	**.89**
KT25	友人と考え方が違うので仕方がない	.08	**.74**
KT9	友人のスタンスを，自分とは別個のものとして諦める	-.04	**.70**
KT17	自分とは違う価値観なのだと割り切る	.20	**.69**
KT26	自分とは違う見方だとみなす	.06	**.68**
KT2	友人の考え方は簡単には変わらないので仕方がない	-.16	**.58**
KT22	価値観の違いから生じた不満だとみなす	-.06	**.56**
KT19	友人の基準は自分の基準とは異なるのだと考える	.12	**.53**
KT4	友人と自分の異なる点として受け止める	.19	**.51**
KT18	考え方の違いによる不快感だと捉える	-.07	**.47**
KT7	友人の一側面として捉える	.30	**.42**
KT28	友人のひとつの姿なので仕方がない	.31	**.41**
	因子間相関　F1		.53

注) KT18は確認的因子分析で負荷量が低かったため，削除

最終的に採用した 20 項目について場面ごとに信頼性を検討したところ，容認因子では α=.88～.93，ゆるし因子では α=.83～.91 であり，いずれの場面においても十分な内的一貫性が確認された。

続いて，20 項目の 2 因子モデルについて，4 場面を対象とした多母集団同時分析を行った。配置不変モデルにおける適合度指標の値は CFI =.887，RMSEA =.041(90% CI [.038, .044])であった。

次に，弱測定不変モデル(各項目の因子負荷量が場面間で均質)では，CFI =.886，RMSEA =.040(90% CI [.037, .042])となった。配置不変モデルと弱測定不変モデルを比較した結果，ΔCFI =−.001，ΔRMSEA =−.001 の値が得られた。配置不変モデルと比較して適合度の実質的な悪化は認められず，Chen(2007)の基準(ΔCFI ≤.010，ΔRMSEA ≤.015)を満たしていたことから，このモデルの 4 場面間での均質性は，ある程度確認されたといえる。

次に，共感性との関連を検討したところ，全体では容認とゆるし双方に，共感性との弱い相関がみられた(Table2)。ただし，場面別にみると有意な関連の有無にはばらつきが認められた。特に，容認と視点取得，ゆるしと共感的関心は，多くの場面で無相関であった。。

Table2
寛容尺度と対人反応性指標の関連

	容認		ゆるし	
	視点取得	共感的関心	視点取得	共感的関心
優位性主張	.27 **	.30 **	.33 ***	.18
心情軽視	.10	.12	.23 **	.12
無責任	.11	.12 *	.23 ***	.14 *
傲慢	.11	.13 *	.11	.11
全体	.12 **	.13 ***	.20 ***	.13 ***

4. 考察

本研究では，4 つの葛藤生起場面を通して，「容認」と「ゆるし」の 2 因子構造が概ね共通して認められた。このことから，友人関係における寛容には，葛藤内容が異なっても一定程度共通した構造が存在すると考えられる。

また，特性共感と容認・ゆるしとの関連は全体として弱く，場面別にみても一貫した関連は確認されなかった。Riek & Mania(2012)でも，特性共感とゆるしの関連よりも，特定の侵害に対する状態共感とゆるしに強い関連が示されている。友人関係における寛容は，一般的な共感傾向だけで決まるのではなく，個々の葛藤場面で生じる相手への理解や共感など，状況に即した心理過程によって左右される可能性があることが示唆された。

文献

Riek, B. M., & Mania, E. W. (2012). The antecedents and consequences of interpersonal forgiveness: A meta-analytic review. *Personal Relationships, 19*(2), 304–325.

自己基準的・他者基準的意思決定尺度の作成とモラトリアムとの関連

髙坂康雅 [1]
([1] 和光大学)

Development of Self-Referential and Other-Referential Decision-Making Scales and Their Relationships with Moratorium

Yasumasa KOSAKA[1]
([1]Wako University)

1. 問題と目的

青年期は内省や役割実験を通して，自己の重要な選択事項に対して意思決定を行い，自らの生き方を決めていく時期である。しかし，近年，自己の重要な選択事項においても，自分で決めたくない，他者の基準を優先する若者が指摘されている。たとえば，金間（2022）は，「この心理（自分からは決めたくない，誰かに決めてもらった方が楽だという心理）は子どもだけではなく，大人になっても作用する。大学生なら就職先の選択が典型的だ。自分で決めようとしない学生は本当に多い」と述べている。従来のように，自己の重要な選択事項での意思決定において，自己内の基準を重視する傾向を，本研究では自己基準的意思決定と呼び，他者の評価や基準を優先する傾向を他者基準的意思決定と呼ぶ。

髙坂（2016a，2016b）は，近年の若者のなかには，上昇志向や野心はなく，現状維持を尊び，周囲から後れをとることに対して強い不安をもつ一群がおり，これをリスク回避型モラトリアムと呼んでいる。これは，Erikson が指摘した従来のモラトリアムを生きる青年（古典的モラトリアム）や，小此木（1978）がモラトリアム人間と呼んだ，自己探求を回避・延期しモラトリアム自体を目的とする青年（消費社会型モラトリアム）とは異なる特徴を有していることが示されている（髙坂，2016a）。このようなモラトリアムの過ごし方は，意思決定において自己基準を優先するか，他者基準を優先するかにも関わってくると考えられる。

そこで，本研究では，まず意思決定において自己基準を重視する程度，他者基準を優先する程度を測定する尺度（自己基準的・他者基準的意思決定尺度）を作成し，妥当性を検証する。次いで，髙坂（2016b）を参考に，モラトリアムの様相による意思決定の基準の比較を行う。

2. 方法

調査方法・分析対象者　2026 年 6 月 29 日から 7 月 2 日に，アイブリッジ株式会社が提供するオンライン調査サービス「Freeasy」のモニターのうち，18 歳から 25 歳の未婚の男女各 500 名を対象にスクリーニング調査を実施した。このうち，4年制男女共学の大学に通っている 449 名を本調査の対象とした。本調査は，男女各 150 名を上限として 7 月 3 日から 7 月 8 日に実施し，男女各 150 名の回答が得られた。このうち，不適切な回答をしている者を除き，267 名（男性 127 名，女性 140 名；平均年齢 20.2 歳，標準偏差 1.7 歳）を分析対象者とした。

調査項目　**①自己基準的・他者基準的意思決定尺度暫定項目**　自身の重要な決定をする際に自分の内的な基準を優先するか，他者の評価等を優先するかを測定するために，自己基準的意思決定5項目，他者基準的意思決定 5 項目を独自に作成した。「普段のあなたの考えや行動にどの程度あてはまりますか」という教示のもと，5 件法（まったくあてはまらない―とてもあてはまる）で回答を求めた。

②自意識尺度 6 項目版　自己基準的・他者基準的意思決定尺度の妥当性を検討するため，鈴木（2020）の自意識尺度6項目版（公的自意識3項目，私的自意識3項目）を使用した。教示文・選択肢は①と同じであった。

③モラトリアムの特徴項目　モラトリアムの特徴を把握するため，髙坂（2016）が作成した自立欲求 5 項

目，全能感項目 5 項目，後れをとることへの不安 5 項目を使用した。教示文・選択肢は①と同じであった。

倫理的配慮　本研究は，和光大学大学院心理学専攻研究倫理審査委員会の承認を得て行った（承認番号 20260502）。

3. 結果と考察

自己基準的・他者基準的意思決定尺度暫定項目の因子分析と信頼性の検討　最尤法による因子分析を行ったところ，固有値 1.0 以上で 2 因子が抽出された。そこで，因子数を 2 に指定して，最尤法・promax 回転による因子分析を行ったところ，2 因子が抽出され，第1因子には自己基準的意思決定の 5 項目が，第 2 因子には他者基準的意思決定の 5 項目が高い負荷量を示した。

それぞれ 5 項目の α 係数を算出したところ，自己基準的意思決定は.75，他者基準的意思決定は.66 であった。5 項目の平均を算出し，自己基準的意思決定得点，他者基準的意思決定得点を作成した。

自己基準的・他者基準的意思決定尺度の妥当性の検討　自己基準的意思決定得点，他者基準的意思決定得点と公的自意識得点，私的自意識得点との関連を検討したところ，自己基準的意思決定得点は公的自意識得点とは無相関（r=.09，*n.s.*）であったが，私的自意識得点とは有意な中程度の正の相関を示した（r=.41，p<.001）。他者基準的意思決定得点は公的自意識得点とは有意な中程度の正の相関（r=.56，p<.001）を示し，私的自意識得点とは有意な弱い正の相関を示した（r=.19，p<.01）。これからか，信頼性・妥当性を有した自己基準的・他者基準的意思決定尺度が開発されたと言える。

モラトリアムの様相による自己基準的・他者基準的意思決定得点の比較　まず髙坂（2016）に基づいて，自立欲求得点，万能感得点，後れをとることへの不安得点の Z 得点を用いて，クラスター数を 4 に指定してクラスター分析を行った。それぞれの特徴から，クラスター1 をリスク回避型モラトリアム群，クラスター2 を古典的モラトリアム群，クラスター3 を不適応群，クラスター4 を消費社会型モラトリアム群とした。

次に，クラスターを要因として，自己基準的意思決定得点及び他者基準的意思決定得点について一要因分散分析を行った（Table 1）。その結果，いずれも要因の効果は有意であった。多重比較（Tukey 法）を行ったところ，自己基準的意思決定得点では，古典的モラトリアム群が他の 3 群よりも有意に得点が高かった。また他者基準的意思決定得点では，古典的モラトリアム群とリスク回避型モラトリアム群が，他の 2 群よりも得点が高いことが明らかとなった。

ここから，リスク回避型モラトリアムは，他者基準を重視する一方，古典的モラトリアムは自己基準と他者基準のいずもれ重視するため葛藤が生じていると推測される。

Table 1

クラスターを要因とした自己基準的意思決定得点，他者基準的意思決定得点の一要因分散分析結果

	クラスター1 古典的 (60名)	クラスター2 リスク回避 (76名)	クラスター3 不適応 (46名)	クラスター4 消費社会 (85名)	*F* 値（*df*）	多重比較
自己基準的意思決定得点	3.48 (0.62)	3.79 (0.65)	3.38 (0.70)	3.33 (0.68)	7.29(3,263)***	1・3・4<2
他者基準的意思決定得点	3.34 (0.61)	3.41 (0.64)	3.02 (0.60)	2.75 (0.61)	18.67(3,263)***	3・4<1・2

*** p <.001

青年期クローン病当事者におけるアイデンティティの変容プロセス
――代替療法への傾倒と「よりよく生きる」主体の再構築――

多田真太朗
（北海道大学大学院教育学院）

The Process of Identity Transformation in Youth with Crohn's Disease: Devotion to Alternative Therapy and the Reconstruction of the Subject "Living Well"

Shintaro TADA
(Graduate School of Education, Hokkaido University)

1. 問題と目的

クローン病（以下，CD）は，激しい腹痛や慢性的な下痢，発熱，体重減少などを繰り返し引き起こす消化器系の指定難病であり，10～20 歳代の若年期に好発する。この時期は青年期にあたり，進学や就職などのライフイベントを迎えるとともに，親からの自立を伴うアイデンティティ確立（Erikson, 1959/1973）という重要な心理社会的主題に直面する。それゆえに，CD への罹患は，様々な症状や制約のみならず，ボディイメージの低下や同世代との比較を通じた自信の喪失を引き起こし，青年期の自立に深刻な影響を及ぼす。

CD を含む炎症性腸疾患（以下，IBD）当事者を対象としたレビュー論文では，予測不可能な身体症状が絶え間ない不安を生み出すこと，そして症状への羞恥心が病の秘匿や自律性の喪失を招くことが示されている（Fourie et al., 2018）。

一方で，IBD をはじめとする慢性疾患の経験において，病は単に主体を脅かす否定的体験にとどまらない。過度な社会的要請から一時的に身を守る免責としての「病者役割」（Parsons, 1951; Kleinman, 1988）として機能する側面や，奪われた統制感を取り戻すべく生活管理の実践を通じて「回復の物語」（Frank, 1995）へと執着する側面も論じられてきた。

しかしながら，これら既存の知見は，病を受動的な被害や喪失，あるいは静的な類型として切り取るにとどまり，当事者の実像を捉えきれているとは言い難い。完治のない慢性疾患を生きる当事者にとって，病は多面的で両義的な性格を帯び，それは時間とともに変化していく。

こうした病との関係性の変容は，秘匿や葛藤を伴うため外部からの調査では捉え難く，その実像に迫るには，当事者の内側から「生きられた経験」を捉え直すアプローチが不可欠である。

そこで本研究では，オートエスノグラフィーを用い，青年期 CD 当事者におけるアイデンティティの変容プロセスを解明することを目的とする。

2. 方法

分析資料と研究者の位置づけ

CD 当事者である筆者の約 10 年間（2014 年発症～）の一次資料（電子メモ，治療手記，ウェブ上の投稿，開示手続きを経た診療記録［2020～2021 年］）を対象とした。研究者は分析主体と参加者の二重の役割を担った。

分析手続きと厳格性の確保

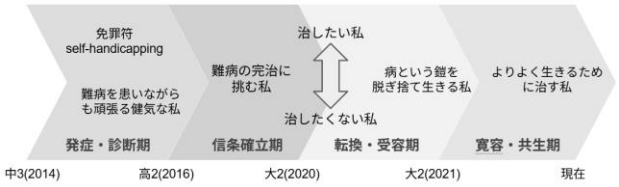
全データを「主観的感情記述」と「客観的医学データ」に分類・照合するマトリックスを作成した。両者の「乖離」に着目して主観的意味の大きい 11 エピソードを選定し，当時の記録と現在の省察を往還させつつ青年期の心理社会的発達理論の視点から治療観の変容を抽出した。また，トライアンギュレーションおよび指導教員らとのピア・デブリーフィングにより厳格性を担保した。

分析時期と倫理的配慮

分析は 2025 年 10 月～12 月に実施した。関係者のプライバシー保護のため施設名・個人名を匿名化し，時期の相対化による特定防止および記述のトーンに配慮した。

3. 結果

Figure 1
青年期CD当事者における自己認識と治療観の変遷



分析の結果，筆者のアイデンティティ変容は，病をめぐる自己認識と関係性（述語）の変遷として４つのフェーズに整理された（Figure 1）。

（1）発症・診断期（中 3～高 2）：病を身体に【宿し】，過酷な境遇を「免罪符（self-handicapping）」として自己否定感を埋め合わせる「難病を患いながらも頑張る健気な私」を形成した。

（2）信条確立期（高 2～大 2）：代替療法との出会いから病を【乗り越える】べき対象と位置づけ，「難病の完治に挑む私」として自力完治を目指し【闘う】信条を確立した。その一方，内面では「治したい私」と免罪符を手放せない「治したくない私」の激しい葛藤が生じていた。

（3）転換・受容期（大 2）：身体的限界に直面して全能感が破綻する中，医療者への信頼から他者にハンドルの一部を【委ねる】ことを許容し，「病という鎧を脱ぎ捨てて生きる私」へと移行した。

（4）寛容・共生期（大 2～現在）：医学や自己の身体の不確実性を【寛容し】，病と【ともに生きる】調和を模索する中で「よりよく生きるために治す私」へと転換した。

4. 考察

本研究の目的は，オートエスノグラフィーを用い，青年期 CD 当事者におけるアイデンティティの変容プロセスを解明することであった。分析の結果，病を自己防衛のために身体に【宿す】段階から，自力完治を目指して【闘う】段階，限界を悟り他者に【委ねる】段階を経て，不確実性を抱えつつ病と【ともに生きる】段階へと至る 4 相のプロセスが明らかとなった。この結果をふまえ，本知見がもつ臨床的・発達的示唆を以下の 2 点から論じる。

第 1 に，青年期における病とのアンビバレントな関係性の機序である。筆者にとって CD は単なる器官の異常ではなく，自己の境界線上に存在する「限りなく身近で都合の良い他者」であった。不安や社会的重圧に直面した際には自己防衛の盾として呼び寄せ，全能感が高まると排除すべき対象として対峙するという力動は，アイデンティティの探求・確立という過酷な発達的主題の中で，自我崩壊を防ぐ切実な適応戦略であったといえる。

第２に，自立の途上における「非合理な逸脱」の再評価である。本研究でみられた代替療法への傾倒は一見極端な事例に映るが，所与の前提を無批判に受け入れることを拒み，自らの身体と生の統治権を取り戻そうとする青年期特有の主体性の発露であった。既成の規範への反抗と挫折を経て，他者に適切に依存しつつ治療を引き受ける「真の自立」が可能となると考えられる。青年の迷走や遠回りを単なる「未熟な防衛」として拙速に修正するのではなく，自己決定を手探りする自立のプロセスとして捉え直す視座が求められる。

文献

Erikson, E. H. (1973). 自我同一性－アイデンティティとライフサイクル（小此木啓吾，訳編）. 東京：誠信書房. (Erikson, E.H. (1959). Psychological issues; Identity and the life cycle. Madison: International universities Press.)

Fourie, S., Jackson, D., & Aveyard, H. (2018). Living with Inflammatory Bowel Disease: A review of qualitative research studies. International Journal of Nursing Studies, 87, 149-156.

Frank, A. W. (1995). The wounded storyteller: Body, illness, and ethics. University of Chicago Press.

Kleinman, A. (1988). The illness narratives: Suffering, healing, and the human condition. Basic Books.

Parsons, T. (1951). The social system. Free Press.

大学生における「人生に選択肢がある」という認知の特徴
――キャリア発達と他者との関わりから――

溝口 侑[1]
([1]関西大学)

Characteristics of Perceived Life Career Options Among University Students: Relations with Career Development and Engagement with Others

Yu MIZOGUCHI[1]
([1]Kansai University)

1. 問題と目的

キャリアとは，ある時点で一つの進路を選択することによって決まるものではなく，生涯にわたる多様な役割の選択と経験の積み重ねによって形成されていく過程である（Super，1980）。とりわけ，個人の生き方が多様化する現代社会では，大学卒業時の進路選択がその後の人生を決定づけるとは限らない。

一方，日本の大学生は，新卒採用を中心とした就職活動のなかで，自分の「やりたいこと」を明確にし，それに合致する進路や職業を選択することを求められる傾向にある（児美川，2013）。しかし，変化する状況のなかでキャリアを形成していくためには，自分に合った一つの進路を見いだすだけでなく，自分には複数のキャリアの可能性があると認知できることも重要であると考えられる。

これまでのキャリア研究では，キャリア成熟（Super，1984）やキャリアに関する自己効力感（Hackett & Betz，1981）が主要な概念として扱われてきた。これらの概念が，キャリアについて考え，選択するためのレディネスや効力感を捉えるのに対し，自分にどの程度多様なキャリアの可能性があると認知しているかは，異なる側面として捉えられる。

Stange & Zyzanski（2013）は，職業上どの程度の選択肢があると認知しているかに着目し，Perceived Career Options Scale（PCOS）を開発した。しかし，将来について思い描く選択肢は，職業に限らず，どのように生きるかというより広い人生キャリアの観点から捉える必要がある。

そこで本研究の第一の目的は，大学生における認知された人生キャリア選択肢尺度（Perceived Life Career Options Scale: PLCOS）を作成し，その特徴を既存のキャリア発達の指標との関連から検討することである。

さらに，人生におけるキャリアの可能性は，他者との関わりを通して広がる可能性がある。例えば，キャリア形成にとって重要な存在として，自己の目標や将来像を形成する際の認知的な参照対象であるロールモデルが挙げられる（Gibson，2004）。他者の生き方や考え方に触れることで，自分だけでは思いつかなかった可能性に気づくきっかけとなり得る。

そこで本研究の第二の目的は，PLCOS とロールモデルがいるという感覚がどのように関連するのかを検討することである。

2. 方法

調査時期と対象者　2026 年 8 月に，インターネット調査会社マクロミルを利用し調査を行った。医歯薬系の学部・学科を除く 4 年制大学に通う大学生 2～4 年生を対象とし，878 人の回答を得た（2 年生：248 人，3 年生：263 人，4 年生：367 人）。

調査項目　a）選択肢の認知の測定には，職業キャリアの側面については PCOS（Stange & Zyzanski，2013; 筆者訳出）を用いた。さらに，人生キャリアの側面を捉えるために，独自に作成した PLCOS を用いた（項目は Table1 を参照）。b）キャリア発達に関する既存の概念との関連を検討するために，「人生キャリアレディネス尺度短縮版」及び「キャリア自己効力感尺度短縮版（人生課題への自信）」（坂柳，2019）を用いた。c）他者との関わりとの関連を検討するために，ロールモデルの保有感を

尋ねた。ロールモデル尺度（溝口・溝上，2020）を「『特定の誰か一人』のことではなく，出会った人たち」の中に，どれだけたくさんの「意識したり，手本にしたりする人がいるか」という教示へ修正し，項目については「～人がいる」と変更して用いた。

倫理的配慮　所属機関の倫理審査委員会の承認を受けた。

3. 結果と考察

作成した PLCOS の 7 項目について因子分析を行った。因子数の判定指標には一部相違がみられたものの，第一固有値が突出していたこと，MAP が一因子構造を支持したこと，さらに解釈可能性を考慮して，一因子解を採用した。

Table1
PLCOS の項目と探索的因子分析の結果

項目	平均値	標準偏差	負荷量
自分に合っていそうな生き方を、いくつか具体的に思い描くことができる	3.35	1.42	.80
将来どのように働き、どのように暮らすかについて、いくつかの考えや見通しを持っている	3.41	1.53	.76
社会や自分の状況が変化しても、いくつかの生き方の中から、状況に合わせて選び直せると思う	3.27	1.42	.74
自分の興味や強みを生かせる生き方の候補を、いくつか挙げることができる	3.26	1.47	.73
自分の大事にしたい価値観に合った生き方を、いくつか候補として考えている	3.13	1.34	.73
いま考えている生き方がうまくいかなかったとしても、自分が納得できる別の生き方を選べると思う	3.02	1.40	.71
将来の生き方（仕事や家庭生活、暮らし方など）について、自分には現実的な選択肢がいくつかあると感じている	3.04	1.21	.69

相関係数を確認すると，PLCOS は，PCOS（r = .63），人生キャリアレディネス（r = .70），キャリア自己効力感（r = .60）と強い相関を示した。人生キャリアレディネスのなかでも，計画性との相関が最も強かった。このことから，PLCOS は既存のキャリア発達の指標，特に将来について見通しを持ち計画をする側面と密接に関連することが示された。

また，ロールモデル保有感の各側面はいずれも PLCOS と正の相関を示した（r = .24 – .53）。他の 2 つのキャリア指標を統制した偏相関では，尊敬・理想像，視野の広がり，支援・助言，行動の手本と PLCOS との間に有意な正の関連が認められた（pr = .26 – .35）。これらの関連は人生キャリアレディネスではより小さく（pr = .11 – .17），キャリア自己効力感では有意な関連はみられなかった（pr = −.04 – .04）。このことから，PLCOS は，キャリアに対するレディネスや自信との関連を統制した場合にも，他者の生き方や考え方を手がかりに自らのキャリアを考えることと特に関連することが示された。

以上から，PLCOS は既存のキャリア発達の指標と重なる部分がありながらも，それらとは異なる特徴をもつ可能性が示唆された。

主な文献

溝口侑・溝上慎一（2020）. 大学生のキャリア発達とロールモデルタイプの関係――ロールモデル尺度（RMS）の開発の試み―― 青年心理学研究, *32*(1), 17-36.

坂柳恒夫（2019）. 高校生・大学生のキャリア成熟に関する研究――キャリアレディネス尺度短縮版（CRS-S）の信頼性と妥当性の検討―― 愛知教育大学研究報告 教育科学編, *68*, 133-146.

Stange, J. P., & Zyzanski, S. J. (2013). Development and initial validation of a new instrument to measure perceived career options. *College Student Affairs Journal*, *31*(2), 155–164.

Table2
キャリア関連変数の記述統計量，α係数および相関係数

変数	記述統計量			α係数	相関係数					
	平均値	標準偏差	レンジ		1	2	3	4	5	6
1 認知された職業キャリア選択肢	3.00	0.81	1－5	.71						
2 認知された人生キャリア選択肢	3.21	1.09	1－7	.89	.63					
3 人生キャリアレディネス（合計）	2.55	0.72	1－5	.86	.44	.70				
4　関心性	2.51	0.81	1－5	.67	.33	.57	.88			
5　自律性	2.46	0.77	1－5	.63	.34	.58	.88	.70		
6　計画性	2.68	0.89	1－5	.73	.48	.68	.87	.62	.62	
7 キャリア自己効力感（人生課題への自信）	2.90	0.92	1－5	.79	.45	.60	.70	.59	.59	.64

注）N = 878. 相関係数はすべて0.1%水準で有意である。

大学生のキャリア選択自己効力感とメディア上のロールモデルの関連
――主観的類似性およびパラソーシャル関係（PSR）に着目して――

土澤優里
（慶應義塾大学大学院 社会学研究科）

Career Decision-Making Self-Efficacy and Media-Based Role Models Among University Students: Focusing on Perceived Similarity and Parasocial Relationships

Yuri TSUCHIZAWA
(Graduate School of Human Relations, Keio University)

1. 問題と目的

自己効力感とは，ある行動を自ら遂行できるという信念であり（Bandura, 1977），キャリア選択自己効力感は，職業選択や進路決定に必要な行動を遂行できるという信念を指す（Taylor & Betz, 1983）。社会的認知理論では，他者の行動と結果を観察する代理経験が自己効力感の情報源になるとされる（Bandura, 1977）。現代の大学生は，SNS や動画配信サービスなどを通じて多様な職業や働き方，働く人物像に日常的に接していることから，メディア上の人物の行動や経験を観察することも，キャリア選択自己効力感の形成に関わる代理経験となる可能性がある。

これまでメディア接触と職業観やキャリア関連認知との関連は示されてきたが，従来研究の多くは接触量や頻度といった量的側面を扱っており，受け手がメディア上の人物をどのように受容するかは十分に検討されていない。そこで本研究では，メディア上の人物をキャリア上のロールモデルとして捉え，その人物に対する主観的類似性と，メディア上の人物に対して継続的に感じる親密感や心理的なつながりを表すパラソーシャル関係（parasocial relationship: PSR）に着目した。自分と類似していると知覚した人物の経験は自己に適用可能な情報となりやすく，またPSR の強い人物の経験や語りは，心理的に意味のある情報として受容されやすいと考えられる。

本研究は，メディア上のロールモデルをもつ大学生を対象として，主観的類似性および PSR がキャリア選択自己効力感と関連するかを検討することを目的とし，仮説 1 は「主観的類似性が高いほどキャリア選択自己効力感が高い」，仮説 2 は「PSR が強いほどキャリア選択自己効力感が高い」とした。あわせて，探索的にロールモデルの有無による差も確認した。

2. 方法

調査対象者と手続き　2026 年 7—8 月に，Web 調査会社の登録モニターである 18—29 歳の大学生を対象として，オンライン調査を実施した。スクリーニング調査では 1,573 名中 613 名（39.0%）がメディア上のロールモデルがいると回答した。本調査では，メディア上のロールモデルがいる群 320 名，いない群 170 名の計 490 名から回答を得た。回答の質に問題のある 9 名（いる群 6 名，いない群 3 名）を除外し，いる群 314 名（女性 214 名，男性 100 名；平均年齢 20.54 歳，SD = 2.04）を主分析の対象とした。メディア上のロールモデルの有無比較では 481 名（いる群 314 名，いない群 167 名）を分析対象とした。所属大学の研究倫理審査委員会の承認を得て，説明への同意後に回答を求めた。

尺度　キャリア選択自己効力感は花井（2008）の 25 項目（4 件法），主観的類似性は McCroskey et al.（1975）に基づく 14 項目（7 件法），PSR は Rubin & Perse（1987）に基づく 10 項目（5 件法）で測定した。得点が高いほど，それぞれキャリア選択に関する自己効力感，想起した人物との類似性，心理的なつながりが強いことを示す。

分析方法　キャリア選択自己効力感を従属変数とする階層的重回帰分析を行った。Step 1 に性別，年齢，専攻，就職活動状況，対面ロールモデルの有無，メディア接触頻度を投入し，Step 2 に主観的類似性と

PSR を追加した。メディア上のロールモデルの有無比較には Welch の t 検定を用いた。

3. 結果

メディア上のロールモデルがいる群 314 名におけるキャリア選択自己効力感は $M = 66.04$（$SD = 14.85$, $\alpha = .951$），主観的類似性は $M = 44.43$（$SD = 11.21$, $\alpha = .757$），PSR は $M = 36.52$（$SD = 6.96$, $\alpha = .851$）であった。主観的類似性と PSR には有意な負の相関が認められた（$r = -.293$, $p < .001$）。

階層的重回帰分析では，Step 1 は $R^2 = .090$，調整済み $R^2 = .060$，$F(10, 303) = 3.01$, $p = .001$ であった。Step 2 は $R^2 = .150$，調整済み $R^2 = .116$ であり，主観的類似性と PSR の追加によって説明率が 6 ポイント有意に増加した（$\Delta R^2 = .060$, $\Delta F(2, 301) = 10.59$, $p < .001$）。最終モデルでは，主観的類似性（$\beta = .187$, $p = .002$）と PSR（$\beta = .230$, $p < .001$）がいずれも有意な正の関連を示した（Table 1）。VIF は 1.08—2.37 であり，顕著な多重共線性は認められなかった。

探索的分析では，メディア上のロールモデルがいる群は，いない群よりキャリア選択自己効力感が有意に高かった（$t = 2.492$, $p = .013$, $d = .243$）。

Table 1　キャリア選択自己効力感を従属変数とする階層的重回帰分析

変数	Step 1 β	Step 2 β
主観的類似性	—	.187**
PSR	—	.230***
R^2	.090	.150
ΔR^2	—	.060***

注）$N = 314$。Step 1 では性別，年齢，専攻，就職活動状況，対面ロールモデルの有無，メディア接触頻度を統制した。**$p < .01$，***$p < .001$。

4. 考察

主観的類似性と PSR はいずれも，背景要因やメディア接触頻度を考慮した後にもキャリア選択自己効力感と正に関連し，仮説 1･2 を支持する結果が得られた。主観的類似性は，ロールモデルの経験を自己と関連づけて捉えることと関わり，PSR は，その人物の経験や語りを心理的に意味のある情報として受け取ることと関わる可能性がある。こうしたメディア上の人物の受容のあり方が，キャリア選択自己効力感との関連を理解するうえで，重要であると考えられる。

また，主観的類似性と PSR は互いに負の相関を示しながら，それぞれキャリア選択自己効力感とは正に関連した。このことは，自己との類似性と人物への心理的なつながりが，異なる側面からキャリア関連認知に関わる可能性を示している。

本研究は横断研究であるため因果関係を特定できず，翻訳尺度の妥当性や PSR の測定にも限界がある。今後は尺度の検証と縦断的･実験的研究が必要である。これらの結果から，大学生のキャリア形成を理解するうえで，メディア上の人物がどのように知覚され，心理的に関係づけられているかを検討していくことが重要であると考えられる。

文献

Bandura, A.（1977）. Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. Psychological Review, 84, 191–215.

花井 洋子（2008）. キャリア選択自己効力感尺度の構成　人間科学, 69, 41–60.

McCroskey, J. C., Richmond, V. P., & Daly, J. A.（1975）. The development of a measure of perceived homophily in interpersonal communication. Human Communication Research, 1, 323–332.

Rubin, A. M., & Perse, E. M.（1987）. Audience activity and soap opera involvement: A uses and effects investigation. Human Communication Research, 14, 246–268.

Taylor, K. M., & Betz, N. E.（1983）. Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. Journal of Vocational Behavior, 22, 63–81.

青年期後期から成人期にわたる感謝を規定する心理的要因の検討

池田幸恭 [1]
([1]和洋女子大学)

Psychological Factors of Gratitude: Late Adolescence to Early Adulthood

Yukitaka IKEDA[1]
([1] Wayo Women's University)

1. 問題と目的

感謝は多くの哲学や主要な宗教において高く評価される特性であり，心理的 well-being の増大や精神的健康を促進し，他者との関係形成と維持につながる(Wood et al., 2010)。しかし，感謝を規定する心理的要因は特定の状況で生じる状態感謝を中心に検討されており，発達的観点から「なぜ感謝を感じるのか」について検討した研究は少ない。

池田(2018)は，感謝を規定する心理的要因として「交換」，「配慮」，「存在」の 3 次元と「恩恵の受け手」，「恩恵の与え手」の 2 つの視点の組み合わせから 6 種類の要因(充足，非当然視，他者からの承認，他者の意図，自己不全性，自他不可分性)を想定し(Table 1)，その妥当性について成人期を中心に確かめている。しかし，調査回答者に偏りがみられたこと，一部要因の信頼性が十分でなかったことという限界がみられた。

本研究では，池田(2018)の質問項目を再検討して，青年期後期から成人期にわたる感謝を規定する心理的要因を明らかにすることを目的とする。「感謝」を「自分は何らかの恩恵を与えられていると感じること」と幅広く定義し，関連指標との検討を行う。web 調査を行うことで，学生以外の回答者も広く確保する。

Table 1 感謝を規定する 6 種類の心理的要因

視点 / 次元	恩恵の受け手 (自分)	恩恵の与え手 (周囲)
交換	充足 相手から受けた利益を認知することで生じる自分は十分な恩恵を与えられているという感覚	非当然視 周りが自分にしてきてくれたことは当たり前なことではないという感覚
配慮	他者からの承認 相手との情緒的結びつきを実感することで生じるありのままの自分を認めてくれている人がいるという感覚	他者の意図 周りの人は自分のためを思って色々なことをしてくれているという感覚
存在	自己不全性 相手がいなければ自分の存在は成り立たないと感じることで生じる自分は周りに頼りながら生きているという感覚	自他不可分性 周りの人やものがあるからこそ自分が存在しているという感覚

2. 方法

調査回答者 20-39 歳の 600 名(20 代・30 代の年代ごとに男性・女性各 150 名)であった。

調査時期と手続き 2017 年 2 月に，インターネット調査会社(株式会社クロス・マーケティング)を通じて web 調査を行った。質問への回答をもって調査協力への同意が確認されることを説明した。「社会的望ましさ」(三好他，2003)の 3 項目すべてに「非常にあてはまる」と回答した10名を分析から除外した。

調査内容 主に以下の内容を尋ねた。

感謝を規定する心理的要因 池田(2018)を再検討した 36 項目(6 要因各 6 項目)へ 5 件法(「全くあてはまらない」～「非常にあてはまる」)で回答を求めた。

日本語版特性感謝尺度 6 項目(Hatori et al., 2014)へ 7 件法(「まったくあてはまらない」～「非常にあてはまる」)で回答を求め，5 項目で得点化した。

心理的負債感 18 項目(相川・吉森，1995)へ 6 件法(「全くあてはまらない」～「非常にあてはまる」)で回答を求めた。

対人的依存欲求尺度 竹澤・小玉(2004)による「情緒的依存欲求」5 項目，「道具的依存欲求」5 項目へ 6 件法(「全くそう思わない」～「いつもそう思う」)で回答を求めた。

命の意味づけ尺度 池田他(2013)による「世代を超えた命のつながり感」5 項目，「命の相互のつながり感」4 項目の 2 下位尺度へ 5 件法(「まったく感じない」～「いつも感じている」)で回答を求めた。

多次元共感性尺度 木野・鈴木(2015)による「他者指向的反応」2 項目，「視点取得」2 項目の 2 下位尺度へ 5 件法(「全くあてはまらない」から「とてもよくあてはまる」)で回答を求めた。

3. 結果

感謝を規定する心理的要因を尋ねる36項目について確認的因子分析を行い，標準偏回帰係数が.35 未満であったパスを除外した 32 項目で分析した結果，CFI = .91，RMSEA = .07 と一定水準の適合度が確かめられた。

感謝を規定する 6 種類の心理的要因は αs = .85 to.89 であり，十分な信頼性が得られた。この 6 種類の得点に年代(20 代･30 代)と性別(男性･女性)を要因とした分散分析を行った結果，いずれも女性が男性より大きかった(Fs(1, 586) = 23.87 to 38.71, ps < .001, η^2s= .04 to .06)。

感謝を規定する 6 種類の心理的要因と特性感謝尺度間の相関係数は，rs = .65 to 73 (ps < .001)であり，感謝との関連が確かめられた。さらに，その他の各指標を目的変数に，感謝を規定する 6 種類の心理的要因を説明変数にした重回帰分析(ステップワイズ法)を行った(Table 2)。

4. 考察

本研究より，「交換」，「配慮」，「存在」の 3 次元と「恩恵の受け手」，「恩恵の与え手」の 2 つの視点の組み合わせから設定した，感謝を規定する 6 種類の心理的要因の青年期から成人期にわたる妥当性と有効性が示された。感謝を規定する心理的要因ごとの特徴も示唆され，特に「存在」の次元における「自己不全性」の感覚が強いほど心理的負債感は大きくなるが，「自他不可分性」の感覚が強いほど世代を超えた命のつながりや命の相互のつながりを実感していると考えられた。

文献

相川 充･吉森 護 (1995). 心理的負債感尺度の作成の試み 社会心理学研究, *11*, 63-72.

Hatori, K., Kodama, M., & Koganei, K. (2014). Development of Japanese version of the gratitude questionnaire-6. *Proceedings of Cognitive and Behavioral Psychology*, *3*, 17-22.

池田 幸恭 (2018). 成人期を中心とした感謝を規定する心理的要因の分析 日本発達心理学会第 29 回大会発表論文集, 573.

池田 幸恭･落合 亮太･菱谷 純子･高木 有子 (2013). 命の意味づけ尺度の開発 厚生の指標, *60* (6), 15-22.

木野 和代･鈴木 有美 (2015). 多次元共感性尺度(MES)10 項目版の検討：原版と同様の分析を通して 日本教育心理学会第 57 回総会発表論文集, 687.

三好 昭子･大野 久･内島 香絵･若原 まどか･大野 千里 (2003). Ochse & Plug の Erikson and Social-Desirability Scale の日本語短縮版(S-ESDS)作成の試み 立教大学心理学研究, *45*, 65-76.

竹澤 みどり･小玉 正博 (2004). 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討 教育心理学研究, *52*, 310-319.

Wood, A. M., Froh, J. J., & Geraghty, A. W. A. (2010). Gratitude and well-being: A review and theoretical integration. *Clinical Psychology Review*, *30*, 890-905.

付記 本研究は，和洋女子大学平成 28 年度研究奨励費の助成を受けた。本研究において，開示すべき利益相反関連事項はない。

Table 2 感謝を規定する心理的要因を説明変数，各指標を目的変数にした重回帰分析結果(n = 590)

目的変数 / 説明変数	心理的負債感	情緒的依存欲求	道具的依存欲求	世代を超えた命のつながり感	命の相互のつながり感	他者指向的反応	視点取得
1-充足					.19 **		
2-非当然視	.37 ***		.14 *				
3-他者からの承認				.21 ***		.21 ***	
4-他者の意図		.16 *					.24 ***
5-自己不全性	.21 **		.27 ***	-.42 ***	-.32 ***		
6-自他不可分性		.22 **		.52 **	.49 **	.36 **	
F	130.48 ***	44.25 ***	53.75 ***	42.93 ***	43.68 ***	113.43 ***	35.09 ***
調整済みR^2	.31	.13	.15	.18	.18	.28	.06

注) F値と調整済みR^2以外の数値は標準偏回帰係数(β)である。* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

動機づけ調整方略の具体例を提案する AI を用いた学業行動への介入
――動機づけ調整への自己効力感の調整効果――

千島雄太[1]・河辺優菜[1]・湯立[2]
([1]筑波大学・[2]長崎大学)

An AI-Assisted Intervention Providing Task-Tailored Examples of Motivational Regulation Strategies for Daily Academic Behaviors: The Moderating Role of Self-Efficacy for Motivational Regulation

Yuta CHISHIMA[1], Yuna KAWABE[1], Li TANG[2]
([1]University of Tsukuba [2]Nagasaki University)

1. 問題と目的

動機づけ調整とは,「特定の活動や, 目標を達成するという意思を始発, 維持, あるいは補うために行う行為(赤間, 2015; Wolters, 2003)」であり, 特に学業領域で研究が蓄積されている。

動機づけ調整には様々な方略が提案されているが, 動機づけや学業行動を促すためには, 課題内容やその人が置かれた状況に沿った方略を実行することの重要性が説かれている(Steuer et al., 2026)。近年, 文章生成 AI を活用することで, 個人の状況や抱えている課題に最適化された方略の提案が可能となることが期待されている(Lee et al., 2025)。

そこで, 本研究では, AI を用いて個人の学業課題に沿った動機づけ調整方略を提案する介入の有効性を検証する。具体的には, AI を用いずにリマインダーのみを通知する条件との比較によって, 日々の学業行動が促進されるかどうかについて明らかにする。加えて, 特性レベルでの学業への態度が変化するかについても検討する。その際, 動機づけ調整への自己効力感が低い者ほど, AI を用いた方略の提案が有益と感じやすいという先行研究(千島他, 2026)に従い, 本研究においても, 動機づけ調整への自己効力感の調整効果に着目する。

2. 方法

参加者

先延ばしにしている学業課題を有している大学生・大学院生 107 名(女性 77 名, 男性 30 名, 平均年齢 21.51 歳, *SD* = 2.11)であった。

手続き

研究は 9 日間に渡ってオンライン上で行われ, 日々の課題の記録は 7 日間 LINE 上で行われた。介入期間の前後に, 事前測定と事後測定が行われた。

参加者は, 無作為に 2 条件に分けられた。介入条件では, 毎晩次の日の学業課題の内容と開始時刻を入力した後, 9 つの方略から 1 つを選んだ。AI によって方略の具体例が生成され, それを参考に自らが実行可能な方略を入力した。翌日の指定した開始時刻にはリマインダーが送られ, 前夜に入力した方略に加えて, 課題への感情や状況に沿った AI 生成メッセージを受け取った。統制条件では, 課題の入力後に方略の選択や AI による提案を受け取らず, 翌日の指定時刻に課題のリマインダーを受け取るのみだった。

測定内容

日次レベルの変数として, 課題がある日は, リマインダー受信後に課題への動機づけを測定し, その日の夜に課題の達成度と先延ばしの程度を測定した。

特性レベルの変数として, 学業先延ばし(龍他, 2006), 動機づけ調整に対する自己効力感(Kryshko et al., 2023), 学業エンゲージメント(Schaufeli et al., 2019)を測定した。

3. 結果

基礎統計量

7 日間の介入期間の 98%で回答が行われており, 欠損は極めて少なかった。課題がある日が約 60%, 課題がない日が約 40%であった。

介入条件において, 方略選択の割合を算出した結果, 段階的な目標を設定する「近接目標設定」(約 16%)と, 終わったときのご褒美を設定する「自己報

酬」(約 15%)が多かった。

方略の主効果

方略を独立変数，日次レベルの変数を従属変数，個人切片を変量効果とした線形混合モデルによる分析を行った。全ての変数で条件の主効果や交互作用は有意でなく，動機づけのみ方略の主効果が有意であった（$p < .013$; $\eta_p^2 = .10$)。多重比較の結果，遂行回避セルフトーク(悪い評価の回避)や，熟達セルフトーク(能力の獲得)を選んだ時は，状況的興味高揚(面白さの向上)を選んだ時よりも，動機づけが高かった(Figure 1)。

条件×効力感

次に，条件と動機づけ調整への自己効力感の主効果と交互作用を独立変数とした，線形混合モデルによる分析を行った。その結果，全ての日次レベルの変数で交互作用が有意または有意傾向であった（$\beta = |.22—.32|$; $p = .017—.086$)。多重比較の結果，いずれの変数においても，動機づけ調整に対する自己効力感が低い場合，介入条件ほど望ましい効果が生じていることが示された(Figure 2)。

特性レベルの変化

最後に，条件と効力感の主効果と交互作用を独立変数，事後測定時点の特性レベルの変数を従属変数とした重回帰分析を行った。その際，事前測定時点の特性レベルの変数を統制した。その結果，動機づけ調整への自己効力感と学業エンゲージメントについては，条件の主効果が有意または有意傾向であり，介入条件の方が介入期間後に得点が高まった（効力感で$\beta = .35$, $p = .010$，学業エンゲージメントで$\beta = .25$, $p = .077$)。学業先延ばしについては，有意な結果は示されなかった（$\beta = -.13$, $p = .321$)。

4. 考察

AI を用いた日々の学業行動への介入は，動機づけ調整への自己効力感が低い者に特に有効であることが示された。この結果は，先行研究(千島他，2026)とも一貫しており，個別のニーズに合わせた支援を行うことの重要性を裏付けた結果となった。

個別の方略に着目すると，熟達セルフトークが動機づけを高めることは先行研究でも指摘されていた(Fong et al. 2024)。遂行回避セルフトークについては，悪影響が強調されることが多いものの，即時的には行動を促進しやすいことも指摘されており(Schödl et al., 2018)，本研究でも即時的な動機づけの向上に寄与したと解釈できる。一方で，課題を面白くする状況的興味高揚は，AI の提案する面白さが学習者に合っていなかった可能性がある。

本研究の限界点として，統制条件が動機づけ調整方略の選択を行っておらず，そのことが効力感の向上において介入条件との差を強めた可能性がある。

主要引用文献

千島 雄太・河辺 優菜・湯 立(2026). 動機づけ調整方略を提案する AI の有効性——個別最適化された支援に向けて—— 日本教育心理学会第 68 回総会発表論文集.

Figure 1. 日々の動機づけの方略ごとの比較

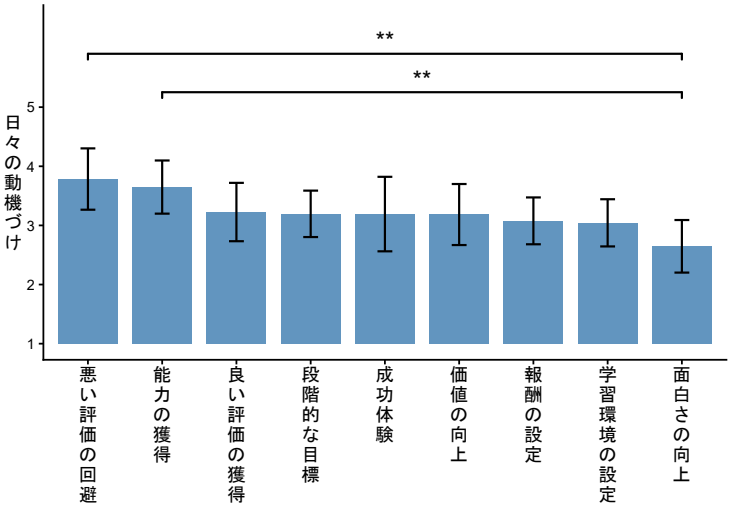
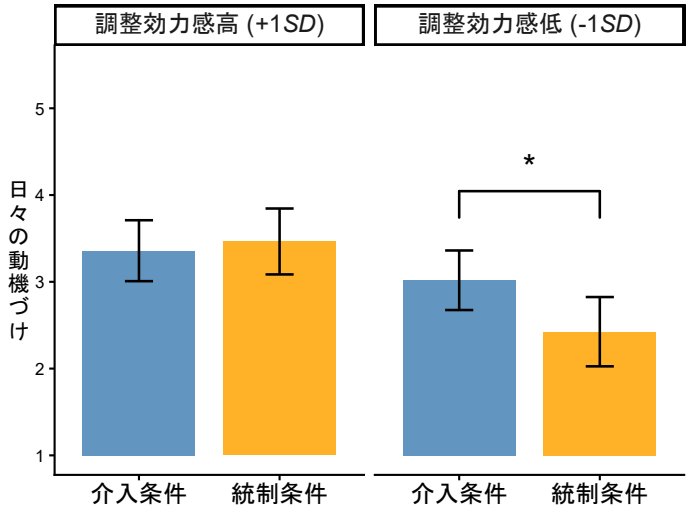


Figure 2. 条件と動機づけ調整効力感の交互作用



高校生における目標達成への努力を続けるか諦めるか迷った際の決断スタイルに関する研究

長村圭吾[1]・外山美樹[2]
([1]筑波大学大学院・[2]筑波大学)

The study on high school students' decision styles toward decisional conflict between disengaging from and continuing a goal

Keigo OSAMURA[1], Miki TOYAMA[2]
([1] Graduate School, University of Tsukuba [2] University of Tsukuba)

1．問題と目的

人々は目標を追求する中で，目標達成への努力を続けるか諦めるか迷う「行動危機」を経験することがある(Kappes & Schattke, 2022)。行動危機の経験により，現在の目標や他の目標の性質を考え直し，最終的に柔軟に目標を切り替え邁進することができる(Timar-Anton et al., 2022)。こうした観点から，行動危機を経験した際に人々がどのような考え方や対処行動をして，それがどう問題の解決に結びつくのか，行動危機全体のプロセスを詳細に検討する機運が高まりつつある。

また，行動危機という概念には，努力を続けるか諦めるかを決断する意思決定の要素が関わってくる。よって，行動危機を経験した際の解決についてさらに検討を進めるためには，人々が行動危機下において決断をどのようにするべきなのかという点に注目すべきであると考えられる。しかし，このような観点の研究は少ないのが現状である。

一部関連する研究として，行動危機に直接関係するものではないが，目標を諦める過程を実証した菅沼(2015)や Holding et al.(2022)がある。これらの先行研究から，「この目標は自分に合っているかどうか」といった，自分と目標の関係性を根拠とした決断の仕方が，諦めようとしている目標への固執を下げることで，次の目標追求につながりうる諦めをもたらすことが見出されている。この点を解釈すると，決断の仕方によって決断の確信度(Brandstätter & Herrmann, 2016)が変わり，目標追求への影響が生じる可能性がある。

そこで本研究では，この可能性を検証する先駆けとして，「行動危機時に確信をもって決断することを目的とした考え方や行動」と定義される，行動危機時の決断スタイルという概念を導入する。そこで，予備調査を経てスタイルを探索的に明らかにし，尺度を構成することを目的とする。また，決断の仕方と目標追求の関連も探索的に検討する。なお，進路選択など行動危機を経験しやすいと考えられる高校生を対象とする。本研究は全て，所属機関の倫理審査による承認を得ている。

2．予備調査の方法と結果

方法　全国の高校生109名(女性79名，男性23名，性別その他や無回答 7 名，1 年生 41 名，2 年生 49 名，3 年生 19 名)が参加した。行動危機の際に，確信を持って決断するための行動や考え方を自由記述で尋ねた。

結果　KJ法の分類方法を援用し，得られた回答をカテゴリーに分類した。その結果，菅沼(2015)や Holding et al.(2022)でも見られていた，目標の性質を考え，自分にとって目標が合っているかといった点を考慮する「目標の再評価」などのカテゴリーが生成された。各カテゴリーに分類された記述をもとに，「行動危機時の決断スタイル尺度」の原案(30 項目)を作成した。

3．本調査の方法

分析対象者　全国の高校生 253 名(女性 177 名，男性 45 名，性別その他や無回答 31 名，1 年生 81 名，2 年生 80 名，3 年生 92 名)であった。

使用尺度　行動危機時の決断スタイル尺度(6 件

法），エンゲージメント尺度の「行動的エンゲージメント」（外山，2018）の表現を一部改変したもの（5 項目 7 件法）を用いた。どちらの尺度も，普段の自分自身について回答してもらった。

4．本調査の結果

行動危機時の決断スタイル尺度の探索的因子分析　堀（2005）や解釈可能性などを基に 5 因子を仮定した最尤法・Promax 回転による探索的因子分析を行い，1 つの因子のみに因子負荷量 .35 以上を示した項目を採用した。最終的に，5 つの下位尺度で計 23 項目からなる尺度が開発された。下位尺度の項目例などを Table 1 に示し，本文では各因子の特徴を示す。第 1 因子は，決断による結果について予期し，後悔のない決断をしようとするスタイルを示す項目から構成されているため，「シミュレーション」と命名した（9 項目）。第 2 因子は，決断において，自分自身の考える能力や考え方を重視するスタイルを示す項目から構成されているため，「自己への信頼」と命名した（5 項目）。第 3 因子は，自分の現在の考えを客観的に捉えたり，言語化したりするスタイルを示す項目から構成されているため，「自己整理・言語化」と命名した（3 項目）。第 4 因子は，自分の経験や状況を他者に外在化していくスタイルを示す項目から構成されているため，「他者関与」と命名した（3 項目）。第 5 因子は，現在あるいは他の目標が自分自身に合っているかを考えるスタイルを示す項目から構成されているため，「目標-自己の関係性の再評価」と命名した（3 項目）。

決断スタイルとエンゲージメントとの関連　エンゲージメントを目的変数とする階層的重回帰分析を行った。Step 1 で学年と性別，Step 2 で 5 つの決断スタイルを投入した。決定係数の増分は有意であった（$\Delta R^2 = .24$，$p < .001$）。結果，「自己への信頼」と「自己整理・言語化」は，エンゲージメントと正の関連が見られた（βs = .39，.17）。

5．本調査の考察

行動危機時の決断スタイル尺度　概ね，KJ 法のカテゴリーが下位尺度として抽出された。また，決断の確信を高めるものと考えられる自分と目標の関係性を根拠とした考え方（Holding et al.，2022；菅沼，2015）も示された。

一方で，この尺度の実用性には疑問の余地が残る。例えば，下位尺度間での項目数のバラツキ，「シミュレーション」と「目標-自己の関係性の再評価」の弁別（因子間相関は .50）などが課題である。他の高校生サンプルを用いて因子構造の安定性や，さらなる妥当性検証を行う必要がある。

決断スタイルとエンゲージメントとの関連　自分の意思を尊重したり，自分の考えを言語化したりしたうえで決断する高校生は，普段の目標へのエンゲージメントが高い傾向が示された。Holding et al.（2022）では自律的な諦め，菅沼（2015）では考えの言語化の効果が示されている。以上のように，先行研究とも整合的な結果となった。

6．主要引用文献

Holding, A., Moore, A., Verner-Filion, J., Kachanoff, F., & Koestner, R. (2022). Choosing to lose it: The role of autonomous motivation in goal disengagement. *Motivation and Emotion*, 46(6), 769–789.

Table 1

行動危機時の決断スタイル尺度の概要

下位尺度名	項目例	α（ω）	*M*（*SD*）
シミュレーション	自分に目標の達成ができるかどうかを想像する	.85(.86)	4.27(0.83)
自己への信頼	決断において自分自身を信じる	.84(.84)	4.13(0.92)
自己整理・言語化	自分の考えを言葉にする	.83(.83)	3.61(1.12)
他者関与	様々な人の意見にふれる	.73(.73)	3.91(1.09)
目標-自己の関係性の再評価	どの目標が自分のためになるかを考える	.69(.70)	4.12(0.96)

ポスター発表リスト

責任在席時間　奇数番号　9:30～10:30　偶数番号　10:00～11:00

P-01	青年期における孤食傾向・孤食志向と心理的苦痛の関連 ――肯定的摂食を介した間接関連の検討――	岡本茉莉（早稲田大学大学院文学研究科） 小塩真司（早稲田大学文学学術院）
P-02	過剰適応は病理的自己愛の表現形の一つとして捉えられるか ――自己愛の誇大性・脆弱性との構造的関連の検討――	二宮有輝（名古屋市立大学）
P-03	若年女性の自殺念慮表現に関する検討 ――自殺念慮保有者の著作の質的分析――	今村七笑（聖心女子大学大学院人文社会科学研究科）
P-04	感謝とBig Fiveパーソナリティ ――BFI-2によるファセットレベルの検討――	今泉里香（早稲田大学大学院文学研究科） 小塩真司（早稲田大学文学学術院）
P-05	大学生の一人時間に関する研究 ――孤独を好む志向性とポジティブソリチュードに着目して――	中村衣里（大阪大学大学院人間科学研究科） 三好真優（大阪大学人間科学部） 森脇淑史（大阪大学人間科学部） 勝間田冬華（大阪大学大学院人間科学研究科） 直原康光（大阪大学）
P-06	キャリア・アダプタビリティと時間的展望との関連について ――未来，現在，過去の時間的態度との比較――	四宮康亮（追手門学院大学大学院）
P-07	大学受験経験とキャリア選択自己効力感，結果期待，キャリア探索行動の関係	秋山史子（労働政策研究・研修機構）
P-08	現代青年は情緒的交流をどのように体験しているのか ――大学生への半構造化面接によるテーマ分析から――	浦邉綾子（愛知淑徳大学心理学部） 宮本淳（愛知医科大学医学部） 清瀧裕子（愛知淑徳大学心理学部）
P-09	成人期の娘に対する母親の認知に関する一報告 ――15答法の分析と縦断的データとの関連に基づいて――	小高恵（太成学院大学）
P-10	大学新入生の友人関係形成過程の調査 ――テーブルトーク・ロールプレイングゲームと人狼ゲームの比較から――	大羽達己（同朋大学大学院人間学研究科）
P-11	アタッチメントの視点から考える中学生の対人関係と適応 ――孤独感・生活満足度・自己実現に着目して――	中尾達馬（琉球大学）
P-12	ふれあい恐怖的心性が形成される心理的メカニズムの検証	野木采葉（明星大学大学院心理学研究科） 藤井靖（明星大学心理学部，国立精神・神経医療研究センター）
P-13	非緩和共同性と友達とのつきあい方 ――かかわりの「深さ」と「広さ」の視点から――	萩原千晶（和洋女子大学） 小塩真司（早稲田大学文学学術院）
P-14	高校生向け食育講座においてピア・エデュケーターを担った短大生の役割経験 ――実践前の見通し・不安と実践後の自己評価に着目して――	山本ちか（名古屋文理大学短期大学部） 小濵絵美（名古屋文理大学短期大学部） 内田あや（名古屋文理大学短期大学部）
P-15	子どもの不登校が母親および家庭に及ぼす影響	侯玥江（秋田大学） 綾部直子（秋田大学）
P-16	動画のタイパ視聴（Time-Efficient Viewing: TEV）と病理的自己愛傾向およびアイデンティティとの関連	三田遥真（早稲田大学大学院文学研究科） 小塩真司（早稲田大学文学学術院）
P-17	日本の大学生が勉強する気になれない背景 ――学業的非動機づけの下位側面と学習行動との関連――	熊崎広大（京都大学大学院教育学研究科） 高橋雄介（京都大学）
P-18	大学生を対象とした防犯人材育成プログラムの開発（2） ――経験サンプリング法を用いた検討――	大久保智生（香川大学） 赤松大輔（京都教育大学） 西本佳代（香川大学）
P-19	シングルの成人はどのようにパートナー関係を形成するのか? ――恋愛への動機づけ，シャイネス，出会いツール利用に着目した縦断的検討――	古谷かすみ（名古屋大学大学院情報学研究科） 髙野恵代（愛知淑徳大学心理学部） 久保南海子（愛知淑徳大学心理学部）
P-20	大学生の主観的成人感を成立させる必要条件の検討 ―MoA・CARES・独自項目を用いた必要条件分析―	中田琉々香・兵頭ひかる・後藤美羽・田原輝人・古波蔵剛輝・横光健吾 （人間環境大学 総合心理学部）
P-21	中学生・高校生の同性友人関係における状況に応じた切替の 4 類型の特徴	大谷宗啓（兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科） 若松養亮（滋賀大学）

青年期における孤食傾向・孤食志向と心理的苦痛の関連
――肯定的摂食を介した間接関連の検討――

岡本茉莉[1]・小塩真司[2]
([1]早稲田大学文学研究科・[2]早稲田大学文学学術院)

Associations of Eating Alone and Preference for Eating Alone with Psychological Distress among Adolescents and Young Adults: Examining Indirect Associations through Positive Eating

Matsuri Okamoto[1], Atsushi Oshio[2]
([1] Graduate School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University [2]Faculty of Letters, Arts and Sciencese, Waseda University)

1. 問題と目的

青年期の食事は，栄養摂取にとどまらず，対人関係や心理的健康と結びつく日常経験である。共食は社会的交流や文化的意味を伴い(Jönsson et al., 2021)，孤食は心理的苦痛と関連することが報告されている(Son et al., 2020)。青年の食事場面では，一人で昼食をとることへの不安や，他者から孤立していると見られることへの懸念を特徴とするランチメイト症候群の存在も指摘されている(岡田，2016)。ただし，孤食の意味は一様ではなく，自発的に選ばれたか否かによって異なる可能性がある(Jönsson et al., 2021)。そのため，一人で食べるという行動的側面と，一人で食べたいという志向的側面を区別する必要があると考えられる。

食生活を肯定的に評価する傾向である肯定的摂食(positive eating; Sproesser et al., 2018)は，人生満足度や抑うつと関連する(Chen et al., 2025; Okamoto et al., 2026)。そのため，孤食が食事に対する満足感や楽しさを損ない，その結果，心理的苦痛と関連する可能性が考えられる。本研究では，青年期の学生を対象に，孤食傾向および孤食志向と心理的苦痛，および摂食時の快楽と摂食への満足の関連を明らかにすることを目的とした。

2. 方法

参加者　日本在住の 15～24 歳の学生 750 名を対象にオンライン調査を実施し，注意項目に指示通り回答した 688 名(M_{age} = 18.62, SD_{age} = 2.53，女性 358 名)を分析対象とした。

心理的苦痛　日本語版 K6(Furukawa et al., 2008)の 6 項目に対し，5 件法で回答を求めた。Cronbach's α = .93 であった。

肯定的摂食　日本語版肯定的摂食尺度(PES-J; Okamoto et al., 2026)の 8 項目に対し，4 件法で回答を求めた。摂食時の快楽と摂食への満足の 2 因子構造を持つ。Cronbach's α_{Pl} = .92，Cronbach's α_{Sat} = .80 であった。

デモグラフィック変数　モニター登録された年齢と，性別(男性 = 1，女性 = 0)の情報を用いた。

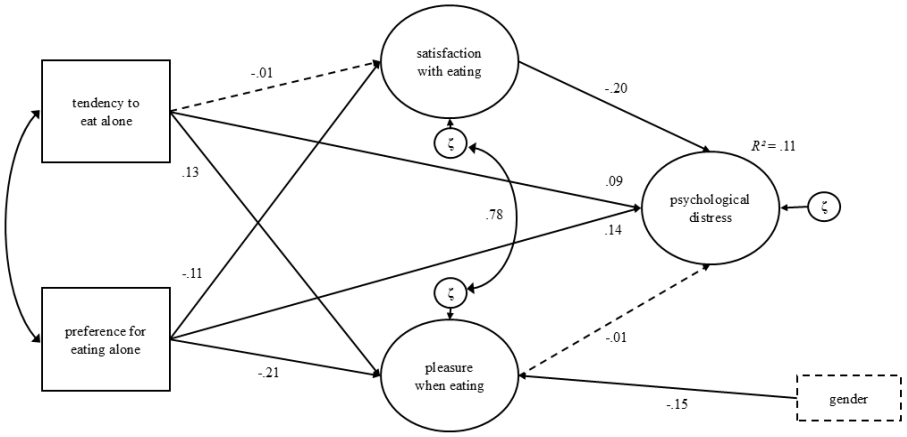
孤食傾向と孤食志向　孤食傾向については，「私はよく一人で食事をする」，孤食志向については，「できればひとりで食事をしたい」という項目を設けた。それぞれの設問に対し，5 件法で回答を求めた。

分析　まず，変数間の関係を把握するために相関分析を行った。続けて，構造方程式モデリング(SEM)を用いて，肯定的摂食を介した孤食と心理的苦痛との関連を検討した。孤食傾向および孤食志向はいずれも単項目尺度であり，誤差分散を十分な外的情報に基づいて特定することが困難であったため，観測変数として扱った。一方，肯定的摂食の両下位尺度と心理的苦痛は潜在変数としてモデル化した。推定には WLSMV を用いた。分析には R(version 4.3.3; R Core Team, 2024)を用い，有意水準は α = .05 とした。

倫理的配慮　本研究は早稲田大学の倫理審査委員会によって承認された(承認番号：2025-323)。

Figure 1

肯定的摂食と孤食傾向および孤食志向の関連を同時検討したモデル



Note. R^2 = 決定係数。R^2 = 決定係数, ζ = 残差。実線は $p < .05$ で有意であったパスを, 破線は有意でなかったパスを示す。パス係数は完全標準化推定値を示す。PES-J-Sat と PES-J-Pl の残差間の共分散を許容した。孤食傾向と孤食志向を含む外生観測変数の分散および共分散は標本統計量として扱った($r_{孤食傾向 \times 孤食志向} = .58, p < .001$)。測定項目および一部の共変量は図の簡略化のため省略した。

3. 結果

モデル適合度は許容範囲内であった(Figure 1; $\chi^2(118) = 248.50$, CFI = .991, TLI = .993, RMSEA = .040, SRMR = .034)。孤食傾向($\beta = .091, p = .046$)と孤食志向($\beta = .142, p = .001$)は, いずれも心理的苦痛と有意な正の直接関連を示した。摂食への満足は心理的苦痛と有意な負の関連を示し($\beta = -.203, p = .016$), 孤食志向とも有意な負の関連を示した($\beta = -.111, p = .015$)。一方, 摂食時の快楽は心理的苦痛とは有意に関連しなかった($\beta = -.038, p = .659$)が, 孤食傾向とは有意な正の関連($\beta = .125, p = .009$), 孤食志向とは有意な負の関連を示した($\beta = -.213, p < .001$)。両孤食指標から心理的苦痛への各間接関連はいずれも有意ではなかった。また, 孤食志向の総間接効果は境界的な値を示した($\beta = .031, p = .050$)。

4. 考察

孤食傾向と孤食志向は, 互いの影響を統制した後も, 心理的苦痛との間に直接関連を示した。一方で, 肯定的摂食を介する間接関連は確認されなかった。したがって, 孤食と心理的苦痛との関連は, 食事そのものの楽しさや満足感の低下だけでは十分に説明できず, 生活環境や対人不安など食事外の要因を含めて捉える必要があることが示唆された。この点は, 孤食がどのような文脈や意味づけのもとで経験されるかが重要であるという先行研究の議論とも整合する。今後は日記法などを用いて, 関連要因を探究する必要がある。

文献

Jönsson, H., Michaud, M., & Neuman, N. (2021). What is commensality? A critical discussion of an expanding research field. International Journal of Environmental *Research and Public Health, 18*(12), Article 6235.

Son, Y. H., Oh, S. S., Jang, S. I., Park, E. C., & Park, S. H. (2020). Association between commensality with depression and suicidal ideation of Korean adults: The sixth and seventh Korean National Health and Nutrition Examination Survey, 2013, 2015, 2017. *Nutrition Journal, 19*, Article 131.

岡田 努(2016). 青年期の友人関係における現代性とは何か 発達心理学研究, *27*(4), 346-356.

Sproesser, G., Klusmann, V., Ruby, M. B., Arbit, N., Rozin, P., Schupp, H. T., & Renner, B. (2018). The Positive Eating Scale: Relationship with objective health parameters and validity in Germany, the USA and India. *Psychology & Health, 33*(3), 313-339.

過剰適応は病理的自己愛の表現形の一つとして捉えられるか
――自己愛の誇大性・脆弱性との構造的関連の検討――

二宮有輝
（名古屋市立大学）

Can Overadaptation Be Conceptualized as a Manifestation of Pathological Narcissism?: An Examination of Its Structural Relationships with Narcissistic Grandiosity and Vulnerability

Yuki NINOMIYA
(Nagoya City University)

1. 問題と目的

周囲からの期待に敏感で，それに応えようと過度に努力する傾向は「過剰適応」という概念として広く知られている。過剰適応は子どもから成人まで幅広くみられ，不適応との関連が指摘されている（石津・安保，2008；水澤，2014）。

一方，臨床上問題となる自己愛（以下，病理的自己愛）には，尊大さや自己中心性を特徴とする誇大性と，他者評価への過敏さや自己抑制を特徴とする脆弱性がある（Pincus & Lukowitsky, 2010）。

過剰適応と病理的自己愛は，一見異なる臨床像を表す概念のように思われるが，他者からの評価や承認によって自己価値が左右される点で共通している。さらに，過剰適応尺度（水澤，2014）と病理的自己愛目録（川崎・小塩，2021）には，否定的評価への過敏さ，承認希求，自己抑制など，内容上多分に重複が認められることから，両者は同一ないし極めて近い心理的特徴を異なる枠組みから捉えている概念である可能性も考えられる。もしそうであれば，過剰適応は病理的自己愛の表現形の一つとして位置づけることができるかもしれない。しかし，両概念の重複性や弁別性を検討した研究は現時点では見当たらない。

そこで本研究では，過剰適応，自己愛的誇大性，自己愛的脆弱性の因子構造および相互の関連を検討し，過剰適応と病理的自己愛の概念的重複と弁別性を明らかにすることを目的とする。

2. 方法

対象と手続き：Freeasy（アイブリッジ株式会社）を用いて 18～30 歳の男女のモニター600 名を対象に web アンケートを行った。調査は 2026 年 7 月に実施した。フィラー項目で陽性であった者を除き，381 名を有効回答とした（有効回答率 63.5%，平均年齢 =26.74，*SD*=4.09，女性 =188，49.34%）。

調査内容：

1．デモグラフィック変数：性別，年齢

2．成人用過剰適応傾向尺度（OATSAS）：水澤（2014）が成人の過剰適応傾向を測定するために開発した尺度である。20 項目について，4 段階評定で回答を求めた。

3．病理的自己愛目録日本語版（PNI-J）短縮版：Pincus et al.（2009）が作成した Pathological Narcissism Inventory を川崎・小塩（2021）が邦訳した尺度の短縮版を用いる。病理的自己愛の誇大性と脆弱性を測定する 28 項目について，6 件法で回答を求めた。

この他，関連する変数もあわせて収集したが，本稿では分析に用いなかった。

倫理的配慮と COI：本研究は筆者の所属大学の研究倫理審査委員会の承認を得た上で行った。本発表に関して開示すべき COI はない。

3. 結果

全項目について平均値や項目間相関を確認した結果，OATSAS の第 16 項目「仕事をいい加減にすることがある」は逆転項目であるが、他項目との相関が期待されるパターンと一致しなかったため、分析から除外した。

(1)確認的因子分析(CFA)によるモデル比較

過剰適応，病理的自己愛の誇大性，脆弱性の概念的弁別性を検討するため，CFA を用いて全 47 項目が 1 つの因子を測定している 1 因子モデル，OATSASの項目は過剰適応を測定し，PNI-Jの項目は病理的自己愛を測定している 2 因子モデル，PNI-J を原尺度の誇大性と脆弱性に分けた 3 因子モデルを比較した。結果を表 1 に示す。

表 1 CFA によるモデル比較

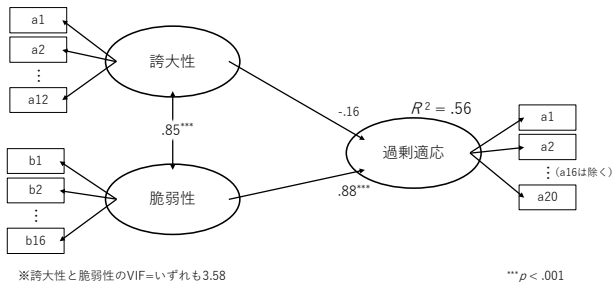
モデル	χ^2	df	p	CFI	TLI	RMSEA	SRMR	AIC	BIC
1因子モデル	3140.523	1034	0	0.696	0.683	0.083	0.085	49277.6	49833.54
2因子モデル	2587.085	1033	0	0.776	0.766	0.072	0.077	48560.69	49120.57
3因子モデル	**2402.663**	**1031**	**0**	**0.803**	**0.793**	**0.067**	**0.075**	**48321.01**	**48888.77**

3 因子モデルは十分な適合度は得られなかったものの，他 2 つのモデルと比較して良好な値を示した。また，潜在因子間相関を算出した結果，過剰適応は誇大性と中程度の正の相関を示し（r=.59 95%CI[.47,.70]），脆弱性とはより強い正の相関を示した（r=.75[.67,.82]）。また，誇大性と脆弱性の間に強い正の関連が認められた（r=.85[.78,.92]）。

(2)潜在変数による構造方程式モデリング(SEM)

過剰適応を目的変数，病理的自己愛の誇大性と脆弱性説明変数とする SEM による解析を行った。結果を図 1 に示す。

図1 過剰適応を目的変数とする SEM



脆弱性は過剰適応に強い正の関連を示した（β = .88, p < .001）。一方，誇大性は脆弱性を統制した場合，有意な影響が認められなかった（β =−.16, p =.11）。VIF を算出した結果，誇大性，脆弱性のいずれも VIF=3.58 であった。

4. 考察

CFA の結果から，3 因子モデルが相対的に良好な適合を示し，過剰適応，誇大性，脆弱性を概念的に区別することの一定の妥当性が示された。一方，過剰適応は特に脆弱性と強い相関関係にあり，SEM の結果は，誇大性と脆弱性が過剰適応の分散の 56%を説明し，特に脆弱性が強い関連を示した。自己愛の脆弱性と過剰適応との関連についての先行研究は，過剰適応のいわゆる「いい子」の側面からの検討にとどまっており（関谷他，2026），本研究は青年期から成人期にかけての過剰適応と自己愛の脆弱性との関連を示唆する新たな知見として位置付けられる。

なお，相関分析では誇大性も過剰適応と相関が認められたが，脆弱性を統制した場合には誇大性は過剰適応に有意な関係が認められなかった。過剰適応にみられる評価希求は，誇大的な賞賛獲得傾向よりも，否定的評価への過敏さや自己価値の傷つきと強く関連する可能性が示唆された。

以上の結果から，過剰適応のうちの少なくとも一部の群は，自己愛の脆弱性が自己抑制や他者への過度な適応として現れた表現形の一つとして捉えられる可能性が示唆された。

ただし，誇大性と脆弱性との間には強い相関が見られ，両概念の強い重複が疑われる。また，このために偏回帰係数が不安定になっている可能性も否定できないため，解釈は慎重に行う必要がある。加えて，過剰適応の全てを病理的自己愛で説明することは困難であるため，今後は過剰適応のみ高い者と病理的自己愛と過剰適応の両方が高い者でどのような違いが認められるかを明らかにしていく必要があるだろう。

主要引用文献

川崎 直樹・小塩 真司(2021).病理的自己愛目録日本語版(PNI-J)の作成　心理学研究，92，21-30.

水澤 慶緒里(2014).成人用過剰適応傾向尺度(Over-Adaptation Tendency Scale for Adults)の開発と信頼性・妥当性の検討　応用心理学研究，40(2)，82-92.

若年女性の自殺念慮表現に関する検討
――自殺念慮保有者の著作の質的分析――

今村 七笑[1]
([1]聖心女子大学大学院人文社会科学研究科)

A Study on the Expression of Suicidal Ideation Among Young Women
—A Qualitative Analysis of Writings by Individuals with Suicidal Ideation—

Nanami Imamura[1]
([1]Graduate School of Humanities and Social Sciences, University of the Sacred Heart, Tokyo)

1. 問題と目的

2024 年の自殺者数は前年度より減少したが, 小中高生の自殺者数は, 過去最多を記録(厚生労働省, 2025)。15 歳～20 代の女性が自殺未遂のリスクが共に高い層である(日本財団, 2021)。

自殺に至る心理的な背景を探る手法として, 心理学的剖検が挙げられるが, 我が国では 2016 年にその実施が中断されており, 我が国のコロナ禍での若年者や女性の自殺の急増について, 個別の自殺既遂・未遂者がどのような経緯・心理状態を辿って自殺企図に至ったのかは未検討のままである(齊尾, 2022)。同研究によると, 個別の自殺症例を自殺に至る力動や社会文化的文脈の点から検討し, 自殺者がなぜ自殺するのかを質的に理解することは重要であるが, 個人情報保護や倫理的な制約が少なくないという。しかしながら, Jobes et al.(2024)は, 患者が自殺念慮の形態や内容を記述するために用いる言葉からは, 臨床評価や治療に関連する貴重な情報が得られると述べ, 当事者の言葉の質的検討の意義は高いと考えられる。

そこで本研究では,「女性作家による, 自身の自殺念慮に関する著作」を対象に質的分析を行うことで, 倫理的な制約の中でも, 我が国の女性が自殺念慮を有する時, そこにはどの様な心理的状態があるのか, 明らかにすることを目的とする。なお, 本研究では, より幅広い心理状態を検討するため, 自殺既遂者に留まらず, 自殺未遂者・自殺念慮保持者による書籍も分析対象とする。

2. 方法

分析対象

分析対象の選定においては, 一見すると学校や家庭で問題を抱えていないように見える“若年者”や“女性”の自殺が急増したことを踏まえ, ①2000 年代以降に執筆された著作, ②自身の自殺を切望する心理的状態についての詳細な記述が含まれる著作, ③青年期までに自殺念慮を有したことのある女性による著作, ④自殺の危機に晒された際にも, 就労・通学を続けていた女性による著作, という 4 つの基準を設けた。これらの基準に適合した 5 冊を分析対象とした(表 1)。

表1
分析対象(著者名・刊行年・書籍名)

a	土門 蘭	2023 死ぬまで生きる日記
b	豆塚 エリ	2022 死にたい気持ちが消えるまで
c	二階堂 奥歯	2020 八本脚の蝶
d	齋藤 美衣	2024 庭に埋めたものは掘り起こさなければならない
e	齋藤 塔子	2024 傷の声

分析方法

①自殺念慮・生死に纏わる考えに関する描写のある場面を抜き出した。
②内容がひとまとまりになる所で区切り, KJ 法(川喜田, 1967)にて分類を行った。全部で 706 切片となった。

分類は, 臨床心理学を専門とする大学院生 1 名と教員 1 名が共同で行い, 意見が一致しない場合は協議した上で最終的な分類を決定した。研究目的を知らない臨床心理学を専門とする大学院生 1 名に依頼し, Cohen の k 係数を算出。k=.67 であり, 事前に設定した基準(k≧.60)を満たした為, 評定者間一致は概ね許容可能な水準と判断した。

表2
KJ法による自殺念慮に関する心理的状態の分類結果

	サブカテゴリ	切片	記述例
1：自殺関連行動に纏わる意識	自殺企図時の感情	38	できれば，苦しみなく死にたいな（b）これは，私が死ぬのにかかる時間。たったこれだけだ（c）
	自殺未遂体験の振返り	34	だから，私は飛び降りたことを後悔していないのかもしれない（b）自殺は，難しい，とても難しい（c）
	自傷行為の発現様式	20	私は自分の髪を引っ張り，腕に爪を立てた（a）食べるために食べるのではなく，吐くために食べる（d）
	自傷行為の持つ意味	37	酒とオーバードーズは，こころの痛みから逃れるために意識を飛ばす手段（e）傷は戒めであり，お守りだった（b）
	自傷行為による弊害	16	でも吐くことに生活が支配された状態で，いくら集中しようとしても勉強ができるはずがない（d）
2：自殺念慮	能動的自殺念慮	18	今ここに鉄砲があったらこめかみを撃ち抜くのにな，と思う（a）はっきりと，「死ななきゃいけない」と思った（b）
	受動的自殺念慮	55	どうか眠っているあいだに私が死にますように（c）親友と私はそれを「自殺気分」「自傷気分」と名付けている（e）
	自殺念慮の頻度・強度	18	来る日も来る日も，死にたいと思ってきた（b）希死念慮は徐々に頻繁に強くわたしを襲うようになった（d）
	自殺念慮に関する予期不安	14	自殺を恐れている。自分がうっかりそれをするのではないかということをずっと恐れている（a）「死にたい」と思ったら，いったいわたしはどうしたらいいのだろうか（d）
	自殺念慮のコントロール不全感	24	「死にたい」という気持ちから逃れようと必死なのだけど，自分の中にあるものだから逃れることはできない（a）私を苛んでいるのは「死にたい」という思い（e）
	自殺念慮との対峙	22	できるだけの努力はするつもりだった。「死にたい」という気持ちが消えるための努力を（a）
	生と死での揺れ動き	32	いまだに時々「死にたい」という気持ちになるけれど，死なずにちゃんと生きている（a）「死にたい」と「生きたい」は壮絶な綱引きをしている（e）
3：ネガティブ感情	生きることへの恐怖心	24	16歳の頃，私は生きているのがおそろしかった（c）どうしよう　たすけてください　全部がこわいこわいこわい（e）
	生きることへの罪悪感	33	自分は生きていてはいけないのではないか（d）自分は最低な人間であり殺されるべき存在だ（e）
	自罰的感情	14	自分の弱さはあらゆる苦悩や不満の原因であり，克服すべき（a）私のように甘すぎる人間は苦しんで償えばいい（c）
	孤独感・疎外感	51	誰も頼る人がいなかった。頼る方法もわからなかった（b）わたしはこの世界の中で本当にひとりぼっちだった（d）
	他者への不信感	62	大人に対する信頼の一切を失ったと思う（b）周りの人や周りの世界にも確かなものを見つけることができない（e）
	自身への不信感	14	私にとって、私の存在価値はゼロなのです（c）自分がとても醜く，嘘つきで，汚れた存在のように感じていた（d）
	幸福への忌避感	13	おいしいとか，素敵な場所だとか，実感することが怖いんだと思います（a）「幸せって怖いよね」（e）
4：人生観	時間的展望の歪み・喪失	18	いつまで生きているのか，それまで何をすればよいのかわからなくて不安だった（d）この先自分が自殺してしまうのか，それとも寿命を全うするのか本当にわからない（e）
	生の無根拠性	18	なぜ私は，生きなくてはいけないんだろうか。それがわからない（a）生自体を支える根拠はありません（c）
	死生観	45	人はどんな理由で死ぬかわからない（a）だって生きることは苦しみだ（b）死ぬことは眠ることに多分似ているのです
	生きる理由	22	書くことは生きることと同義なのだった（a）身体が生きたがっている以上，私はそれに従わなければならない（b）
	義務感	10	死にさえしなければいい。生きていればいい（c）そこまで我慢すればいい，あと少しだけ頑張れば終わる（d）
	スピリチュアル	6	いつでもその根拠を支える根拠を問うことができる。だから信仰はいつも仮のものだ（c）
	将来	17	家に帰らなくて済む唯一のチャンスだ（b）次は医師と患者としてではなく，同じ対人援助職として再会したい（e）
	アイデンティティ	31	私のことは私が決める（b）自分なりの物語を持った人間として認識してもらうこと（e）

3. 結果

自殺念慮・生死に纏わる考えに関する描写のある場面は，「1：自殺関連行動に纏わる意識」「2：自殺念慮」「3：ネガティブ感情」「4：人生観」「5：症状」「6：コーピング」「7：ソーシャルサポート」「8：家族への否定的感情」「9：家庭外での被害的体験」「10：仕事のつらさ」「11：ポジティブ感情」「12：読み手へのメッセージ」の 12 の大カテゴリに分類された。中でも，今回は心理状態の分類に着目し，前者 4 つを提示した（表2）。何れも，概ね複数の著作からの記述で構成されていることが分かる。切片の数が最も多かったのは，「3：ネガティブ感情」で 211，その後は「2：自殺念慮」が 183，「4：人生観」が 167，「1：自殺関連行動に纏わる意識」が 145 と続いた。

4. 考察

まず「2：自殺念慮」には，手段や明確な意思を伴う「能動的自殺念慮」と，漠然と死を希求する「受動的自殺念慮」が含まれており，Wastler et. al.（2023）を追認する形となった。自殺念慮の頻度・強度や予期不安など，広範な心理的状態が自殺念慮を構成しており，自殺念慮の正確な開示には，評価時の言葉遣いが大きく影響し，それが個人の自殺に関する思考内容の差異を反映しているという Jobes et al.（2024）の指摘と重なる結果となった。また「3：ネガティブ感情」では，自殺の対人関係理論（Van Orden et. al.，2010）等にて，自殺のリスク因子として位置付けられてきた「孤独感」「罪悪感」に関する記述が目立った。全体を見ると，自殺念慮に関する心理的状態にも，死への願望のみならず，生きる理由や生死の狭間で揺れ動く感情が存在することが示され，自殺に対する保護因子としての可能性が示唆された。当事者の語る“自殺念慮の多義性”を理解した上で，リスク因子と保護因子の両側面を評価する必要があると考えられる。今後は，当事者の言葉を反映した“自殺念慮に関する評価尺度”の作成に繋げていきたい。

主な文献

Jobes, D. A., Mandel, A. A., Kleiman, E. M., Bryan, C. J., Johnson, S. L., & Joiner, T. E. (2024). Facets of suicidal ideation. *Archives of suicide research*, *28*(4), 1263-1278.

感謝と Big Five パーソナリティ
――BFI-2 によるファセットレベルの検討――

今泉里香[1]・小塩真司[2]
([1] 早稲田大学大学院文学研究科・[2] 早稲田大学文学学術院)

Gratitude and Big Five Personality Traits: A Facet-Level Study with the BFI-2

Rika IMAIZUMI [1], Atsushi OSHIO [2]
([1] Graduate School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University,
[2] Faculty of Letters, Arts and Sciences Waseda University)

1. 問題と目的

海外のメタ分析（Frye et al., 2024）によれば，感謝が Big Five パーソナリティ（以下，Big Five）と有意に関連し，外向性，協調性，勤勉性，および開放性とは正の関連，神経症傾向とは負の関連を示すことが報告されている。しかし，メタ分析によるドメインレベルでの検討は頑健な結果が示されるものの，関連の大きさについては必ずしも一様ではない。ドメインレベルにおける関連が不均一である背景には，Big Five のファセットや感謝の次元ごとに関連の強さや方向性が異なっている可能性が考えられる。そこで本研究では，Big Five 尺度にドメインとファセットの両方が測定可能な BFI-2-J，感謝尺度に 1 次元構造の J-GQ-6 および多次元構造の GRAT-SJ を用い，Big Five をファセットレベルで，感謝を多次元レベルで捉えた検討を行う。これにより，従来のドメインレベルの知見にさらなる詳細な知見を追加し，Big Five 各ドメインと感謝の一様ではない関連構造についての考察を深めることを目的とする。

2. 方法

調査対象者

調査は全国の 20–69 歳の男女 500 名を対象にオンラインで行われた（男性 250 名，女性 250 名，M_{age} = 45.22, SD = 13.88）。なお，調査にあたっては日本心理学会倫理規程を参照し，倫理的配慮を行った。

使用尺度

1 次元感謝特性　日本語版特性感謝尺度（J-GQ-6: Hatori et al., 2014）を用いた。本研究では全 6 項目を使用し，7 件法で回答を求めた。

多次元感謝特性　日本語版 Gratitude Resentment and Appreciation Test-Short Form（GRAT-SJ: 今泉他，2026）を用いた。本尺度は 3 次元 16 項目で構成され，「剥奪感の欠如[1]」6 項目，「単純な喜びへの感謝」6 項目，「他者への感謝」4 項目で測定する。本研究では全 16 項目を用い，9 件法で回答を求めた。

Big Five パーソナリティ　日本語版 Big Five Inventory-2（BFI-2-J: Yoshino et al., 2022）を用いた。本尺度は 5 ドメイン（外向性，協調性，勤勉性，否定的情動性，開放性）を各 12 項目で測定する尺度である。各ドメインには 3 つのファセット（E: 社交性，自己主張性，活力; A: 思いやり，敬意，信用; C: 秩序，生産性，責任感; N: 不安，抑うつ，情緒不安定性; O: 知的好奇心，美的感性，創造的想像力）が想定され，各 4 項目で測定する。本研究では全 60 項目を用い，5 件法で回答を求めた。

3. 結果

相関分析の結果，感謝の総合指標（J-GQ-6 および GRAT-SJ 総合点）は，Big Five ドメインレベルとの関連において，先行研究と同様に外向性，協調性，勤勉性，および開放性と有意な正の関連，否定的情動性と有意な負の関連を示した。しかし，感謝の次元レベルでは「他者への感謝」のみが外向性との間に有意な関連を示さなかった。一方，Big Five ファセットレベルとの関連においては，特に外向性の「自己主張性」に関して特徴的な関連が確認された。具体的には，「自己主張性」が J-GQ-6，GRAT-SJ 総合点，および「単純な喜びへの感謝」と有意な関連を示さなかったのに対し，「剥奪感の欠如」とは有意な正の関連，「他者への感謝」とは有意な負の関連という，相反するパターンを示した。また，否定的情動性においては，「他者への

[1] 剥奪感の欠如：人生において奪われているという感覚や不当に扱われているという感覚がないこと（Thomas & Watkins, 2003）

感謝」のみが「不安」との間に有意な関連を示さなかった。(Table 1)

4. 考察

本研究の結果からは，ドメインレベルでは捉えきれない関連の相違が示された。まず，「他者への感謝」と外向性ドメインが有意な関連を示さなかった。これは「他者への感謝」が「自己主張性」と負の関連を示す一方で他のファセットとは正の関連を示したため，同一ドメイン内のファセット間での相殺が生じ，両者の無関連をもたらした可能性が考えられる。また，「自己主張性」は「剥奪感の欠如」とは正，「他者への感謝」とは負の関連を示した。この相反する関連は，同一ファセット内の感謝の次元間で相殺を生じさせ，GRAT-SJ総合点と「自己主張性」の見かけ上の無関連をもたらした可能性がある。さらに，否定的情動性の「不安」においては，感謝の次元間における関連の強さに顕著な差が見られた。具体的には「剥奪感の欠如」と有意な強い負の関連（r = -.50）を示した一方で，「他者への感謝」とは有意な関連を示さなかった（r = -.05)。この結果は否定的情動性ドメインが感謝と負に関連していても，特定のファセットが必ずしも感謝の全次元を抑制するものではないことを示唆している。つまり，「不安」が剥奪感と強く結びついても他者への感謝を必ずしも阻害するものではないという側面は，ドメインレベルの分析のみでは見落とされる可能性がある。

以上の結果は，感謝とBig Five の関連を検討するにあたり，ファセットレベルおよび多次元尺度を用いた検討が，ドメインレベルにおける一様ではない関連構造の解釈を深めるうえで有効であることを支持するものである。

主要引用文献

Hatori, K., Kodama, M., & Koganei, K. (2014). Development of Japanese version of the gratitude questionnaire-6 (J-GQ-6). *3rd Annual International Conference on Cognitive and Behavioral Psychology (CBP 2014)*, 17-22.

今泉 里香・海野 利文・小塩 真司 (2026). 日本語版 Gratitude Resentment and Appreciation Test-Short Form (GRAT-SJ) の作成 *WASEDA RILAS JOURNAL*, *13*, 13-24.

Yoshino, S., Shimotsukasa, T., Oshio, A., Hashimoto, Y., Ueno, Y., Mieda, T., Migiwa, I., Sato, T., Kawamoto, S., Soto, C. J., & John, O. P. (2022). A validation of the Japanese adaptation of the Big Five Inventory-2 (BFI-2-J). *Frontiers in Psychology,* 13: 924351.

Table 1　感謝特性とBig Fiveパーソナリティの相関係数

	外向性 (E)				協調性 (A)				勤勉性 (C)			
	domain	facet			domain	facet			domain	facet		
		社交性	自己主張性	活力		思いやり	敬意	信用		秩序	生産性	責任感
J-GQ-6	.22 **	.24 **	.06	.28 **	.43 **	.42 **	.36 **	.29 **	.24 **	.16 **	.29 **	.18 **
GRAT-SJ	.26 **	.29 **	.07	.32 **	.48 **	.41 **	.43 **	.36 **	.33 **	.24 **	.39 **	.24 **
LOSD	.37 **	.34 **	.30 **	.34 **	.29 **	.19 **	.20 **	.34 **	.25 **	.11 *	.31 **	.22 **
SA	.12 **	.16 **	-.06	.23 **	.42 **	.40 **	.42 **	.23 **	.30 **	.26 **	.33 **	.19 **
AO	.03	.11 *	-.14 **	.09 *	.39 **	.38 **	.38 **	.21 **	.18 **	.15 **	.22 **	.10 *

	否定的情動性 (N)				開放性 (O)			
	domain	facet			domain	facet		
		不安	抑うつ	情緒不安定性		知的好奇心	美的感性	創造的想像力
J-GQ-6	-.28 **	-.17 **	-.29 **	-.27 **	.34 **	.24 **	.31 **	.27 **
GRAT-SJ	-.45 **	-.33 **	-.44 **	-.40 **	.42 **	.28 **	.34 **	.36 **
LOSD	-.53 **	-.50 **	-.55 **	-.36 **	.29 **	.19 **	.18 **	.33 **
SA	-.24 **	-.13 **	-.20 **	-.30 **	.42 **	.29 **	.38 **	.31 **
AO	-.17 **	-.05	-.18 **	-.23 **	.20 **	.12 **	.21 **	.15 **

注). LOSD: Lack of Sense of Deprivation (剥奪感の欠如), SA: Simple Appreciation (単純な喜びへの感謝), AO: Appreciation for Others (他者への感謝); ** p < .01, * p < .05

大学生の一人時間に関する研究
――孤独を好む志向性とポジティブソリチュードに着目して――

中村衣里[1]・三好真優[2]・森脇淑史[2]・勝間田冬華[1]・直原康光[3]
([1]大阪大学大学院人間科学研究科・[2]大阪大学人間科学部・[3]大阪大学)

Alone Time among University Students: Focusing on Preference for Solitude and Positive Solitude
Eri NAKAMURA[1], Mayu MIYOSHI[2], Yoshimi MORIWAKI[2], Fuyuka KATSUMATA[1], Yasumitsu JIKIHARA[3]
([1]Graduate School of Human Sciences, The University of Osaka, [2]School of Human Sciences, The University of Osaka, [3] The University of Osaka)

１．問題と目的　一人時間をめぐっては，近年，孤独（solitude）の肯定的側面にも注目が集まっている。孤独は，不快な苦痛を伴う場合がある一方，一人でいながらも他者との心理的なつながりを感じたり，創造性や自己発見が促されたり，日常的な懸念から解放されたりする肯定的な経験にもなりうる（Averill & Sundararajan, 2014）からである。孤独の肯定的側面に着目した概念として，一人時間をどの程度好むかを表す孤独を好む志向性（preference for solitude; Burger, 1995）と，一人でいることをポジティブな経験として，意識的・自発的に決定することを測定するポジティブソリチュード（positive solitude; Palgi et al., 2021）がある。一人でいることを好む人が，必ずしもその時間をポジティブに経験できるとは限らないことから，両者は重なり合う部分をもちながらも，同一の概念ではないと考えられる。

孤独を好む志向性とポジティブソリチュードの関連や，両者に関連する心理社会的要因の共通点と相違点を明らかにするためには，両者を同一の対象者で測定する必要がある。しかし，そのような研究は見当たらず，同一個人において両者が必ずしも対応しない可能性や，その場合にみられる心理社会的特徴についても検討されていない。また，大学生は生活環境が変化し，自立が求められる時期にあるため，一人時間のあり方を理解することは重要である。そこで本研究では，大学生を対象に，孤独を好む志向性とポジティブソリチュードの関連，ならびに両者とパーソナリティ特性，ソーシャルサポート，人生満足度，孤独感との関連を検討するとともに，両者の高低の組み合わせに基づく各群の心理社会的特徴を明らかにすることを目的とする。

２．方法

調査対象者と手続き　2026 年 6 月，大学生および大学院生を対象に，Google Forms を用いた質問紙調査を実施し，197 名（平均年齢 20.3 歳，*SD* = 1.88）から回答を得た。なお，倫理的配慮として，調査の目的，参加および中断の自由，回答の匿名性，データの利用・管理方法などについて明記した上で，調査参加への回答を持って同意を得た。

調査内容　質問紙は，以下の尺度および項目から構成された。①孤独を好む志向性を測定する，Preference for Solitude Scale 日本語版（Toyoshima & Kusumi, 2022; 以下，PFSS; 17 項目，2 件法），②ポジティブソリチュードを測定する，日本語版 Positive Solitude 尺度（中尾・平野，2024; 以下，PSS; 9 項目，5 件法），③日本語版 Ten Item Personality Inventory（小塩他，2012; 以下，TIPI-J; 10 項目，7 件法），④日本語版ソーシャル・サポート尺度（岩佐他，2007; 12 項目，7 件法），⑤人生に対する満足尺度日本版（角野，1994; 5 項目，7 件法），⑥孤独感尺度短縮版の邦訳版（Igarashi, 2019; 3 項目，3 件法），⑦デモグラフィック項目。なお，本研究で使用しなかった調査項目の記載は省略した。

３．結果

孤独を好む志向性とポジティブソリチュードの関連

TIPI-J で Big Five の各特性を構成する 2 項目間の相関係数は r = .189–.507 であり，その他の尺度の Cronbach の α 係数は.764–.899 であった。一定の信

頼性が確認できたことから，各下位尺度得点を算出した。PFSS と PSS の間には中程度の正の相関が認められた（$r = .449, p < .001$）。

ソーシャルサポート・パーソナリティ特性との関連　PFSS と PSS のそれぞれを従属変数とし，ソーシャルサポートと Big Five の各特性を独立変数とする重回帰分析を行った。両モデルとも有意であった（PFSS: $R^2 = .270$, PSS: $R^2 = .136$, いずれも $p < .001$）。ソーシャルサポートは PSS と有意な正の関連を示したが（$\beta = .175, p = .018$），PFSS とは有意な関連を示さなかった。Big Five の各特性については，外向性は PFSS（$\beta = -.491, p < .001$）および PSS（$\beta = -.218, p = .005$）と負の関連を示し，勤勉性は PSS と有意な正の関連（$\beta = .191, p = .006$），PFSS とも正の関連がみられた（$\beta = .125, p = .050$）。さらに，開放性は PSS とのみ正の関連を示した（$\beta = .159, p = .033$）。

人生満足度・孤独感との関連　人生満足度と孤独感のそれぞれを従属変数とし，Step 1 に Big Five の各特性，Step 2 に PFSS および PSS，Step 3 にソーシャルサポートを投入する階層的重回帰分析を行った。いずれのモデルにおいても，Step 2 および Step 3 で説明率が有意に増加した。人生満足度のモデルでは，Step 2 で PSS が正の関連を示したが（$\beta = .200, p = .009$），Step 3 では有意ではなくなり，ソーシャルサポートが正の関連を示した（$\beta = .361, p < .001$）。孤独感のモデルでは，Step 2 で PFSS が正の関連を示したが（$\beta = .234, p = .006$），Step 3 では有意ではなくなり，ソーシャルサポートが負の関連を示した（$\beta = -.345, p < .001$）。

4 群の比較　これまでの分析から，PSS と PFSS は中程度の相関を示す一方，関連する心理社会的特徴には違いがみられた。その結果を踏まえ，両者の組み合わせによる特徴を探索的に検討するため，それぞれの得点について全体平均値を基準に高低に分け，4 群を作成した。この 4 群を独立変数とし，Big Five の各特性，ソーシャルサポート，人生満足度および孤独感を従属変数とする一要因分散分析を行った。その結果，外向性，協調性，開放性，ソーシャルサポート，人生満足度および孤独感に有意な群間差が認められた。効果量（偏 η^2）は，協調性で小さく（.056），外向性で大きく（.203），その他の変数では中程度（.063–.108）であった。多重比較の結果，人生満足度は〈PSS 高・PFSS 低〉群が他の 3 群より高かった（$ps = .001$–$.018$）。ソーシャルサポートは〈PSS 低・PFSS 高〉群が他の 3 群より低く（$ps \leq .005$），孤独感は〈PFSS 高〉の 2 群が〈PFSS 低〉の 2 群より高かった（$ps = .004$–$.007$）。外向性は，〈PFSS 低〉の 2 群が〈PSS 低・PFSS 高〉群より高く，さらに〈PSS 高・PFSS 低〉群が〈PSS 高・PFSS 高〉群より高かった（$ps \leq .001$）。協調性および開放性は〈PSS 高・PFSS 低〉群が〈PSS 低・PFSS 高〉群より高かった（順に $p = .013$, $p = .002$）。

4. 考察　PFSS と PSS は中程度の正の相関を示し，重回帰分析では，外向性・勤勉性で両者に共通する傾向がみられた。一方，ソーシャルサポート・開放性は PSS とのみ正の関連を示した。以上から，PFSS と PSS は共通性をもちつつも，関連する心理社会的要因には相違があり，孤独の異なる側面を捉えていることが示唆された。

階層的重回帰分析では，Step 2 で孤独感は PFSS のみ，人生満足度は PSS のみと関連し，ソーシャルサポートの投入後にはこれらの関連が有意ではなくなった。PFSS は孤独感という否定的な側面との関連が示された一方，両者ともソーシャルサポートと比較すればその関連は限定的である可能性が示された。さらに，4 群比較では，PSS と PFSS の高低が一致しない 2 群において，特徴的かつ対照的な傾向がみられた。他者と過ごすことを好みながら，一人時間もポジティブに経験できる者は，人生満足度が高く，一人時間を好んでいても，それをポジティブに経験できない者は，ソーシャルサポートが低く，孤独感が高い可能性が示された。以上の分析を通して，ソーシャルサポートの重要性，PFSS と孤独感との関連が一貫して示された。よって，本人が一人時間を好んでいる場合にも，その時間をポジティブに経験できているか，必要なソーシャルサポートが得られているかに目を向けることが重要である。

本研究は，ある大学 1 校の学生のみを対象とした横断研究であり，各特性を 2 項目で測定する TIPI-J を用いたため，パーソナリティ特性の測定精度および結果の一般化には限界がある。今後は，対象を広げた縦断研究や質的研究が必要である。

キャリア・アダプタビリティと時間的展望との関連について
――未来，現在，過去の時間的態度との比較――

四宮康亮 [1]
([1] 追手門学院大学大学院)

The relationship between career adaptability and time perspective: A comparative analysis of time attitudes toward the future, present, and past

Yasuaki SHINOMIYA[1]
([1] Otemon Gakuin University)

1. 問題と目的

Savickas M. L. が提唱したキャリア構築理論（Career Construction Theory: 以下 CCT）は，「不確実な状況の中で，ありたい自分と環境の統合を目指して内的・外的な『適応』を繰り返していく中で，自ら作り出す過程を示すもの」（Savickas & Porfeli, 2012）と定義されている。また，CCT の中核的概念であるキャリア・アダプタビリティ（Career Adaptability: 以下 CA）は，関心，統制，好奇心，自信の4つの次元で構成され，それらを測定する尺度も開発されている（Savickas & Porfeli, 2012）。

CA は，思春期から成人前期のキャリア発達の中心的プロセスであるとした Super（1984）のキャリア成熟を発展させた概念である。小西（2019）は，CA やキャリア成熟は，過去の経験や出来事の評価，未来に起こりうる出来事への期待や不安といった時間的な概念を内包していると指摘している。CCT は CA を中心に，現在および過去のリフレクションをもとに意味づけを行い，未来に向け，生涯にわたり自らのキャリアを構築していく取り組みである。それ故，CCT における CA 構築過程には，時間的展望が重要なのである。CA と時間的展望の関係を検討した先行研究として，Zacher（2014）は，フルタイム就労者を対象に CA と過去，現在，未来に対して注意を向ける程度と定義される時間的焦点との検討を行い，未来との関連が強いことを示している。しかし，青年期を対象とした CA と時間的展望の関係を直接検討した研究はない。

したがって，本研究の目的は，青年期における CA と時間的展望との関係を検討することである。時間的展望の尺度として，本研究では時間的態度を用いて，CA との関係を検討する。時間的態度とは，未来，現在及び過去のそれぞれにおける肯定的，否定的態度を意味する時間的展望の概念の 1 つである。

2. 方法

(1)調査時期及び調査対象者

2025 年 6 月～7 月に Google フォームを通じて大学生を対象に調査を依頼，実施した。調査依頼時に，個人のプライバシーは尊重されることを文章及び口頭で説明を行い，回答をもって同意したものとした。その結果，272 名の回答があり，欠損データや社会人学生が含まれていないかを確認したところ，269 名が有効データであることを確認した。なお，調査対象者の属性は男性 88 名，女性 176 名，回答しないを含むその他5名，平均年齢は 19.00 歳（SD＝1.08）であった。

(2)調査内容

以下の尺度を用いた。

・日本語版キャリア・アダプタビリティ尺度（CAAS-J: 塩川他, 2024）

・日本語版青年時間的態度尺度（ATAS-J: Chishima et al., 2019）

(3)分析方法

調査対象者から回答を得られた内容から統計解析を実施した。

3. 結果

先行研究に基づいた因子の信頼性を確認したとこ

ろ，CAAS-J は.790～.728，ATAS-J は.903～.817 と α 係数は十分な値となった。また，CAAS-J，ATAS-J いずれも尺度内の有意な相関がすべての因子でみられた。次に，尺度間の相関を検討したところ，CAAS-J の 4 下位尺度と ATAS-J の未来肯定，未来否定，現在肯定，現在否定の尺度間全てで相関がみられるという結果となった。また，過去肯定は統制と，過去否定は統制と自信と相関がみられるという結果となった（Table 1）。

Table 1
CAAS-JとATAS-Jの下位尺度間の相関

	CAAS-J			
青年時間的態度尺度	関心	統制	好奇心	自信
未来肯定	.480 ***	.551 ***	.362 ***	.435 ***
未来否定	-.443 ***	-.547 ***	-.327 ***	-.379 ***
現在肯定	.224 ***	.396 ***	.213 ***	.282 ***
現在否定	-.123 *	-.366 ***	-.146 *	-.197 **
過去肯定	.101	.223 ***	.065	.072
過去否定	-.052	-.264 ***	-.059	-.137 *

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

未来肯定得点と，CAAS-J の 4 つの尺度得点との間に正の相関が，未来否定得点と，CAAS-J の 4 つの尺度得点との間に負の相関が認められた。それ故，未来肯定と未来否定の組合せによる CAAS-J の各得点に及ぼす効果を検討するために，2（未来肯定；高低）×2（未来否定；高低）の分散分析を CAAS-J の 4 つの尺度得点ごとに行った。Table2 には，この分散分析に基になる各群の平均及び SD が示されている。分散分析の結果，未来肯定，未来否定における高低の主効果が有意であり，未来肯定高群が低群よりも，未来否定低群が高群よりも 4 つの CAAS-J それぞれの得点が高いことが明らかになった。

4. 考察

本研究の結果，CAAS の 4 つの下位尺度は ATAS-J の未来肯定と正の，未来否定と負の 0.1%水準で有意な相関が示され，先行研究を支持する結果となった。また，現在肯定，否定でも CAAS の 4 つの次元全てと有意な相関が示されたこと，統制は ATAS の 6 下位尺度と 0.1%水準で有意な相関がみられ，全ての時間的態度と関連が高いことが示唆された。さらに，ATAS の未来肯定;高低と未来否定;高低の2×2の分散分析を CAAS-J の 4 つの尺度得点ごとに行った結果，未来肯定，否定の高低の主効果が有意であること，交互作用に有意差がみられなかったことから，未来肯定，未来否定が独立して CA の下位尺度に関連していることが示された。CA は計画を実行したり目標を達成したりするために，自分自身や状況の何かを変化させたり，自分の対応の仕方を変える能力である。すなわち，CA の能力を高めるには，時間的態度の未来肯定を促進するだけでなく未来否定を抑制することが有効であることが示唆された。

主要文献

Chishima, Y., Murakami, T., Worrell, F. C., & Mello, Z. R. (2019). The Japanese version of the Adolescent Time Inventory-Time Attitudes (ATI-TA) scale: Internal consistency, structural validity, and convergent validity. *Assessment*, *26*(2),181-192.

Savickas, M. L. (2019). *Career construction theory: Life portraits of attachment, adaptability, and identity*. Mark L. Savickas.（サビカス, M. L.（著）水野 修次郎・長谷川 能扶子(監訳)（2023). サビカス キャリア構成理論: 四つの〈物語〉で学ぶキャリアの形成と発達 福村出版）

Table 2
未来肯定、未来否定の高低とCAAS平均値との分散分析

	未来肯定高群				未来肯定低群				分散分析（F値）		
	未来否定高群 (n=36)		未来否定低群 (n=97)		未来否定高群 (n=102)		未来否定低群 (n=34)				
CAAS	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	未来肯定差	未来否定差	交互作用
関心	20.28	4.50	21.78	3.88	17.06	4.05	18.91	3.38	30.394 ***	9.242 **	.099
統制	21.08	3.64	23.09	3.35	18.11	3.64	20.82	3.16	29.361 ***	23.831 ***	.532
好奇心	20.67	4.38	22.57	3.75	19.49	3.82	20.44	3.23	9.741 **	7.262 **	.805
自信	20.94	3.68	21.79	3.41	18.16	3.80	19.91	3.41	21.793 ***	6.778 *	.820

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

大学受験経験とキャリア選択自己効力感，結果期待，キャリア探索行動の関係

秋山史子 [1]
（[1]労働政策研究・研修機構）

Relationship between Experiences of University Entrance Examination, Career Choice Self-Efficacy, Career Outcome Expectations and Career Explosion.

Fumniko AKIYAMA[1]
([1]The Japan Institute for Labour Policy and Training)

1. 問題と目的

近年，キャリア選択自己効力感および結果期待に影響を及ぼす経験として，大学受験の経験に注目が集まっている。秋山（2023）は，就職活動を経験していないと考えられる大学1，2年生を対象に，大学受験経験とキャリア選択自己効力感および結果期待の関係を検討した。大学入試に至るまでの努力の経験が自己効力感と結果期待に正の関連を示し，受験期間中のネガティブな情動経験と自己効力感に負の関連があることが示された。このように大学受験の経験が大学入学後のキャリア選択自己効力感に重要な役割を果たすこと，そして，受験結果ではなくその過程での努力の認知が重要であることが示唆された。

キャリア選択自己効力感と結果期待は，職業選択行動に対して有効な予測因子であることが示されてきた。キャリア選択自己効力感とは，キャリアを決定するために必要となる具体的な課題や行動に関する自己効力感と定義される（Taylor &Betz, 1983）。この自己効力感が高いと職業未決定を抑制することや積極的に就職活動に取り組むことが明らかになっている（e.g., Taylor &Popma, 1990）。一方，キャリア選択結果期待は，教育場面やキャリア意思決定場面での成功に関する結果への長期的な信念であり，その行動がその後のキャリアの選択肢や意思決定に役立つと信じていることと定義される（Betz &Voyten,1997）。キャリア選択結果期待は自己効力感よりもキャリア探索意図に大きい影響力を示すなど，独自の働きを持つ予測因子として検討されてきた。

大学入学前の大学受験経験がキャリア選択行動の重要な予測因子である自己効力感，結果期待に関連しているのならば，同じく進路選択行動である，大学入学後のキャリア選択行動にも関連している可能性がある。

そこで本研究は，大学受験経験とキャリア自己効力感，結果期待，キャリア選択行動が関連しているか検討することを目的とする。本研究では。秋山（2023）と同様に，大学1，2年生を対象にする。1，2年生は具体的な就職活動は開始していないまでも，大学でのキャリア教育科目の受講を中心に，就職活動の準備行動として仕事や自分自身について考える機会があると考えられる。そのため，本研究ではキャリア選択行動としてキャリア探索行動を取り上げ，キャリア探索意図と合わせて検討する。

2. 方法

調査時期　2024 年 2 月に株式会社クロス・マーケティングの Web 調査サービスを利用して，登録モニターを対象に Web 上でアンケート調査を実施した。

調査参加者　400 名のモニターが調査に回答した。回答者の属性は女性 308 名，男性 83 名，1 年生 200 名，2 年生 200 名，平均年齢 19.52 歳（*SD*＝0.71）であった。入試形態別の人数は，一般入試 217 名，指定校推薦 81 名，公募制推薦 34 名，系列校からの進学 20 名，総合型選抜 48 名であった。

使用測度　(1) 大学受験経験尺度：秋山（2023）が作成した尺度の表現を一部修正して用いた。14 項目。本尺度は，大学受験期間中の努力した経験を表す「努力経験」，受験期間中に経験したネガティブな情動経験を表す「受験期不安」，大学受験の結果への評価を表す「結果の不満足度」の3つの下位尺度

から成る。回答は 5 段階評定であった。（2)キャリア選択自己効力感尺度:花井（2008）の 25 項目を使用した。本尺度は「自己評価」,「目標選択」,「計画立案」,「情報収集」,「意思決定の主体性度」の5つの下位尺度から成る。4 段階評定。(3)キャリア選択結果期待尺度:Betz &Voyten(1997)を邦訳した安達（2001）の 4 項目を使用した。5 段階評定。(4) キャリア探索意図尺度:結果期待と同じく Betz & Voyten(1997)を邦訳した安達(2001)5 項目を使用。5 段階評定。(5)キャリア探索行動尺度:安達(2008)の 13 項目を使用した。本尺度は,自分の長所や人生について考えることを表す「自己探索行動」と職業や働くことに関する情報を探索することを表す「環境探索行動」の2つの下位尺度から成る。5 段階評定。

倫理的配慮　本研究は,学習院大学研究倫理委員会の承認を得て実施された(承認番号:2023072)。

3. 結果

大学受験経験,キャリア選択自己効力感,結果期待とキャリア探索意図,キャリア探索行動の関連を検討するため,キャリア探索行動の 2 因子(環境探索行動,自己探索行動)をそれぞれ目的変数,Step1 にコントロール変数(性別,学年,入試形態のダミー変数),Step2 に大学受験経験の3因子,Step3 にキャリア選択自己効力感と結果期待 ,Step4 にキャリア探索意図を投入する階層的重回帰分析を実施した(Table1)。各モデルはすべて有意であった。

環境探索行動を目的変数とした分析結果を見ると,Step2 では大学受験経験のうち努力経験のみが有意な正の関連を示した。Step3 ではキャリア選択自己効力感の下位尺度のうち,目標選択および計画立案の自己効力感が有意な正の関連を,自己評価の自己効力感が有意な負の関連を示した。自己探索行動を目的変数とした分析でも,大学受験経験は有意な R^2の増分を示し,努力経験のみ正の関連を示した。キャリア選択自己効力感では,自己評価の自己効力感のみ有意な正の関連を示した。

したがって,大学受験経験は環境探索行動,自己探索行動どちらとも関連があることがわかった。特に努力経験が正の関連を示していた。自己効力感は,関連のあった下位因子こそ異なるが,どちらの探索行動へも関連が示された。キャリア探索意図もまた正の関連が示された。一方,キャリア選択結果期待は,探索行動との有意な関連が示されなかった。

Table 1　キャリア探索行動を目的変数とした階層的重回帰分析結果

		環境探索行動					自己探索行動				
		ΔR^2	ΔF	B	SE	β	ΔR^2	ΔF	B	SE	β
Step1	コントロール変数										
	性別（0＝女性、1＝男性）			-.17	.10	-.08			-.16	.09	-.07
	学年（0＝１年生、１＝２年生）			.19	.08	.10 *			.09	.07	.04
	一般選抜			###	.20	-.40 ***			-2.45	.18	-.50 ***
	指定校推薦			-.77	.15	-.23 ***			-1.49	.14	-.40 ***
	公募制推薦			-.26	.13	-.09 *			-.50	.12	-.16 ***
	系列校進学	.25	20.94 ***	.20	.11	.08	.48	59.19 ***	.50	.10	.19 ***
Step2	大学受験経験										
	努力経験			.15	.04	.19 ***			.10	.04	.12 **
	受験期不安			.01	.04	.01			-.02	.04	-.02
	結果の不満足度	.03	5.99 ***	.05	.10	.02	.01	3.37 *	-.08	.09	-.03
Step3	自己効力感、結果期待										
キャリア選択自己効力感	自己評価			-.16	.08	-.13 *			.31	.08	.22 ***
	目標選択			.34	.09	.29 ***			.11	.09	.09
	計画立案			.22	.08	.19 **			-.07	.07	-.06
	情報収集			.17	.09	.14			.13	.08	.10
意思決定の主体性度				-.06	.08	-.05			-.04	.07	-.03
キャリア選択結果期待		.15	16.93 ***	-.01	.05	.00	.09	14.40 ***	.08	.05	.07
Step3	キャリア探索意図	.03	24.48 ***	.33	.07	.25 ***	.01	7.42 **	.17	.06	.12 **

*p<.05、**p<.01、***p<.001

4. 考察

大学入学前の大学受験経験は大学入学後のキャリア選択行動と関連していることが示唆された。キャリア探索行動を支援する際には,大学受験で自分が頑張っていたことを想起させることも有効だろう。秋山(2023)では大学受験経験とキャリア選択自己効力感の関連が示されていることから,大学受験経験はキャリア選択自己効力感を介してキャリア探索行動に影響している可能性もある。今後は,この媒介効果についても検討が必要だろう。

また,キャリア選択自己効力感が探索行動を促す可能性も示唆された。ただし,自己評価の自己効力感のみ環境探索行動と自己探索行動では正負異なる関連があり,先行研究とは異なる結果であった。この点は引き続き検討が必要かもしれない。しかしながら,本研究の結果からはキャリア選択自己効力感が持つ,キャリア選択行動の重要な予測因としての働きが改めて確認されたと言えよう。

主な文献

秋山史子(2023). 大学受験経験とキャリア選択自己効力感およびキャリア選択結果期待の関係　応用心理学研究, *49*(2), 110-118.

現代青年は情緒的交流をどのように体験しているのか
――大学生への半構造化面接によるテーマ分析から――

浦邉綾子[1]・宮本淳[2]・清瀧裕子[1]
([1]愛知淑徳大学心理学部・[2]愛知医科大学医学部心理学)

Experiences of Emotional Communication among Contemporary Young Adults: A Thematic Analysis of Semi-Structured Interviews with University Students

Ayako URABE[1], Atsushi MIYAMOTO[2], Yuko KIYOTAKI[1]
([1]Department of Psychology, Aichi Shukutoku University [2]Psychology, Aichi Medical University)

1. 問題と目的

現代青年の友人関係については，関係の希薄化や深い関わりの回避が論じられてきた。しかし，友人関係を単に希薄化として捉えることには異なる見方もある。白井・大谷（2017）は，現代青年が相手との心理的距離を保ちながらも，自己開示を通して安心感や親密さを形成していることを指摘している。こうした知見を踏まえると，現代青年の対人関係を理解するためには，関係の深さだけでなく，青年自身が他者との関わりをどのように体験し，どのようなつながりを求めているのかという交流の質に着目する必要がある。

こうした交流の質を捉える一つの視点として，情緒的交流が挙げられる。本研究では，感情や感覚を他者と共有し，理解し合う言語的・非言語的なやりとりを「情緒的交流」と捉える。他者との交流は，自らの感情を調整するための方略として用いられることが示されている（浦野，2017）。しかし，青年は常に情緒的交流を求めるわけではない。現代青年の友人関係では，互いに傷つけ合わないよう気を遣いながら関係を維持しようとする傾向が指摘されている（岡田，2011；淨沼・伊藤，2021）。したがって，青年がどのような場合に情緒的交流を求め，どのような場合に情緒的交流を控えるのかを，青年自身の体験から捉えることが必要である。

そこで，本研究では，大学生への半構造化面接を通して，情緒的交流を求める「交流のニーズ」と，情緒的交流を控える「非交流のニーズ」の双方を探索的に検討することを目的とする。

2. 方法

2025 年 11 月から 12 月にかけて，大学生 16 名（平均年齢＝20.13，*SD*=1.27）を対象に個別の半構造化面接を実施した。面接では，人との関わりのなかで「気持ちが通じた」と感じた体験，「気持ちが通わなかった」と感じた体験，人と気持ちをやりとりしたいと思うとき，やりとりしたくないと思うとき，人と関わる際に気持ちのやりとりを重視するかについて尋ねた。面接内容は逐語化し，Braun ＆ Clarke（2006）を参考に，コード化とテーマの検討・生成を行った。研究参加者には，研究内容について説明し，同意を得た上で調査を実施した。なお，本研究は愛知淑徳大学心理学部倫理委員会の承認を得て実施された（承認番号 2025-09）。

3. 結果

分析の結果，「交流のニーズ」に関する 6 テーマと，「非交流のニーズ」に関する 5 テーマが生成された（表 1）。

「交流のニーズ」では，楽しさや喜びを共有することに加え，自分の気持ちや体験を受け止めてもらうことが多く語られた。また，「気づいてほしい」「もっと聞いてほしい」といった，相手から関心を向けられることを求める語りもみられた。さらに，他者と話すことで気持ちが軽くなることや，自分の感情や考えが整理され，新たな視点が得られることも語られた。

「非交流のニーズ」では，理解されなかった体験や傷つきへの懸念から交流を控えることに加え，信頼できる相手や「わかってくれそうな人」を選んで気持

ちを伝えること，自ら解決しようとすることが語られた。さらに，自分のつらさを話すことで相手に負担をかけることや，自分の感情を伝えることで相手を傷つけたり，嫌な思いをさせたりすることを懸念し，あえて気持ちを伝えないという語りもみられた。

表 1　情緒的交流における「交流のニーズ」と「非交流のニーズ」のテーマと内容

	テーマ	内容
交流のニーズ	楽しさ・喜びの共有	趣味や面白いこと，嬉しいことなど，肯定的な感情や体験を他者と共有することを求める
	共感・理解される体験	自分の気持ちや体験を「わかってもらえた」と感じることを求める
	受容され安心する体験	自分の気持ちを否定されずに受け止めてもらい，安心できることを求める
	関心・気づきを求める	自分に関心を向けてもらい，言葉にしなくても気持ちや変化に気づいてもらうことを求める
	対話による思考・感情の整理	他者と話すことで気持ちが軽くなったり，自分の感情や考えが整理されたり，新たな視点を得たりする
	非言語的要素を伴うやりとり	表情や声，対面でのやりとりなど，言葉以外の手がかりを含む交流を重視する
非交流のニーズ	理解されない苦しさ	気持ちをわかってもらえない体験から，情緒的なやりとりを求めなくなる
	傷つきを回避する関係調整	傷つきや対人関係上の負担を避けるため，他者との距離を調整する
	信頼できる相手の選択	誰にでも気持ちを話すのではなく，信頼でき，理解してくれそうな相手を選んで話す
	自己解決志向	他者に話すよりも一人で考えたり，自分で解決したり，気持ちを自分のなかにとどめたりする
	相手への配慮	相手に負担をかけることや迷惑をかけることを避けるため，気持ちの表出を控える

4. 考察

本研究では，大学生の情緒的交流における「交流のニーズ」と「非交流のニーズ」を探索的に検討し，それぞれに複数の側面が示された。「交流のニーズ」では，「わかってほしい」「受け止めてほしい」といった，他者からの理解や受容を求める語りがみられ，こうした結果は白井・大谷（2017）の指摘とも一致する。なかでも，本研究で特徴的であった「気づいてほしい」というニーズは，自ら気持ちを表出して理解を求めるだけでなく，相手から関心を向けられ，自分の気持ちや変化を汲み取ってもらうことへの期待を示すものと考えられる。

「非交流のニーズ」では，「理解されない苦しさ」や「傷つきを回避する関係調整」に加え，「相手に負担をかけたくない」「相手を傷つけたくない」といった「相手への配慮」がみられた。この点は，相手を傷つけないための配慮を含む傷つけあい回避傾向を示した淨沼・伊藤（2021）の知見とも関連する。また，「自己解決志向」として，自らのなかで感情を処理しようとする側面も示された。これらの結果から，情緒的交流を控えることには，自らが傷つくことへの懸念だけでなく，自分の気持ちを他者との関係に持ち込むことで，相手や関係に影響を及ぼすことへの慎重さが関わっていることが考えられる。

このように，「気づいてほしい」という交流のニーズがみられる一方で，相手への配慮や傷つきへの懸念から，自ら気持ちを伝えることを控え，自分のなかで解決しようとする側面がみられことから，自己解決志向は，必ずしも他者との交流を必要としないことを意味するのではない。他者との間で気持ちを扱いたいというニーズがありながらも，それを表出することへのためらいから，自己調整に向かっている可能性がある。したがって，表面的には自己解決を志向し，情緒的交流を控えているようにみえる青年について，その姿を交流のニーズの乏しさとして捉えるのではなく，表出されにくい交流のニーズにも目を向けることが重要である。

文献

Braun, V., & Clarke, V. (2006). Using thematic analysis in psychology. *Qualitative Research in Psychology, 3,* 77-101.

淨沼 和浩・伊藤 大輔 (2021). 傷つけあい回避傾向が友人への信頼感に与える影響――最も親しい同性の友人を信頼の対象とした検討――ストレス科学研究, *36,* 33-39.

岡田 努 (2011). 現代青年の友人関係と自尊感情の関連について パーソナリティ研究, *20,* 11-20.

白井 利明・大谷 宗啓 (2017). 現代青年の友人関係は希薄化したのか――青年バッシングという世代間格差に抗して―― 心理科学, *38,* 1-9.

浦野 由平 (2017). 感情制御を目的とした対人交流方略と精神的健康との関連 感情心理学研究, *24,* 101-111.

付記

本研究は愛知淑徳大学の研究助成を受けて実施された（研究課題番号 25TT08）。

成人期の娘に対する母親の認知に関する一報告
――15 答法の分析と縦断的データとの関連に基づいて――

小高 恵
（太成学院大学）

Mothers' Perceptions of Their Daughters in Adulthood: An Analysis of the 15-Statement Test in Relation to Longitudinal Data

Megumi KOTAKA
(Taisei Gakuin University)

1. 問題と目的

母娘関係は，女性のアイデンティティ形成や心理的適応において極めて重要な役割を果たす（水本・山根，2011）。思春期から青年期にかけて，その関係性は「依存」から「相互的個別化」へと変容し，親からの心理的自立を試みる時期でもある。小高（2025）では，小高（2020）で対象とした娘の成人後の母娘関係について，母親３名を対象に調査を行い，発達的変化について検討し，中学生当時の母娘関係の認知のズレが，成人後の母娘関係にも影響を及ぼしている可能性があることを報告している。本発表では，母親 3 名を対象とした質的データを分析し，思春期初期の母娘関係と娘の成人後における母親の捉え方との関連について，小高（2025）の知見を参考にしながら，縦断的な視点から考察することを目的とする。

2. 方法

調査協力者：小高（2020）で対象とした母親 3 名。質問紙:娘イメージ測定尺度を用いた。「“私の娘は”に続く文を頭に浮かんできた順に書いてください。」と教示し，15 の文章を記述してもらった。倫理的配慮：調査に先立ち，個人情報保護とプライバシーを尊重，および関連法規の遵守について説明し，同意と承諾を得た。分析方法：(1)得られた回答記述から，まず生成 AI（Gemini）を用いて分類基準を導出させ，「肯定的記述」「否定的記述」「中立的記述」への一次分類を行った。その後に，筆者が各記述の文脈を精査して分類の妥当性を確認した。(2) 母親（事例）ごとの記述内容について質的な分析を行い，それぞれの母親の娘に対する認知の特徴を整理した。

3. 結果

(1) 15 答法における記述の分類結果

母親3名の娘に関する記述の AI が導出した分類基準は Table1 の示す通りである。次に AI による判定と筆者の解釈が分かれた記述（「私の娘は，妥協しない」）については，文脈に応じた多義的な解釈が可能であると判断し，最終的に「中立的記述」として分類した。

Table 1 分類の基準

分類	内容
肯定的な記述	娘の長所，美徳，自律への肯定的評価，親としての愛情表現など
否定的な記述	娘の短所，生活面への不満，わがままや頑固さの指摘など
中立的な記述	客観的な事実，趣味・嗜好，どちらとも捉えられる性格特徴など

分類された記述の内訳をみると，肯定的記述については，「私の娘は，しっかりしている」「私の娘は，宝ものです」「私の娘は，真面目だ」といった記述が 24 件認められた。次に否定的記述については，「私の娘は，口が悪い」「私の娘は，世間知らずな所があります」「私の娘は，片づけが苦手だ」といった記述が 13 件認められた。最後に中立的記述については，「私の娘は，私のことを冷静に見ている」「私の娘は，感受性が強いです」「私の娘は，料理が好きだ」といった記述が８件認められた（Table 2）。それぞれの母親の記述を「肯定的記述」「否定的記述」「中立的な記述」に分類した結果，統計的な有意差は認められな

かったが，どの事例においても，肯定的な記述が否定的な記述の数を上回る傾向にあった。

Table 2　母の娘に対する 15 答法の記述の分類

ID	肯定的記述	否定的記述	中立的記述	合計
ID1001	9	4	2	15
ID1002	7	6	2	15
ID1004	8	3	4	15
合計	24	13	8	45

（2） 各事例の質的特徴

① ID1001 の記述について：「しっかりしている」「責任感がある」「社交性がある」など（肯定的記述），適応力が高い娘として認知していることがわかる。また「私のことを冷静に見ている」という記述があり（中立的記述），娘が親を客観視している様子も窺われる。一方で，「口が悪い」「わがままなところがある」といった否定的記述が認められた。

② ID1002 の記述について：「宝物」「優しい子」「大切」「幸せになってほしい」「まじめ」「頑張り屋さん」など（肯定的記述），娘を大事にしている様子や娘の努力を評価している様子が窺われる。一方で，「スマホ依存」「貯金しない」「規則正しい生活をしていない」など，日常行動への具体的な否定的記述が認められた。

③ ID1004 の記述について：「真面目」「よく笑う」「周りの人に気を遣っている」「曲がったことが嫌い」など（肯定的記述），他者への気配りができる娘として認知している。また「料理が好き」「肉と桃が好き」といった娘の趣味・嗜好の記述がみられた。一方で，「片づけは苦手」「めんどくさがり屋」といった日常生活の中での否定的な記述が認められた。

4. 考察

ID1001 と ID1004 の母親は，娘を精神的に成熟し，対等あるいはそれ以上に信頼・自立した存在として捉えていた。両事例に共通する特徴は，娘を自分の一部と捉えるのではなく，「一人の独立した対等な人格」として認めており，心理的境界線が確立している点である。小高・紺田（2020）の中学 1 年当時の結果にみられる母娘関係の認知のズレが少ない安定的な母娘関係が土台となり，成人期における良好な個別化の関係性を支えていると推測される。

一方で，ID1002 の母親は，娘を「自分の一部」として捉え，心理的境界線が曖昧になっている可能性が示唆される。否定的記述が他の母親より多い点は，小高（2025）の現在の対立得点の高さとも一致する。同研究においては，この母親は中学3年当時の娘の反抗と統制を高く回想していたが，実際の中学 1 年時点の母親の統制得点は 3 事例中で最も低かった。また小高・紺田（2020）において，本事例は母娘関係の相互パスが極めて少ないことが報告されている。これらの結果から次のような可能性が考えられる。第 1 の可能性は，娘への否定的な記述や心理的境界線の曖昧さが，現在直面している母娘間の「対立」を反映したものであり，この現在の葛藤状態と整合性を保つために，過去の記憶をネガティブに書き換える「記憶の再構成」が生じているという解釈である。第２の可能性は，思春期初期における「低統制」が，「葛藤を避けるための回避的放任」の可能性があるということである。ぶつかり合いを避けたことで認知のズレが解消されないまま推移し，中学 2・3 年期以降に対立が顕在化した可能性が考えられる。

上記の考察から，母娘関係の縦断的変容には単なる過去の延長ではない動的プロセスが存在するということ，また現在の対立を生み出した関係性は，過去の記憶をも変容（再構成）させる可能性があるということが示唆された。

文献

小高 恵（2025）．思春期から青年期後期の母娘関係の縦断的研究の一報告―母親の認知に焦点を当てて― 日本発達心理学会 第 36 回大会発表論文集，369．

小高 恵・紺田 広明（2020）．中学生における日々の母娘関係の時系列的研究－3 組の母娘ペアデータを多集団同時分析に適用して－ 太成学院大学紀要，22，33-43．

水本深喜・山根律子（2011）．青年期から成人期への移行期における母娘関係―「母子関係における精神的自立尺度」の作成および「母子関係の 4 類型モデル」の検討 教育心理学研究，59，462-473．

大学新入生の友人関係形成過程の調査
――テーブルトーク・ロールプレイングゲームと人狼ゲームの比較から――

大羽達己 [1]
([1] 同朋大学大学院人間学研究科)

A Study on How First-Year College Students Make Friends: From Comparing Table-Talk Role-Playing Games and Werewolf Games

Tatsuki OHBA[1]
([1]Graduate School of Human Studies, Doho University)

1. 問題と目的

青年期では友人関係が最も強い人間関係であり(葛西・松本,2010)、青年期の友人関係が青年の自己形成においてもつ重要性を指摘する見解も多い(中間,2014)。

友人関係は青年期にとって重要であるが、今回は特に大学 1 年生を対象とした。梅本(1996)は、大学生の友人関係が入学後 1 カ月前後という短期間内で急速に形成されることをレビューしている。また池田ら(2013)によれば、大学生は内省力が高いと考えら、友人関係における共有様式を意識化することが容易であると考えられる。

梅本(1996)の調査から大学入学直後の共行動(講義を一緒に受ける、昼食を一緒に食べるなど)が不安の低減に効果をもたらすことが明らかになった。宮川・高橋(2023)は梅本(1996)を引用しつつ、現代においても大学入学直後に学内活動への積極的な姿勢が見られることを示唆している。これらの研究から、大学 1 年生に対して共行動を促すことで、友人関係が形成・維持されやすくなることが予想される。本研究では、共行動としてアナログゲームを提案し、探索的な研究を行う。

ゲームは青年にとって学習活動とは異なることから、取り掛かりのハードルが低いことが予想される。本研究ではゲームから協力的なゲームとしてTRPG(Table-Talk Role-Playing Games)を、非協力的ゲームとして人狼ゲームを選出し、それぞれのゲームを行った大学新入生の友人関係の形成を観察する。

TRPG とは、ルールブックに従って司会進行役が情景を説明していき、イメージを共有して遊ぶゲームであり、参加者が行うコミュニケーションを通じて、架空のキャラクターたちが織りなす物語やドラマを創り、それを楽しむものである(矢野・F.E.A.R, 2009)。

人狼ゲームとは参加者の中にいる人狼を探し出すために全員で会議を行い、人狼だと思う人を多数決で選ぶゲームであり、世界中で大人から子どもまで楽しまれているコミュニケーションゲームである(丹野・児玉,2015)。

上記の説明の通り TRPG と人狼ゲームはゲームの性質が異なる。端的に言えばそれが勝敗の有無や参加者同士で疑う行為の有無となるのであるが、こうした共行動の性質の差異によって友人関係形成に差が生まれるかの研究は意義があると考える。

本研究は共行動に関して異なるアプローチを持つTRPGと人狼ゲームを行った際の青年の友人関係の性質を観察し、質的に明らかにすることを目的とする。

本研究の成果が、青年の友人関係形成に有効な共行動の性質を明らかにすることが期待でき、大学入学時をはじめとした青年の友人関係が新たに形成される場面での、適切な介入方法を示唆することが予想される。本研究は、青年の友人関係が円滑に築き、青年の社会的な健康度を上げることで社会に貢献したいと考える。

2. 方法

第1節　調査協力者　東海地方の私立大学で第 1 学年の必修授業の初回にて、2007 年 4 月 2 日から 2008 年 4 月 1 日に生まれた 18 歳～19 歳の大

学学部新入生を対象に質問紙調査を行った。質問紙の配布数は168件で、回収は149名分であった。質問紙内で実験調査への協力の可否を問い、実験参加を希望した 18 名を履修状況および参加者の都合を考慮して群分けを行った。当日の欠席者がいたため、最終的な実験参加者は TRPG 群 2 名、人狼ゲーム群 6 名、統制群 4 名の計 12 名となった。

実験は筆者の所属する大学の一室で行い、3 群ともすべて同一の実験室で実施した。実験時間は説明等を含めて TRPG 群が 1 時間 45 分程度、人狼ゲーム群と統制群が 45 分程度であった。

3 群ともタブレット端末 3 台とビデオカメラ 1 台の計4台で 4 方向から録画した。

第2節　教示と配置　各群の教示と配置は以下のとおりである。

第1項　TRPG 群　筆者の役割：筆者は司会進行（ゲームマスター；GM）として参加した。GM は必要に応じてノンプレイヤーキャラクター（NPC）や実験参加者にアドバイスを行う役割として実験参加者に介入した。

道具：「サンディ・ピーターセン、ポール・フリッカー、マイク・メイソンほか（著）　坂本雅之ほか、アーカム・メンバーズ（訳）（2019）.新クトゥルフ神話 TRPG ルールブック　KADOKAWA」を用いて筆者が作成した TRPG シナリオ「希望のボトル」を用いた。また、当該シナリオを本研究へ用いる妥当性の検証として、当該シナリオ作成においてクトゥルフ神話 TRPG を（版の新旧を問わず）10 回以上プレイしたことがある者 4 名にテストプレイを依頼し、いずれのテスターからも初心者が遊ぶものとして適したシナリオであるという評価を受けた。

第2項　人狼ゲーム群　筆者の役割：筆者は司会進行（ゲームマスター；GM）として参加した。GM は司会進行のみに徹し、必要最低限の会話のみ行った。

道具：「株式会社人狼（監）.幻冬舎会話型心理ゲーム 人狼 DX 新装版」を用い、7 人プレイ用の配役を採用した。

第3項　統制群　筆者の役割：筆者は「30 分間自由にお過ごしください」と教示し、以降 30 分間は介入せず観察に徹した。

道具：刺激として机上には漫画や雑誌、新聞、文庫本を配置した。

第3節　倫理的配慮

参加者には研究目的を説明し、自由意思による参加であること、いつでも辞退可能であることを説明した。本研究は同朋大学研究倫理委員会の承認を受けて実施した（承認番号 2025-03-08）。

3. 結果と考察

実験を終了し、現在データを分析中である。データの分析は事象見本法を用いた観察法的手法によって収集したデータをソシオグラムに表し、実験参加者のダイナミクスを説明している。

文献

池田幸恭・葉山大地・高坂康雅・佐藤有耕（2013）. 大学内の友人関係における親密さと共有様式との関係　青年心理学研究, 24(2), 111-124.

株式会社人狼（監）. 幻冬舎会話型心理ゲーム 人狼 DX 新装版

葛西真記子・松本麻里（2010）. 青年期の友人関係における同調行動――同調行動尺度の作成　鳴門教育大学研究紀要, 25, 189-203.

宮川真綾・髙橋尚也（2023）. 大学新入生における友人関係構築行動に関する探索的検討――大学 1 年生への面接調査から　立正大学心理学研究年報, 14, 41-49.

中間玲子（2014）. 青年期の自己形成における友人関係の意義　兵庫教育大学研究紀要：学校教育・幼年教育・教育臨床・障害児教育・言語系教育・社会系教育・自然系教育・芸術系教育・生活・健康系教育・総合学習系教育, 44, 9-21.

サンディ・ピーターセン、ポール・フリッカー、マイク・メイソンほか（著）　坂本雅之ほか、アーカム・メンバーズ（訳）（2019）. 新クトゥルフ神話 TRPG ルールブック　KADOKAWA

丹野宏明・児玉　健（2015）. 人狼ゲームで学ぶコミュニケーションの心理学――嘘と説得、コミュニケーショントレーニング　新曜社

梅本信章（1996）. 大学入学直後の友人関係と不安に関する一研究　盛岡大学紀要, 15, 183-189.

矢野俊策・F. E. A. R.（2009）. ダブルクロス The 3rd Edition ルールブック 1 富士見書房

アタッチメントの視点から考える中学生の対人関係と適応
――孤独感・生活満足度・自己実現に着目して――

中尾達馬 [1]
([1] 琉球大学)

Interpersonal Relationships and Adjustment in Junior High School Students from an Attachment Perspective: Loneliness, Life Satisfaction, and Self-Actualization

Tatsuma NAKAO[1]
([1]University of the Ryukyus)

1. 問題と目的

発達科学者は、児童生徒の発達にとって、親子関係や友人関係などの対人関係のうち、どの関係がより重要なのかを問うのではなく、それぞれの対人関係が重要であると考える(Sroufe, 2005 数井他監訳, 2022)。この考え方には、それぞれの対人関係が独立して重要であるという主効果的な視点と、複数の対人関係が相互に影響し合うという交互作用的な視点が含まれる。

大金(2024)は、主効果的な視点から、中学校 1 年生を対象として、親へのアタッチメント、および教師や友だちの持つ安心の基地機能が、児童生徒の社会情緒的能力の高さと関連することを示した。一方、林田他(2018)は、交互作用的な視点から、親へのアタッチメントが不安定であっても、中学校における対人関係、すなわち教師との関係や友人関係に満足している場合、それらの関係が補償的に機能し、中学生の学校適応感が高まる可能性を示した。

しかし、従来の研究では、アタッチメントの視点から教師との関係や友人関係を捉える際、それぞれの関係性の特徴やアタッチメント形成のプロセスを踏まえた概念化・測定は必ずしも十分ではない。そこで本研究では、アタッチメントの視点から、改めて中学生における親子関係、教師との関係性および友人関係を捉え、それらの対人関係が、孤独感、生活満足度、自己実現度に対して、主効果的あるいは交互作用的にどのように関連するのかを明らかにすることを目的とした。

2. 方法

調査対象者 調査対象者は、大阪市立 A 中学校に通う中学生 369 名(1 年生 118 名、2 年生 145 名、3 年生 106 名)であった。

質問紙 調査票は、以下の内容で構成された:(1)フェイスシート(学年、年齢、性別、スペシャルサポートルーム(SSR)利用の有無)、(2)中学生用簡易版社会経済的地位代替指標(石井他, 2019;3 項目)、(3)親へのアタッチメント:児童版 ECR-RS(中尾他, 2019, 2020;9 項目)、(4)教師との関係性(Relatedness;須他, 2000;5 項目)、(5)ピア・アタッチメント(IPPA-R 下位尺度「コミュニケーション」;Gullone & Robinson, 2005;8 項目)、(6)短縮版孤独感尺度(井上・高橋訳, 2000;5 項目)、(7)生活満足度(日本語版 SLSS;吉武訳, 2010;7 項目)、(8)中学生用短縮版自己実現尺度(Jones & Crandall, 1986;分析には 15 項目中 10 項目を使用した。$\alpha = .62$)。なお、(2)は 2 件法、(6)は 5 件法、それ以外は 4 件法であった。

手続き等 本研究は Web 調査形式で、2026 年 1 月に実施した。調査内容・倫理的配慮は、事前に大阪市教育総合センターや学校長らと確認した。

3. 結果

基本属性、親へのアタッチメント、学校での対人関係、および両者の交互作用の影響を検討するため、4 段階の階層的重回帰分析を実施した。従属変数には、孤独感、生活満足度、自己実現度を用いた(Table 1-3)。その結果、以下の 5 点が示唆された:(a)親へのアタッチメントは、孤独感、生活満足度、自己実現度と関連する。(b)中学生の教師との関係性

は、孤独感とは有意に関連しないが生活満足度とは有意に関連する。逆に、(c)友人との関係は、孤独感とは有意に関連するが生活満足度とは有意に関連しない。(d)自己実現度とは、教師との関係と友人関係の両方が有意に関連する。(e)親へのアタッチメント×学校での対人関係の交互作用について、単純傾斜検定まで含めると一貫した有意差は認められなかった。

4. 考察

本研究では、親へのアタッチメント、教師との関係性、友人関係は、主効果的に、孤独感、生活満足度、自己実現度に関連することが示された。一方、本研究では、林田他(2018)のような交互作用的効果は得られなかった。そのため、ある対人関係における不十分さを他の対人関係が補償するという関係性は、すべての適応領域に共通するものではなく、領域によっては生じる可能性はあるものの、必ずしも一貫して生じるわけではないことが示唆された。

予想に反して、アタッチメント不安が高いほど、自己実現度が高かった(Table 3)。この結果は、アタッチメント不安が高い人は、自分の可能性を十分に発揮していると主張することで、他者から承認を得たいのかもしれない。この点については、今後さらなる検討が必要であろう。

文献

林田 美咲・黒川 光流・喜田 裕子(2018). 親への愛着および教師・友人関係に対する満足感が学校適応感に及ぼす影響 *教育心理学研究, 66(2)*, 127-135.

大金 伸光(2024). *「社会情緒的(非認知)能力の発達と環境に関する研究:教育と学校改善への活用可能性の視点から」発達調査チーム 研究報告書(令和 2〜5 年度プロジェクト研究報告書)* 国立教育政策研究所

付記　本発表は、大阪市総合教育センター教育振興担当実践研究グループが実施している「研究Ⅳ　不登校の未然防止・解決に向けた研究」の成果の一部を、連携研究者である中尾が代表して発表するものである。

Table 1 孤独感における階層的重回帰分析結果

変数名	Step 1	Step 2	Step 3	Step 4
年齢	.02	.03	.04	.04
性別	-.14^{+}	-.02	.01	.03
SSR 利用	.73**	.72**	.62**	.69**
社会経済的地位	.13**	.12**	.12**	.12**
アタッチメント不安		.36**	.36**	.34**
アタッチメント回避		.19**	.15**	.14*
教師との関係性			.07	.07
ピア・アタッチメント			-.24**	-.24**
アタッチメント不安*教師との関係性				.06
アタッチメント不安*ピア・アタッチメント				.19+
アタッチメント回避*教師との関係性				-.10
アタッチメント回避*ピア・アタッチメント				.10
R^2	.07**	.23**	.26**	.28**
ΔR^2		.16**	.03**	.02*

注) $^{**}p<.01$、$^{*}p<.05$、$^{+}p<.10$、性別:1＝男子、2＝女子、SSR 利用:1＝なし、2＝あり、である。Table 2-3 も同様である。

Table 2 生活満足度における階層的重回帰分析結果

変数名	Step 1	Step 2	Step 3	Step 4
年齢	-.04	-.04	-.05^{+}	-.04
性別	.04	-.01	.00	-.01
SSR 利用	-.26^{+}	-.18	-.06	-.09
社会経済的地位	.03	-.02	.00	.00
アタッチメント不安		-.05	-.08*	-.09*
アタッチメント回避		-.37**	-.29**	-.27**
教師との関係性			.24**	.21**
ピア・アタッチメント			.06	.08
アタッチメント不安*教師との関係性				.00
アタッチメント不安*ピア・アタッチメント				-.02
アタッチメント回避*教師との関係性				.16**
アタッチメント回避*ピア・アタッチメント				-.10
R^2	.02	.23**	.30**	.32**
ΔR^2		.21**	.08**	.02^{+}

Table 3 自己実現度における階層的重回帰分析結果

変数名	Step 1	Step 2	Step 3	Step 4
年齢	.01	.02	.00	.01
性別	-.11*	-.10*	-.12*	-.10*
SSR 利用	-.19^{+}	-.14	.02	.03
社会経済的地位	.04^{+}	.01	.02	.02
アタッチメント不安		.10**	.08**	.06*
アタッチメント回避		-.17**	-.08**	-.09*
教師との関係性			.14**	.12**
ピア・アタッチメント			.22**	.23**
アタッチメント不安*教師との関係性				.08^{+}
アタッチメント不安*ピア・アタッチメント				.06
アタッチメント回避*教師との関係性				.00
アタッチメント回避*ピア・アタッチメント				-.06
R^2	.04*	.13**	.30**	.33**
ΔR^2		.10**	.17**	.03*

ふれあい恐怖的心性が形成される心理的メカニズムの検証

野木采葉[1]・藤井靖[2,3]
([1]明星大学大学院心理学研究科・[2]明星大学心理学部・[3]国立精神・神経医療研究センター)

Psychological Mechanisms Associated with Fureai-Fear Tendencies

Kotoha Nogi[1], Yasushi Fujii[2,3]
([1]Graduate School of Psychology, Meisei University,[2] School of Psychology, Meisei University, [3]National Center of Neurology and Psychiatry)

1. 問題と目的

現代大学生の対人関係の特徴として，形式的・機械的な関係はこなせる一方，関係が情緒的に深まる場面で不安や困難を感じ，親密な関係を回避する「ふれあい恐怖」が指摘されている。岡田（2002）は，一般大学生にもみられるこうした傾向を「ふれあい恐怖的心性」として捉え，友人関係との関連を検討している。青年期は，友人関係が情緒的に深まり，親密な関係の形成が重要となる時期でもある。そのため，親密化に伴って生じる不安や不快な感情への対処のあり方が，対人関係上の困難に関わる可能性がある。本研究では，こうした親密化の過程で生じる内的経験への対処に着目し，反芻，特性不安，心理的柔軟性，感情調節を取り上げる。反芻は不安と正の関連を示すことが報告されている（榊原・北原，2016）。また，日本語版 AAQ-II 7 項目版では，体験の回避と反芻および心配との正の関連が示されている（嶋ほか，2013）。体験の回避は，不快な思考や感情などの内的経験を避けようとする傾向であり，本研究ではその高さを心理的柔軟性の低さとして捉える。加えて，内的経験への対処のあり方を捉える観点から，認知的再評価と表出抑制という 2 つの感情調節方略にも着目した（吉津ほか，2013）。これらの要因とふれあい恐怖的心性との関連や，要因間の関連構造については，十分に検討されていない。以上より，本研究では，大学生を対象として，反芻，特性不安，心理的柔軟性の低さとふれあい恐怖的心性との関連を検討し，各変数間の関連構造を媒介モデルにより探索的に検討することを目的とする。あわせて，感情調節とふれあい恐怖的心性との関連についても検討する。

2. 方法

調査対象者　都内私立大学心理学部に在籍する大学生 370 名を対象に質問紙調査を実施した。記入漏れおよび注意喚起項目への不適切な回答がみられた 29 名を除外し，341 名（男性 116 名，女性 220 名，その他 1 名，不明 4 名；18～24 歳，平均年齢 19.7 歳）を分析対象とした。

質問項目　反芻・省察を測定する日本語版 RRQ（高野・丹野，2008），新版 STAI の特性不安尺度 20 項目，日本語版 AAQ-II 7 項目版（嶋ほか，2013），日本語版感情調節尺度（ERQ-J；吉津ほか，2013），ふれあい恐怖的心性尺度（岡田，2002）を使用した。ERQ-J は再評価方略と表出抑制方略，ふれあい恐怖的心性尺度は対人退却と関係調整不全の各下位尺度から構成される。AAQ-II は，高得点ほど体験の回避が高いことから，本研究では心理的柔軟性の低さを示す指標として扱った。

手続き・倫理的配慮　2025 年 10 月，講義時間を利用して紙媒体の質問紙を配布した。調査への参加は自由意思によること，回答途中でも中止できること，得られたデータは研究目的以外には使用せず，統計的に処理し個人が特定されない形で取り扱うことを説明した。

分析方法　RStudio 4.5.1 を用い，各変数の記述統計量および Pearson の積率相関係数を算出した。また，各尺度の内的一貫性を確認するため，Cronbach の α 係数を算出した。次に，ふれあい恐怖的心性の総得点を従属変数とする重回帰分析を行った。さらに，先行研究で反芻との関連が示されている特性不安および心理的柔軟性の低さに着目し，反芻とふれあい恐怖的心性との間接的な関連を探索的に検討するため，パス解析を行った。

3. 結果

各尺度の Cronbach の α 係数は.72～.90 であった。各変数の相関係数を Table に示す。次に，ふれあい恐怖的心性総得点を従属変数とする重回帰分析の結果，モデルは有意であった（R^2 = .40，$F(6, 334) = 37.16$，$p < .001$）。心理的柔軟性の低さ（$\beta = .26$，$p < .001$），特性不安（$\beta = .36$，$p < .001$），表出抑制方略（$\beta = .28$，$p < .001$）は正の関連を，再評価方略（$\beta = -.14$，$p = .003$）は負の関連を示した。一方，反芻は有意な関連を示さなかった。VIF は 1.12～2.37 であり，多重共線性の問題は認められなかった。省察はいずれの分析でも有意な関連を示さなかったため，以降のモデルから除外した。次に，反芻とふれあい恐怖的心性との関連における特性不安および心理的柔軟性の低さの媒介過程を検討するため，パス解析を行った。反芻からふれあい恐怖的心性への直接パスは有意ではなく，当該パスを含めてもモデル適合は有意に改善しなかったため，直接パスを含まないモデルを採用した。最終モデルはデータに概ね適合した（$\chi^2(1) = 0.68$，$p = .410$，CFI = 1.00，RMSEA = .00，SRMR = .008）。モデルの各変数間の関連を Figure に示す。また，反芻からふれあい恐怖的心性への間接効果は，特性不安を介する経路で.25（$p < .001$），心理的柔軟性の低さを介する経路で.08（$p = .006$），両者を順に介する経路で.06（$p = .005$）であり，いずれも有意であった。

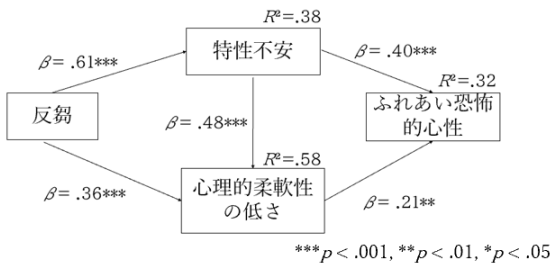
Table

	1	2	3	4	5	6	7
1反芻	-						
2省察	.31***	-					
3不安	.61***	.06	-				
4心理的柔軟性の低さ	.66***	.16**	.70***	-			
5再評価	-.15**	.16**	-.27***	-.18**	-		
6表出抑制	.06	.14*	.05	-.00	.28**	-	
7ふれあい恐怖的心性	.36***	.10	.55***	.49***	-.19**	.26***	-

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

Figure

パス解析の結果



***$p < .001$, **$p < .01$, *$p < .05$

4. 考察

本研究の結果から，ふれあい恐怖的心性には，特性不安の高さや心理的柔軟性の低さが関連することが示唆された。岡田（2002）では，ふれあい恐怖的心性と心情的に近い他者との関係における不安との関連が示されており，不安の感じやすさや不快な内的経験の回避が，親密な対人場面での困難に関連した可能性がある。また，反芻は特性不安や心理的柔軟性の低さを介して間接的に関連していた。青年期の親密な友人関係では，関係の深まりに伴う不安や不快な感情への対処が，対人関係上の困難に関わる可能性がある。さらに，再評価方略は負，表出抑制方略は正の関連を示したことから，支援では，不安の低減だけでなく，不快な感情を過度に回避・抑制せず経験できるよう促す視点も重要であると考える。

なお，本研究は横断調査であり，因果関係や時間的順序については慎重に解釈する必要がある。

文献

岡田 努(2002). 現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察. 性格心理学研究, **10**(2), 69-84.

高野 慶輔・丹野 義彦(2008). Rumination-Reflection Questionnaire 日本語版作成の試み. パーソナリティ研究, **16**(2), 259-261.

榊原 良太・北原 瑞穂(2016). メタ分析による認知的感情制御尺度と抑うつ・不安の関連の検討. 心理学研究, **87**(2), 179-185.

嶋 大樹・柳原 茉美佳・川井 智理・熊野 宏昭(2013). 日本語版 Acceptance and Action Questionnaire-II 7 項目版の検討. 日本心理学会第 **77** 回大会発表論文集, 271.

吉津 潤・関口 理久子・雨宮 俊彦(2013). 感情調節尺度(Emotion Regulation Questionnaire)日本語版の作成. 感情心理学研究, **20**(2), 56-62.

肥田野 直・福原 眞知子・岩脇 三良・曽我 祥子・Spielberger, C. D.(2000). 新版 STAI マニュアル. 実務教育出版.

非緩和共同性と友達とのつきあい方
――かかわりの「深さ」と「広さ」の視点から――

萩原千晶[1]・小塩真司[2]
([1]和洋女子大学・[2]早稲田大学)

Unmitigated Communion and Friendship Patterns: Intimacy and Breadth

Chiaki HAGIWARA[1], Atsushi OSHIO[2]
([1]Wayo Women's University, [2]Waseda University)

1. 問題と目的

非緩和共同性（unmitigated communion; 以後 UC）とは，自己を蔑ろにして他者を優先する傾向性として定義されるパーソナリティ特性であり（萩原他，2022），UC 傾向の高い者は，他者の問題に過度に関わり，対人関係上の困難を抱えることが示されてきた。

UC が友人関係のどのような側面に影響するかについては，理論的に相反する2つの予測が成り立つと考えられる。第一に，UC 傾向の高い者は特定の他者に過度に干渉する傾向があることから（Fritz & Helgeson, 1998），友人関係においても特定少数の相手と深く関わろうとすることが予測される。

第二に，UC傾向の高い者は自己の価値を他者からの評価に依存させ，他者からの承認を得ようとすることから（Fritz & Helgeson, 1998），友人関係においても特定の友人に限らず，多くの相手からの好意を得ようとすることが予測される。

これら２つの予測のいずれが妥当かを検討するため，本研究では落合・佐藤（1996）の友達とのつきあい方尺度を用いる。落合・佐藤（1996）は，友人関係における個人のかかわり方を，「人とのかかわり方に関する姿勢（深いか浅いか）」と「自分がかかわろうとする相手の範囲（広いか狭いか）」という独立した 2 つの次元から捉えている。2 つの次元は直交し，「深く広い」「深く狭い」「浅く広い」「浅く狭い」の４象限に分類することが可能である。

そこで本研究では，UC と，友達とのつきあい方尺度との関連から，UC の高い人々の友人とのかかわり方について検討を行う。2 つの仮説のうちどちらが UC の友人のかかわり方に近いかが示されることで，UC の対人関係における困難さの理解に資すると考えられる。

2. 方法

対象者　Web 調査会社 Freeasy を通じて調査を実施した学生 200 名（女性 153 名，男性 47 名，$M = 20.07$, $SD = 1.64$）を分析対象とした。

尺度　(1) 非緩和共同性：日本語版改訂非緩和共同性尺度（J-RUCS；9 項目（例「ひどく疲れきっていても，周りの人に助けを求められたら，手伝ってしまう。」），5 件法）を用いた。(2) 友達とのつきあい方：落合・佐藤（1996）の作成した 35 項目のうち，同論文において因子の解釈基準として用いられた .35 以上の負荷量を示す 30 項目（F1 防衛的 12 項目（例「友達とは本音で話さないほうが無難だ」），F2 全方向的５項目，F3 自己自信４項目，F4 積極的相互理解 4 項目，F5 同調 3 項目，F6 被愛願望 2 項目）を使用した（5 件法）。

分析方法　友達とのつきあい方の尺度の６つの下位尺度得点（項目平均）を算出したのち，6 下位尺度を対象に二次因子分析（主因子法，Promax 回転）を行い，「かかわり方の姿勢（深さ）」と「かかわろうとする相手の範囲（広さ）」の二次因子得点を算出した。これらと UC との関連を，相関分析，重回帰分析，および対象者を 4 象限（深さ×広さの組み合わせ）の 2×2 要因分散分析により検討した。

倫理的配慮　公益社団法人日本心理学会倫理規程に則り，個人が特定される情報の収集は行っていない。侵襲性の高い質問項目は含んでおらず，回答は任意であることを教示したうえで実施した。

3. 結果

友達とのつきあい方尺度について，6 つの下位尺度（F1 防衛的～F6 被愛願望）はいずれも内的整合性が良好であった（α = .73-.85）。UC との相関を算出したところ，F2 全方向的（r = .45），F5 同調（r = .40），F6 被愛願望（r = .35）が有意な正の相関（いずれも p < .001）を示し，F3 自己自信（r = -.27, p < .001）は有意な負の相関を示した。一方，F1 防衛的（r = .01）および F4 積極的相互理解（r = .08）は UC と有意な相関を示さなかった。6 下位尺度を同時に投入した重回帰分析でも同様の傾向が確認された（R^2 = .35, F (6, 193) = 17.70, p < .001）。

次に，6 下位尺度を対象とした二次因子分析（主因子法，Promax 回転）を行ったところ，固有値の推移（2 .06, 1.75, 0.68, ...）から 2 因子構造が支持され，落合・佐藤（1996）とほぼ同様の因子パターンが得られた（因子間相関 = -.05）。落合・佐藤（1996）と同様に，第 1 因子は「かかわり方の姿勢（深さ）」，第 2 因子は「相手の範囲（広さ）」を表す因子として解釈された。

これら 2 つの二次因子得点と UC の関連について検討したところ，広さの軸は有意な正の関連を示した（β = .75, p < .001, R^2 = .25）。一方深さの軸との関連はあまりみられなかった（β = .20, p = .031, R^2 = .02）。

さらに，2 軸それぞれの符号によって対象者を 4 象限に分割し，UC を従属変数とする 2×2 要因分散分析を行った（Figure 1, Table 1）。その結果，広さの主効果のみが有意であり（F (1, 196) = 31.96, p < .001, 偏 η^2 = .14），深さの主効果（F (1, 196) = 0.17, *n.s.*）および交互作用（F (1, 196) = 2.54, *n.s.*）は有意ではなかった。

Figure 1.「深さ」「広さ」の 4 象限と UC 平均

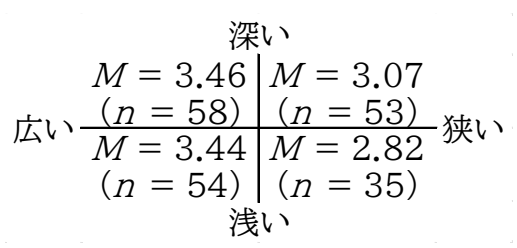


Table 1. UC を従属変数とした分散分析

効果	*df*	*F*	*p*	偏 η^2
深さの主効果	1, 196	0.17	.678	.001
広さの主効果	1, 196	31.96	<.001	.140
交互作用	1, 196	2.54	.113	.013

4. 考察

本研究の結果，UC は友達とのつきあい方における「広さ」の次元と強く関連する一方，「深さ」の次元とはほとんど関連が示されなかった。この結果は UC 傾向の高い者において，特定の他者への過度な没入（Fritz & Helgeson, 1998）よりも，他者からの評価に注目する側面（Fritz & Helgeson, 1998）が，友人関係においてより強く行動として現れることが示唆された。UC 傾向の高い者は，親しい友人か単なる知り合いかを問わず，できるだけ多くの相手から好かれようと働きかけ，それによって自尊感情を補おうとしている可能性が考えられる。

本研究の限界として，UC 低群の解釈可能性が挙げられる。UC は作動性によって緩和されない過剰な共同性として定義されるため，UC 低群には，作動性とバランスの取れた健康的な者と，共同性自体が低く他者への関心が薄い者が，ともに含まれている可能性がある。本研究で用いた J-RUCS は単一次元の得点であるため，この 2 つを区別できず，UC 低群における「広さ」の低さが，いずれの特徴によるものかは明らかではなく，追加の検討が望まれる。

文献

Fritz, H. L., & Helgeson, V. S. (1998). Distinctions of unmitigated communion from communion: Self-neglect and overinvolvement with others. *Journal of Personality and Social Psychology*, *75* (1), 121-140.

萩原 千晶・下司 忠大・小塩 真司（2022）. 日本語版改訂非緩和共同性尺度の作成 心理学研究, *93* (2), 120-128.

落合 良行・佐藤 有耕（1996）. 青年期における友達とのつきあい方の発達的変化 教育心理学研究, *44* (1), 55-65.

高校生向け食育講座においてピア・エデュケーターを担った短大生の役割経験
――実践前の見通し・不安と実践後の自己評価に着目して――

山本ちか[1]・小濵絵美[1]・内田あや[1]
([1]名古屋文理大学短期大学部)

Experiences of Junior College Students as Peer Educators for High School Students in a Food and Nutrition Education Program: Focusing on Pre-Practice Expectations and Anxiety and Post-Practice Self-Evaluations

Chika YAMAMOTO[1], Emi OBAMA[1], Aya UCHIDA[1]
([1]College of Nagoya Bunri University)

1. 問題と目的

学生が，学習者として知識を得るだけでなく，その知識を他者に伝え，支援する役割を経験することは，自身の役割遂行に対する見通しや，学習内容の理解を確認する機会となりうる。ピア・エデュケーションは，教育を受ける側だけでなく，ピア・エデュケーターを担う側にとっても，知識の再確認やコミュニケーション能力の活用を伴う経験であると考えられる。著者らは，青年の生活的自立を食育の観点から支援する試みとして，地域の保健センターと協働し，高校生を対象とした食育実践を 2016 年より継続している。この実践では，栄養学を専攻する短期大学生がピア・エデュケーターとなり，高校生への講義，グループワークの進行，調理実習の支援を担っている。これまで，高校生への食育実践の意義等について検討を行ってきた(加藤ら，2019)。

本発表では，高校生向け食育講座においてピア・エデュケーターを担った短期大学生が，実践前に役割遂行についてどのような見通しや不安をもち，実践後に自身の役割遂行をどのように評価したのかを記述的に検討する。また，実践前の不安と実践後の改善点に関する自由記述を整理し，学生が学習者から他者を支援する立場へと役割を広げる経験の意義について考察する。

2. 方法

(1)講座実施時期と参加者：2023 年 8 月，2024 年 8 月，2025 年 8 月および 2026 年 8 月に，事前案内により参加を希望した高校生を対象として，高等学校において調理実習型食育講座を実施した。ピア・エデュケーターとして講義やグループリーダーを担当した栄養士養成課程の短期大学生は，4 年間で延べ 31 名であった。学生の担当は，講義，グループリーダー，またはその両方であった。

(2)事前指導および講座内容：講座実施前に，学生に対し，講座の趣旨と内容，役割，調理実習の手順および注意点などについて事前指導を行い，事前調査を実施した。講座では，学生が朝食摂取の実態や重要性について講義した後，朝食について考えるグループワークと，栄養バランスのとれた朝食メニューの調理実習を行った。学生は担当箇所の説明や各グループの進行を担い，高校生に対して適宜声かけや助言を行った。講座後に事後調査を実施した。

(3)調査内容：事前調査では，①役割遂行に対する見通し(自分の役割を果たすこと，担当箇所を高校生に説明すること，調理実習で高校生をリードすることなど)，②役割遂行に対する不安(知識不足，高校生の理解，質問への対応，緊張など)，③講座に対する肯定的な見通し(やりがい，楽しみなど)について，5 件法(とてもあてはまる～全くあてはまらない)で回答を求めた。また，講座を行うことについて不安に思うことを自由記述で尋ねた。

事後調査では，①役割遂行に関する自己評価(自分の役割を果たすこと，担当箇所を高校生に説明すること，調理実習で高校生をリードすることなど)，②実践後の評価(知識の深まり，高校生の理解，質問への対応，緊張，やりがい，活動の充実感など)について，同様の 5 件法で回答を求めた。また，調理実習を円滑に進めるために工夫できる点および講座後の感想などを自由記述で尋ねた。

(4)倫理的配慮：本研究は，所属機関の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

3. 結果

(1)事前調査の主な結果：「自分の役割を果たすことができると思う」について，「とてもあてはまる・ややあてはまる」という回答が 26 名（83.8%）であった。「調理実習で高校生をうまくリードできると思う」について，担当者 26 名中 14 名（53.8%）が「とてもあてはまる・ややあてはまる」と回答した。一方，「自分の知識不足が不安だ」は，「とてもあてはまる・ややあてはまる」という回答は 17 名（54.9%）であった。「高校生が自分の話をきちんと理解してくれるのか不安だ」は，8 名（25.9%）が「とてもあてはまる・ややあてはまる」という回答した。「やりがいがあると思う」については，31 名全員が「とてもあてはまる・ややあてはまる」という回答であった。講座への不安に関する自由記述には 31 名中 2 名から回答があり，内容は「何か聞かれた時に正しいことを答えられるかが不安」「人前で話すことは緊張する」であった。

(2)食育実践後の事後調査の主な結果：「自分の役割を果たすことができた」について，「とてもあてはまる・ややあてはまる」という回答が 29 名（93.5%）であった。「調理実習で高校生をうまくリードできた」について，担当者 26 名中 21 名（80.8%）が「とてもあてはまる・ややあてはまる」と回答した。「知識を深めることができた」については，全員が「とてもあてはまる・ややあてはまる」という回答であった。「活動は充実した内容であった」も 31 名全員が「とてもあてはまる・ややあてはまる」という回答であった。「高校生が自分の話を理解してくれたと思う」は，30 名（96.8%）が「とてもあてはまる・ややあてはまる」という回答であった。活動上の工夫に関する自由記述には，時間配分，事前の予習，分かりやすい説明，役割分担の明確化，積極的な声かけ，手本の提示，食育機会を増やすことなどに関する記述がみられた。

(3)実践前に懸念を示した学生の実践後の自己評価：事前調査で「自分の知識不足が不安だ」について「とてもあてはまる・ややあてはまる」と回答した 17 名は，実践後には全員が「自分の知識を深めることができた」に「とてもあてはまる」または「ややあてはまる」と回答した。また，「高校生が自分の話をきちんと理解してくれるのか不安だ」について「とてもあてはまる・ややあてはまる」と回答した 8 名のうち，実践後には 6 名が「高校生が自分の話を理解してくれたと思う」に「とてもあてはまる」または「ややあてはまる」と回答し，2 名は「どちらともいえない」と回答した。なお，事前に役割遂行や説明，調理実習のリードについて「ややあてはまらない」と回答した学生では，実践後の自己評価が肯定的な学生がみられた一方，調理実習のリードについては，実践後も「ややあてはまらない」と回答した者が 1 名みられた。

4. 考察

事前調査では，多くの学生が役割遂行に対する見通しをもち，全員が講座にやりがいがあると回答した一方，半数程度が知識不足への不安を抱いていた。自ら応募した学生であることから，食育活動への関心が高く，実践前から見通しをもつ者が多かったと考えられる。実践後には，多くの学生が役割を果たすことができ，高校生に話を理解してもらえたと評価し，全員が知識を深めることができたと回答した。学んだ知識を高校生への説明や支援に用いる経験は，知識を再確認するとともに，他者を支援する役割を担う上で必要となる工夫や課題に気づく機会になったと考えられる。時間配分，予習，説明方法，役割分担，声かけ等の改善点が示され，実践上の課題への気づきもうかがわれた。以上より，ピア・エデュケーターを担う経験は，学習者から他者を支援する立場へと役割を広げ，学びを実践に結びつける機会となることが示唆された。

文献

加藤 恵子・小田 良子・山本 ちか・内田 あや・長迫 凪・渡辺 和代（2019）． 高大官連携・ピア・エデュケーションによる食育活動の実践報告――ピア・エデュケーションを用いた食育が高校生に及ぼす効果―― 東海公衆衛生雑誌，7，101-106.

付記：本発表において報告したプロジェクトは名古屋市保健所西保健センターと協働で実施している。本発表に関して，開示すべき利益相反関連事項はない。

子どもの不登校が母親および家庭に及ぼす影響

侯玥江・綾部直子
（秋田大学）

Effects of Children's School Non-Attendance on Mothers and the Family

Yuejiang HOU, Naoko AYABE
（Akita University）

1. 問題と目的

家庭環境と子どもの不登校の間には双方向の関係があると考えられる。これまで，子どもの不登校の関連要因として，保護者の精神的健康，養育行動，社会経済的地位など（Gubbels et al., 2019）が多く検討されてきた。一方で，子どもの不登校は，保護者の精神的葛藤や価値観の変容（沖津・朝倉，2024），就労と家庭の葛藤（Sasaki, 2025），生活・家計や子どもとのコミュニケーションの変化（Kato et al., 2026）など，保護者と家庭に多面的な影響をもたらす。これらの変化は子どもの年齢，世帯年収，居住地規模といった家庭の属性によって異なるのか，一様なのかは十分に検討されていない。また就労や家計といった生活面の変化が不登校に対する認知や感情と相互に関連する可能性があるが，その具体的な様相は明らかにされていない。

そこで本研究は，子どもの不登校が母親および家庭に及ぼす影響を多面的に捉え，家庭属性による差異と影響同士の関連を明らかにすることを目的とする。

2. 方法

調査対象と手続き　子どもが現在不登校傾向にある母親を対象に，調査会社の登録モニターを通じたオンライン調査を実施した。スクリーニング項目と教示文操作チェック項目（増田他，2019）を通過した回答者のうち，現在の登校状況の 2 項目から不登校が現在も続いていると判断できた 205 名を分析対象とした。本調査は，秋田大学手形地区における人を対象とした研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

測定内容

不登校に対する認知　村井他（2026）の登校規範意識の項目を参考に，不登校を受け容れる意識を反映する項目を加えた 9 項目（4 件法）。探索的因子分析により，登校規範意識（4 項目）と不登校受容意識（5 項目）の 2 因子を得た。

不登校に関する感情　近藤・髙坂（2025）を参考に，怒り・苛立ち，将来不安，安堵感に自責感の項目を加えた 17 項目（5 件法）。因子分析の結果，自責感（3 項目），怒り・苛立ち（4 項目），将来不安（3 項目），安堵感（6 項目）の 4 因子を採用した。

家計不安　生活費，教育費，老後資金など家計の見通しに関する不安 9 項目（4 件法，1 因子）。

日中のケア負担　平日の日中に見守り，送迎，昼食の準備，付き添いが必要となる頻度 4 項目（4 件法，1 因子）。

働き方の縮小　不登校に関連した働き方の変化のうち，退職，休職，遅刻・早退・欠勤の増加，労働時間の減少，昇進・異動・転職の見送りのいずれかに該当した場合を 1，該当しない場合を 0 とした。

人口統計学的変数　子どもの学校段階（小学校，中学校，高校），居住地規模（主要都市，中規模の市，小規模の市町村の 3 区分），世帯年収（400 万円未満，400～700 万円未満，700～1,000 万円未満，1,000 万円以上の 4 区分）。

3. 結果

記述統計と相関　各変数の α 係数は .70～.96 であった。単相関（Spearman の順位相関）では，不登校に関するネガティブ感情同士，登校規範意識と怒り・苛立ち，不登校受容意識と安堵感の間に中程度以上の相関が見られた。また，家計不安は自責感・将来不安（r = .43, .40）と，ケア負担は働き方

の縮小・安堵感と（r = .14, .19, p_s<.05）正の相関を示した。

属性による差　子どもの学校段階は，母親の働き方縮小の該当率および子どもに対する将来不安に有意に関連した。小学生の母親の働き方縮小の該当率（55%）は中学生の母親（33%）より有意に高かった（Cramér の V = .20）。中学生・高校生の母親は小学生の母親より将来不安が有意に高かった（F(2,202)=4.11, p =.02, η^2 = .04）。

居住地規模は，母親の登校規範意識（F(2,194)=5.03, p =.08, η^2 = .05），家計不安（F(2,194)=3.45, p =.03, η^2 = .03），将来不安（F(2,194)=3.89, p =.02, η^2 = .04）に有意に関連した。いずれにおいても，主要都市群より中規模市群のほうが高かった。

偏相関ネットワーク　9 変数をノードとし，Spearman の相関行列から求めた正則化なしの偏相関をエッジとする無向ネットワークを推定し，有意なエッジ（p < .05，両側）のみを描いた（図1）。

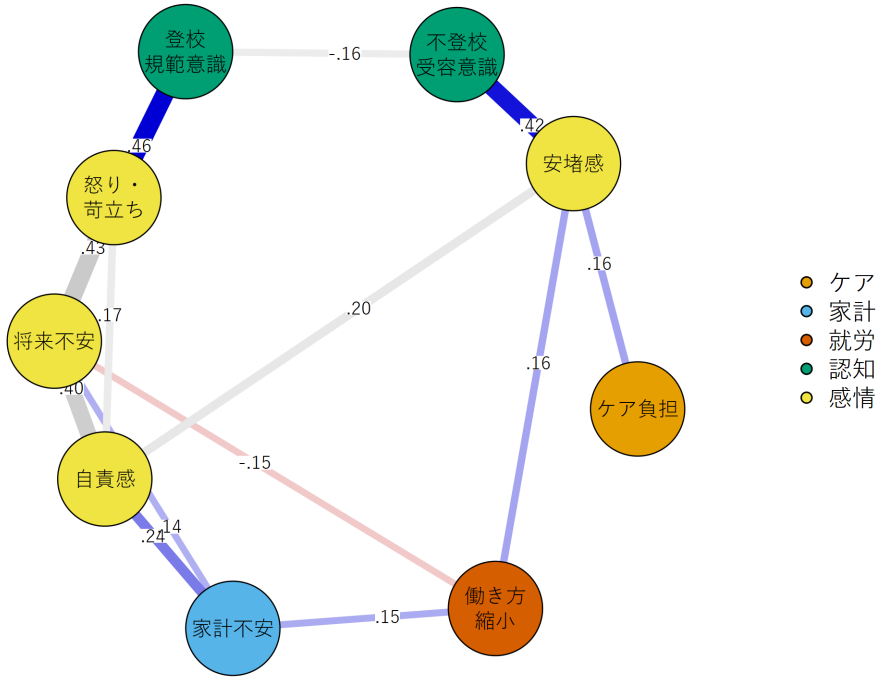


図1　9 変数の偏相関ネットワーク

注）線は p < .05 の偏相関で，太さは大きさ，数値は偏相関係数を表す。青は正，赤は負の関連，灰色は同じ心理・生活側面内の関連。ノードの色は異なる心理，生活の側面を表す。

4. 考察

小学生の母親で働き方縮小が多かった点は，子どもの年齢が低いほど日中の見守りや付き添いが必要となり，就労の調整を迫られやすいことを反映していると考えられる。居住地規模による登校規範意識の差（中規模の市で高い）は地域の学校環境や支援資源の違いを反映している可能性がある。

偏相関ネットワークより，登校規範意識の強さは怒りや苛立ちと，「不登校でも成長できる」といった受容意識は安堵感と，それぞれ独自に関連していた。また，家計不安は自責感および将来不安と，働き方の縮小は家計不安，安堵感，将来不安と結びついており，家計・就労領域から感情領域への波及経路が示唆された。働き方の縮小が安堵感と正，将来不安と負に関連した点は，就労を縮小して子どもに向き合う選択が，安堵や将来不安を軽減ももたらす一方で，家計不安を介して自責感や将来不安を高めうるという両義性を示している可能性がある。

付記　本研究は，公益財団法人かんぽ財団令和 7 年度調査研究助成を受けて実施した。

動画のタイパ視聴（Time-Efficient Viewing: TEV）と病理的自己愛傾向およびアイデンティティとの関連

三田遥真[1]・小塩真司[2]
（[1]早稲田大学大学院文学研究科・[2]早稲田大学文学学術院）

The Relationship between the Time-Efficient Viewing, the Pathological Narcissism, and Identity.

Haruma MITA[1], Atsushi OSHIO[2]
([1] Graduate School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University
[2] Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University)

1. 問題と目的

近年，タイムパフォーマンスという言葉がよく使用されるようになった。タイムパフォーマンス（以下，タイパ）とは，時間効率や時間対効果のことであり，費用対効果を表すコストパフォーマンスをもじった言葉である（小野他，2024）。

タイパを追及する行動には好ましい側面がある一方で，問題も生じている。日本経済新聞（2023）によると，「ファスト映画」と呼ばれる動画を動画投稿サイト（YouTube）に投稿した男性が，大手映画製作会社 13 社に計 5 億円の損害賠償を請求された。「ファスト映画」とは映画の内容を 10 分ほどの動画にまとめたものであり，「ファスト映画」を視聴すると手軽に映画の概要を知ることができる。要するに，「ファスト映画」は，映画の視聴にタイパを求める人々を対象にした動画コンテンツであるといえる。したがって，一見すると好ましいと思われるタイパ行動にも，「ファスト映画」のような問題が生じている。

倍速視聴やスキップ視聴などのタイパを求める動画視聴（Time-Efficient Viewing: TEV; 三田・小塩，2025）は，等速視聴などの没入的な動画視聴(Immersive Viewing: IV)と比較して，否定的な時間展望との関連が見られる（三田・小塩，2025)といった報告はされているが，TEV および IV といった動画の視聴行動とパーソナリティや行動，態度などの不適応的な側面との関連は未だ検討されていない。稲田（2022)は，若者へのインタビューからタイパ視聴の背景について考察しており，そこでは他者に対して知識のレベルで優越したいという欲求や，個性を獲得したいという欲求を背景要因として挙げている。したがって，本研究では，TEV および IV と，病理的自己愛傾向およびアイデンティティとの関連を検討する。

タイパ視聴に関するインタビュー内容（稲田，2022)から予想される仮説は，次の通りである。TEV と病理的自己愛傾向との間に正の相関が見られるが，IV との間には強い関連は見られない。アイデンティティ形成の二重サイクルモデル（Luyckx et al., 2006)を考慮すると，TEV とコミットメント形成および広い探求との間により強い正の相関が見られる一方で，IV とコミットメントとの同一化および深い探求との間により強い正の相関が見られる。TEV と反芻的探究との間により強い正の相関が見られる。

2. 方法

調査時期および調査対象者

調査は 2026 年 4 月に行われた。調査対象者は日本在住の 18 歳から 29 歳の日本人 500 名（男性: 250 名，女性: 250 名)であった。サブスクリプションサービスやテレビ，映画館などで日常的に動画を視聴している 403 名（男性: 201 名，女性: 202 名，M_{age} = 25.14 (SD = 3.17))が最終的な分析対象であった。分析には，統計分析フリーソフト R (version 4.5.1)を使用した。本研究は，倫理審査委員会の承認を得て行われた。

使用尺度

TEV および IV の測定には，TEV-IV 行動リスト（三

田・小塩, 2025)を使用した。2 下位尺度, 12 項目, 6 件法である。病理的自己愛傾向の測定には, B-PNI-J (川崎・小塩, 2021)を使用した。7 下位尺度, 28 項目, 6 件法である。アイデンティティの測定には, DIDS-J (中間他, 2015)を使用した。5 下位尺度, 25 項目, 5 件法である。

3. 結果

TEV および IV と, 病理的自己愛傾向, アイデンティティとの関連を検討すべく, 相関分析を行った。結果を Table 1 に示す。

Table 1
TEV-IV行動リストとB-PNI-JおよびDIDS-Jとの相関 (N = 403)

	TEV	IV	*M*	*SD*
B-PNI-J				
自己犠牲的自己高揚	.41 **	.14 **	3.30	1.08
誇大空想	.34 **	.16 **	3.17	1.33
搾取性	.42 **	.09	2.97	1.15
特権的憤怒	.42 **	.12 *	3.21	1.14
自己隠蔽	.36 **	.26 **	3.54	1.04
随伴的自尊感情	.44 **	.12 *	3.23	1.14
脱価値化	.37 **	.22 **	3.43	1.09
DIDS-J				
コミットメント形成	.33 **	.16 **	2.93	0.92
コミットメントとの同一化	.31 **	.16 **	2.90	0.90
広い探求	.29 **	.26 **	3.20	0.84
深い探求	.37 **	.16 **	2.95	0.82
反芻的探究	.28 **	.37 **	3.41	0.79

*p < .05, **p < .01

TEV と B-PNI-J のすべての下位尺度との間に, IV との相関 (rs = .09－.26)よりも強い正の相関が見られた (rs = .34－.44, p < .01)。また, TEV と DIDS-J のすべての下位尺度との間に正の相関が見られた (rs = .28－.37, p < .01)のに対し, IV と広い探求および反芻的探究との間に比較的強い正の相関が見られた (rs = .26－.37, p < .01)。

4. 考察

本研究では, TEV および IV と, 病理的自己愛傾向およびアイデンティティとの関連を検討した。相関分析の結果, 自己犠牲的自己高揚, 誇大空想, 搾取性の 3 下位尺度からなる誇大性および, 特権的憤怒, 自己隠蔽, 随伴的自尊感情, 脱価値化からなる脆弱性の両側面とも, TEV との間により強い正の相関が確認された。TEV が誇大性と関連していることから, TEV が自己イメージの高揚や他者からの賞賛, 他者操作 (川崎・小塩, 2021; Pincus et al., 2009)などのための知識の獲得方略である可能性が考えられる。また, 自己高揚方略のみならず, その失敗による脆弱性とも関連があることから, 高頻度の TEV が感情の制御の失敗などを促進する可能性も考えられる。本研究の趣旨は関連を確認することであったため, 今後は TEV が関与する不適応の因果関係を集団のみならず個人レベルで検討することが必要であろう。

仮説とは異なり, TEV と DIDS-J のすべての下位尺度との間に正の相関が見られたのに対し, IV と広い探求および反芻的探究との間に比較的強い正の相関が見られた。将来について考える過程から, 人生の道の選択と評価, そしてその同一化の感覚まで, 全体を通して TEV は集団レベルで関連のある行為であるのに対し, IV は, コミットメントを広く探索することと, その過程で陥る不安の多い自己反芻的思考(中間他, 2015)とをより説明する行動であることが明らかとなった。コミットメントの形成および広い探索段階のみならず, 同一化および深い探索段階でも TEV と正の関連が見られたことは, TEV という行為が広い情報収集のみならず, 特定の事柄を効率よく掘り下げるために使用されることが反映された結果であるかもしれない。また, コミットメントの広い探求のために TEV だけでなく IV という手段がとられる傾向にあることは, 将来の道を考慮する上で倍速視聴やスキップ視聴をすることがためらわれることを意味している可能性がある。さらに, IV が反芻的探究と関連があることからも, IV はモラトリアムやアイデンティティの拡散との関連が特徴的に見られ得る行動傾向であることが, 本研究の結果から示唆された。

文献

稲田 豊史 (2022). 映画を早送りで観る人たち――ファスト映画・ネタバレ――コンテンツ消費の現在形―― 光文社

三田 遥真・小塩 真司 (2025). Time-Efficient Viewing (TEV) と時間的展望との関連. 日本青年心理学会第 33 回大会発表論文集 94-95.

日本の大学生が勉強する気になれない背景
――学業的非動機づけの下位側面と学習行動との関連――

熊崎 広大[1]・高橋 雄介[2]
([1]京都大学 教育学部・[2]京都大学 大学院教育学研究科)

Academic Amotivation Among University Students in Japan: The Relationship Between Dimensions of Academic Amotivation and Learning Behavior

Kodai KUMAZAKI[1], Yusuke TAKAHASHI[2]
([1]Faculty of Education, Kyoto University [2]Graduate School of Education, Kyoto University)

1. 問題と目的

大学生が「勉強する気になれない」理由は一つではないだろう。Legault et al.（2006）は Academic Amotivation Inventory（AAI）を開発し，学習に取り組む意図を欠いた状態である学業的非動機づけ（Ryan & Deci, 2000）を，①課題価値（学習課題に価値や意味を見いだせない），②能力信念（学習課題に取り組む能力がない），③課題特性（課題を退屈で魅力に乏しいと感じる），④努力信念（必要な努力やエネルギーを注げない）という，理由の異なる 4 側面に区別した。

このうち，能力信念と学習行動との関連については直観に反する先行研究がある。Fryer et al.（2018）は，日本の大学生を対象に，能力信念に関する非動機づけが必修の英語科目への出席と正に関連することを示した。この結果は，「できない」と感じている学生ほど授業に出席していた可能性を示すが，出席をしていてもそれが学習への努力や授業中の注意・集中を伴っているとは限らず，この正の関連が，そうした学習への関与を捉える行動的エンゲージメント（BE; Skinner et al., 2009）においても認められるかどうかは明らかでない。

また，仮に勉強する気になれない理由があったとしても，他者からの要求・圧力や義務感，学習の必要性からそれに取り組む可能性はあり得る。こうした学習に取り組む理由について，自己決定理論（SDT）では，報酬の獲得や罰の回避に基づく外的調整，罪悪感の回避や自尊心の維持に基づく取り入れ的調整，学習の価値や重要性を認める同一化的調整が区別されている（Ryan & Deci, 2000）。Howard et al.（2021）のメタ分析によれば，取り入れ的調整と同一化的調整がエンゲージメントと正に関連したが，非動機づけの下位側面は区別していない。

そこで本研究では，日本の大学生の一般的な学業場面を対象に，勉強する気になれない理由（非動機づけの 4 側面）と勉強に取り組む理由（3 つの学習動機づけ）を同時に考慮した上で，能力信念に関する非動機づけと BE との関連を検討することを主たる目的とし，他の動機づけと BE との関連および動機づけ間の関連を探索的に検討する。

2. 方法

対象者・手続き　Freeasy を用いて Web 質問紙調査を実施した。対象は 18 歳～35 歳で，日本語を母語とする大学生（学部課程）であった。回答者 469 名のうち，本調査全体の回答時間が 40 秒未満であった者または AAI 16 項目と学習動機づけ 11 項目の両方で，それぞれすべての項目に同じ選択肢で回答した 51 名を除外し，418 名（男性 185 名，女性 233 名，平均年齢 21.04 歳，SD = 2.46）を分析対象とした。本調査は京都大学心理学実験研究倫理審査委員会の承認を得て実施された。

測定内容　①AAI 16 項目（7 件法; Legault et al., 2006）は，原著者の許可を得て翻訳し，バックトランスレーションを行った。得点が高いほど各側面に対応する理由による非動機づけが強い。②BE は梅本・田中（2012）の 4 項目（4 件法）を用いた。③外的調整，取り入れ的調整，同一化的調整は，学習動機づけアンケート（5 件法; 安藤, 2005;吉澤, 2020）の 11 項目を用いた。

分析方法　AAI の 4 因子モデルを仮定する確認的因子分析を行い，各下位尺度の ω 係数を算出した。BE を従属変数，AAI の 4 側面と 3 つの学習動機づけを説明変数とする重回帰分析を行った。

3. 結果

AAI の 4 因子モデルの適合度は十分ではなかった（$\chi^2(98) = 1210.37$, CFI = .82, TLI = .78, RMSEA = .13, SRMR = .08）。標準化因子負荷量は.60～.89 と十分であったが，因子間相関は.47～.87 であり，特

に能力信念と課題特性は.87 と高かった。ω 係数は，AAI で.78～.87，BE で.82，外的調整で.77，取り入れ的調整で.66，同一化的調整で.81 であった。

尺度得点間の相関係数を Table 1 に示す。AAI の 4 側面は BE と負の相関を示した（能力信念は $r = -.25$）。同一化的調整とは，能力信念（$r = -.16$）と課題価値（$r = -.42$），課題特性（$r = -.14$）が負の相関を示し，努力信念はほぼ無相関であった（$r = -.06$）。

Table 1. AAI，学習動機づけ及び BE との相関

	外的	取り入れ的	同一化的	BE
能力信念	.41 ***	−.15 **	−.16 **	−.25 ***
課題価値	.44 ***	−.33 ***	−.42 ***	−.31 ***
努力信念	.12 *	−.06	−.06	−.19 ***
課題特性	.39 ***	−.11 *	−.14 **	−.20 ***
外的	—	.06	−.06	−.12 *
取り入れ的		—	.63 ***	.47 ***
同一化的			—	.55 ***

注)　$^{*}p < .05$, $^{**}p < .01$, $^{***}p < .001$.

重回帰分析の結果を Table 2 に示す。他の 6 変数を統制した能力信念の β は−.12 と有意な負の関連を示した（$p = .04$）。探索的に検討した係数では，努力信念が負の関連（$\beta = -.12$），取り入れ的調整と同一化的調整が正の関連を示した（$\beta = .21, .42$）。

Table 2. BE を従属変数とした重回帰分析の結果

	B	[95% CI]	*β*
能力信念	−.06	[−.120, −.002]	−.12 *
課題価値	.04	[−.019, .096]	.08
努力信念	−.06	[−.113, −.010]	−.12 *
課題特性	.01	[−.054, .077]	.02
外的調整	−.06	[−.115, .001]	−.09
取り入れ的調整	.16	[.080, .231]	.21 ***
同一化的調整	.33	[.246, .411]	.42 ***
R^2 (Adjusted R^2)		.36 (.35)	

注)　$^{*}p < .05$, $^{***}p < .001$.

4. 考察

本研究では，日本の大学生を対象に，学習に取り組む理由を併せて捉え，能力信念に関する非動機づけと BE との関連を主に検討した。能力信念の単純相関と偏回帰係数はいずれも負であり，Fryer et al.（2018）が出席について示した正の関連は，本研究で扱った学業全般の BE では確認されず，出席と BE では能力信念との関連の仕方が異なる可能性があり，今後の検討課題である。また，努力信念は重回帰分析において BE と負に関連したが，項目内容の類似性が考えられるため，解釈には注意が必要である。

外的調整と BE との関連は相対的に弱く，この結果は Howard et al.（2021）の知見と整合的である。ただし，SDT における外的調整は報酬の獲得や罰の回避に基づく動機づけとされる一方，本研究の尺度では，他者からの要求や叱責の回避を理由とする項目で構成されていた。したがって，外的調整の一部の側面しか捉えられていない可能性があり，今後は報酬の獲得も含めて測定することが求められる。

取り入れ的調整と同一化的調整は，非動機づけの 4 側面を考慮しても BE と正に関連し，Howard et al.（2021）と整合的であった。両者を同時に投入しても関連が残ったことから，学習への努力や集中は，重要性への納得だけでなく，「勉強しなければならない」という内的な圧力とも結びついていた可能性が示唆される。ただし，行動上の積極性から，その学習が自律的かどうかまで判断することはできない。

Howard et al.（2021）では，非動機づけと同一化的調整の負の関連も報告されている。本研究においても，同一化的調整は努力信念に関する非動機づけを除く 3 側面と負の関連が認められた。このことから，学習の重要性への納得と努力やエネルギーを注げないという認識は，別に捉える必要があるのかもしれない。「勉強する気になれない」という訴えに対して，学習の重要性を認識していないのか，努力を注げないと感じているのかを区別することが，学習上のつまずきを理解する手がかりとなり得る。

なお，AAI の 4 因子モデルの適合度は低く，因子間相関も高かった。解釈の検証には，日本語版 AAI の項目内容と因子構造を再検討する必要がある。

主要な引用文献

Fryer, L. K., Ginns, P., Howarth, M., Anderson, C., & Ozono, S. (2018). Individual differences and course attendance: Why do students skip class? *Educational Psychology, 38*(4), 470–486.

Howard, J. L., Bureau, J., Guay, F., Chong, J. X. Y., & Ryan, R. M. (2021). Student motivation and associated outcomes: A meta-analysis from self-determination theory. *Perspectives on Psychological Science*, *16*(6), 1300–1323.

Legault, L., Green-Demers, I., & Pelletier, L. G. (2006). Why do high school students lack motivation in the classroom? Toward an understanding of academic amotivation and the role of social support. *Journal of Educational Psychology, 98*(3), 567–582.

梅本 貴豊・田中 健史朗（2012）. 大学生における動機づけ調整方略　*パーソナリティ研究, 21*(2), 138–151.

吉澤 隆志（2020）. 理学療法学科学生における学年間での学習動機づけの比較検討　*理学療法科学, 35*(4), 511–514.

大学生を対象とした防犯人材育成プログラムの開発（2）
――経験サンプリング法を用いた検討――

大久保智生 [1]・赤松大輔 [2]・西本佳代 [1]
（[1] 香川大学・[2] 京都教育大学）

Development of a Crime Prevention Training Program for College Students (2): A Study Using the Experience Sampling Method

Tomoo OKUBO[1], Daisuke AKAMATSU[2], Kayo NISHIMOTO[2]
([1]Kagawa University [2]Kyoto University of Education)

1. 問題と目的

近年、防犯ボランティアの高齢化が進行する一方、新規参加者の減少により、地域での防犯活動の担い手の確保が大きな課題となっている（桐生，2015; 大久保他，2018）。地域での防犯活動を持続するためには、高齢者に依存した体制から、若者世代が参画する体制への転換が求められる。これまで大久保他（2019）は、大学生の防犯活動に対する理解の促進と将来の防犯人材の育成を目的として、2017 年から「防犯の心理学」や「地域での防犯を考える」といった授業を実施し、その教育効果について検討してきた。

これまでの研究では、危険箇所の点検を含むフィールドワークの後に、防犯意識や被害防止能力、コミュニケーション能力、地域への愛着心などの防犯に関する能力が向上することが示されている（大久保他，2025）。また、講義型科目である「防犯の心理学」とフィールドワーク型科目である「地域での防犯を考える」を接続したプログラムについて検討した研究では、「防犯の心理学」受講後の防犯意識や防犯に関する能力が、その後のフィールドワーク型科目の受講や防犯ボランティア経験と関連することも示されている（大久保他，2026）

このように、大学における防犯教育が学生の防犯意識や防犯に関する能力を高め、その後の防犯活動への参加につながる可能性が示されてきた。しかし、これまでの研究では、主として授業開始前と終了後、あるいはフィールドワーク終了後など、限られた時点における測定に基づいて教育効果を検討してきた。そのため、毎回内容の異なる講義を受講する中で、学生の防犯に対する動機づけ、防犯意識、防犯に関する能力がどのように変化していくのか、また、講義ごとの心理的変化が実際の防犯活動への参加にどのようにつながるのかについては、十分に検討されていない。

そこで本研究では、大学生を対象とした防犯人材育成プログラムの開発に向けて、イベントベースの経験サンプリング的な手法を用いて、動機づけ、防犯意識、防犯に関する能力が講義型科目「防犯の心理学」の毎回の講義を通してどのように変化するのかを検討する。さらに、毎回の講義における動機づけ、防犯意識、防犯に関する能力と、その後の防犯活動への参加との関連を検討する。

2. 方法

対象者　第 1 クオーターの講義型科目である「防犯の心理学」を受講した大学生 85 名から協力を得た。そのうち、状況的測定に全て回答した学生を分析対象とした。

手続き　「防犯の心理学」を受講した学生を対象として，第 1 回の講義開始前にアンケート調査を行った（事前調査）。受講した学生を対象として，「防犯の心理学」の毎回の講義終了後にアンケート調査を行った（状況的測定）。

「防犯の心理学」は、第 1 回が犯罪心理学者による防犯に関する理論と地域と店舗での防犯活動に関する講義、第 2 回が学生ボランティアによる防犯パトロールに関する講義と香川県くらし安全安心課による特殊詐欺防止に関する講義、第 3 回が香川県防犯協会による防犯活動の支援に関する講義とパトラン高松によるパトロールランニングに関する講義、第

4 回が香川県警察による警察活動と防犯の重要性に関する講義、第 5 回が全国防犯 CSR 推進会議による企業の防犯活動に関する講義、第 6 回が香川県くらしの見守り隊による見守り活動に関する講義と臨床心理学者による闇バイト防止に関する講義、第 7 回が弁護士による弁護活動と犯罪者の更生に関する講義と再犯防止 NPO による刑余者の支援に関する講義、第 8 回が万引き防止コンサルタントによる万引き防止に関する講義から構成された。

調査内容　①授業への動機づけ：岡田・中谷（2006）を参考に作成した尺度を用いた。回答形式は 5 件法。②防犯意識：大久保・鈴木（2026）の成人向け防犯意識尺度を用いた。回答形式は 5 件法。③防犯に関する能力：濱本・平（2008）の防犯に関する能力尺度を用いた。回答形式は 4 件法。④防犯活動：防犯活動を行ったかどうかを尋ねた。

倫理的配慮　調査票のフェイスシートに回答は自由意志であり，回答の匿名性が確保されることを明記し，調査票への回答をもって同意とみなした。

3. 結果および考察

授業への動機づけ、防犯意識、防犯に関する能力の変化の検討　授業への動機づけ、防犯意識、防犯に関する能力について分散分析を行った。その結果、授業への動機づけは内発的動機づけ（$F(8, 55)=8.70$, $p<.001$）、同一化的調整（$F(8, 54)=7.00$, $p<.001$）、取り入れ的調整（$F(8, 55)=2.70$, $p<.05$）、外的調整（$F(8, 55)=3.14$, $p<.001$）において有意差が認められた。防犯意識は自己防衛（$F(8, 52)=9.09$, $p<.001$）、外での防犯対策（$F(8, 51)=15.09$, $p<.001$）、危険回避（$F(8, 51)=20.20$, $p<.001$）において有意差が認められた。防犯に関する能力は被害防止能力（$F(8, 52)=22.02$, $p<.001$）、コミュニケーション能力（$F(8, 51)=13.79$, $p<.001$）、地域への愛着心（$F(8, 51)=10.06$, $p<.001$）、非行防止能力（$F(8, 53)=5.06$, $p<.001$）において有意差が認められた。

以上の結果から、授業への自律的な動機づけは第 1 回で高まり、維持されていくことが示された。防犯意識と防犯に関する能力は授業を通して向上していくことが示された。「防犯の心理学」は授業への動機づけ、防犯意識や防犯に関する能力を高めることから、防犯人材育成に資する授業であったと考えられる。

防犯活動との関連の検討　授業への動機づけ、防犯意識、防犯に関する能力と防犯活動の有無との点双列相関係数を算出した。その結果、授業への動機づけは次の週までの防犯活動と関連していなかった。防犯意識は、第 4 回終了後の自己防衛（$r=.285$, $p<.05$）と第 5 回終了後の自己防衛（$r=.274$, $p<.05$）、第 3 回終了後の外での防犯対策（$r=.319$, $p<.05$）と第 5 回終了後の外での防犯対策（$r=.296$, $p<.05$）、第 2 回終了後の危険回避（$r=-.352$, $p<.05$）と第 5 回終了後の危険回避（$r=.290$, $p<.05$）、第 2 回終了後の油断のなさ（$r=.272$, $p<.05$）が次の週までの防犯活動と関連していた。防犯に関する能力は、第 4 回終了後の被害防止能力（$r=.293$, $p<.05$）と第 5 回終了後の外での被害防止能力（$r=.345$, $p<.05$）、第 1 回終了後のコミュニケーション能力（$r=-.352$, $p<.05$）、第 1 回終了後の非行防止能力（$r=-.284$, $p<.05$）が次の週までの防犯活動と関連していた。

以上の結果から、第 1 回、第 2 回、第 3 回、第 4 回、第 5 回の防犯意識と防犯に関する能力が防犯活動を関連していることが示された。地域防犯活動をテーマにした第 1 回から第 5 回までと異なり、第 6 回は特殊詐欺防止と闇バイト防止がテーマであり、第 7 回は再犯防止や更生がテーマまであり、第 8 回は万引き防止がテーマであったことから、実際の防犯活動と関連しなかったのだと考えられる。

文献

大久保智生他（2025）. 防犯に関するフィールドワーク型授業の実践と教育効果に関する検証：防犯に関する能力および防犯意識の変化の検討　香川大学教育研究, 22, 161-171.

大久保智生他（2026）. 大学生を対象とした地域の防犯人材育成プログラムの開発：講義型科目からフィールドワーク型科目への接続と防犯ボランティア経験に注目して　香川大学地域人材共創センター研究報告, 31, 91-99.

シングルの成人はどのようにパートナー関係を形成するのか？
――恋愛への動機づけ，シャイネス，出会いツール利用に着目した縦断的検討――

古谷かすみ[1]・髙野恵代[2]・久保南海子[2]
（[1]名古屋大学大学院情報学研究科・[2]愛知淑徳大学心理学部）

How do single adults form romantic partnerships? A longitudinal study focusing on romantic motivation, shyness, and the use of dating services.

Kasumi FURUYA[1], Yasuyo TAKANO[2], Namiko KUBO[2]
([1]Graduate School of Informatics, Nagoya University
[2]Department of Psychology, Aichi Shukutoku University)

1. 問題と目的

近年，マッチングアプリをはじめとするオンライン上の出会い手段は，恋愛関係を形成するための重要な選択肢の一つとなっている。これまでの研究では利用者の人口統計学的・パーソナリティ特性が検討されてきたが，パーソナリティ特性の予測力は限定的であり，認知的・動機づけ的・感情的要因を検討する必要性が指摘されている（Castro et al., 2020）。動機づけの観点において，恋愛関係を形成したいという願望が，具体的な出会い行動にどのようにつながるかを検討することは重要である。De La Cruz et al.（2023）は，利用と満足理論および目標-計画-行動（GPA）モデルに基づき，dating app の利用を，個人特性から動機，行動意図へとつながる目標志向的なプロセスとして捉えている。また，恋愛に関する動機が，その後の行動と結びつく可能性も示されている。しかし，先行研究の多くは dating app そのものの利用動機やアプリ内での行動意図に焦点を当てており，恋愛願望などの動機づけが実際の出会い行動を介して，その後のパートナー関係形成にどのように関連するかを縦断的に検討した研究は限られている。

また，対人場面での不安や回避に関わる個人差も，出会い行動や関係形成に影響する可能性がある。De La Cruz et al.（2023）は dating app 上のコミュニケーション不安を取り上げたが，その関連は研究間で一貫しておらず，個人特性，動機，行動の関連は単純ではないことが示唆されている。

本研究では，T1 時点でパートナー関係を有していなかった者を対象に，恋愛願望，結婚願望，シャイネスが，出会いツール利用と関連し，さらにそのツール利用が T2 におけるパートナー関係形成と関連するか検討することを目的とした。

2. 方法

調査対象者と調査手続き

調査会社が所有する 18 歳から 40 歳までのモニターを対象に，2026 年 5 月（T1）と 8 月（T2）に，Web アンケート調査を実施した。T1 でシングルであった者，なおかつ，性別について男性または女性と回答した 954 名を分析対象とした（男性 532 名，女性 422 名，平均年齢 28.37 歳，*SD* = 6.78）。本研究は，愛知淑徳大学心理学部倫理委員会の承認を得て実施された（承認番号 2026-02）。

質問項目

T1 では，下記の項目を尋ねた。①性別，年齢，恋愛経験の有無。②現在の恋愛状況（5 択）。③恋愛願望 3 項目。④結婚願望 3 項目。⑤出会いツール利用（8 択）。⑥シャイネス 16 項目（相川，1991）。また，T2 では，③および④以外の項目を尋ねた。なお，T2 において，②で「結婚している」または「現在，特定の相手と恋愛関係にある（交際している）」を選択した者をパートナー関係ありと見なし，「特定の相手に恋愛感情を抱いているが，交際していない」，「恋愛したいと思っているが，特定の相手はいない」，「現在，恋愛したいとは思っていない」のいずれかを選択した者はシングルとみなした。また，⑤では，マッチングアプリ，結婚相談所，婚活パーティー・街コン，合コン，SNS，趣味・コミュニティ・イベント系サービスなど複

数の出会い手段を尋ねたが，各手段の利用者数が少なかったため，本分析では何らかのツールを利用していた者を「出会いツール利用あり」として一括して扱った。

3. 結果

T1 でシングルであった者における恋愛願望，結婚願望，シャイネスが，T1 の出会いツール利用有無を予測し，さらにT1のツール利用がT2パートナー関係形成を予測するか検討するため，パス解析を行った。性別，年齢，恋愛経験を共変量として投入した。

T1 の出会いツール利用を予測するパス

恋愛願望は，ツール利用を正に予測した（B = .519, p < .001）。また，恋愛経験があることもツール利用を正に予測した（B = .444, p < .001）。一方で，結婚願望，シャイネス，性別，年齢からツール利用へのパスは有意ではなかった（Figure 1）。

T2 のパートナー関係形成を予測するパス

T1 のツール利用は，T2 のパートナー関係形成を正に予測した（B = .241, p = .013）。また，シャイネスはパートナー関係形成を負に予測した（B = -.239, p = .040）。恋愛願望，結婚願望，性別，年齢，恋愛経験からパートナー関係形成への直接パスは有意ではなかった（Figure 1）。

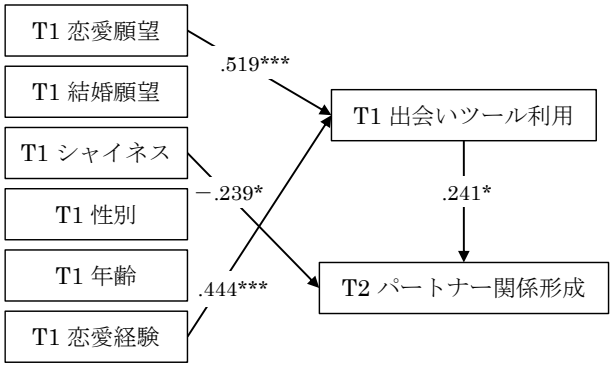


Figure 1
出会いツール利用およびパートナー関係形成を予測するパスモデル。
注. 表記の数値は非標準偏回帰係数を示す。
*p < .05, ***p < .001

間接効果

T1 の恋愛願望から T2 のパートナー関係形成への間接効果について，T1 の出会いツール利用を媒介とした効果が有意であった（間接効果 = .125, p = .023, 95%CI [.017, .233]）。結婚願望およびシャイネスの間接効果は有意ではなかった。

4. 考察

本研究の結果は，恋愛関係を望むこと自体がパートナー関係形成との関連よりも，恋愛願望と出会いツール利用との関連，および出会いツール利用とその後のパートナー関係形成との関連を示すものであった。すなわち，恋愛願望が具体的な出会い行動と関連することが，その後のパートナー関係形成につながる可能性が示唆された。これは，動機や目標が行動意図や行動を方向づけるとする GPA モデルの枠組みとも整合的である。また，恋愛経験を有する者ほどツールを利用していたことから，過去の恋愛経験も新たな出会い行動の選択と関連する可能性が示された。過去の恋愛経験は，その後の出会い行動を促す要因の一つとなる可能性がある。

シャイネスについては，ツール利用への有意なパスは認められなかったものの，T2 のパートナー関係形成を負に予測した。すなわち，シャイネスの高さはツールを利用するか否かには必ずしも関連しない一方，ツール利用後の対人相互作用や関係形成の進展に関連する可能性が示された。De La Cruz et al.（2023）においても，個人特性・動機・行動の関連は複雑であると述べられていることからも，シャイネスがツール利用の開始そのものより，利用後を含む対人相互作用や関係形成の過程に影響する可能性を今後検討する必要がある。

本研究は，パートナー関係形成を単に個人特性や動機づけのアウトカムとして捉えるのではなく，恋愛への動機づけが具体的な出会い行動へと結びつく過程を含めて検討する必要性を示した。特に，恋愛願望とパートナー関係形成との間にツール利用を介した間接的関連が認められたことは，シングルからパートナー関係への移行を理解する上で，心理的動機と実際の行動を同時に扱うことの重要性を示唆する。ただし，恋愛願望とツール利用はいずれも T1 で測定されているため，両者の因果順序は確定できない。また，パートナー形成者数が限られていること，複数の出会い手段を一括して扱ったことにも留意が必要である。今後はより大きなサンプルを用いて，各出会い手段の利用開始，実際の対人相互作用，パートナー関係形成までを複数時点で追跡することが求められる。

大学生の主観的成人感を成立させる必要条件の検討
―MoA・CARES・独自項目を用いた必要条件分析―

中田琉々香[1]・兵頭ひかる[1]・後藤美羽[1]・田原輝人[1]・古波蔵剛輝[1]・横光健吾[1]
（[1]人間環境大学 総合心理学部）

Necessary Conditions for Subjective Adult Status among Japanese University Students

Ruruka NAKATA[1], Hikaru HYODO[1], Miu GOTO[1], Akito TAHARA[1], Goki KOHAGURA[1], Kengo YOKOMITSU[1]
([1]Faculty of Psychology, University of Human Environments)

1. 問題と目的

成人への移行は，年齢や就職，結婚等の社会人口学的指標だけでなく，責任，自立，心理的成熟などの心理的特徴からも捉えられる。Arnett（2000）は，青年期から成人期への移行期を Emerging Adulthood として位置づけ，成人であることの基準として，自らの行動に責任をもつことや，親から自立して意思決定を行うことなどの心理的側面が重視されることを示した。こうした成人への移行において重視される基準を捉える尺度として，Markers of Adulthood（MoA）が用いられてきた（Faas et al., 2020）。一方，Wright & von Stumm（2025）は，従来の MoA では成人期における心理的発達を十分に捉えきれない可能性を指摘し，心理的発達を含む成人観を多面的に捉える Cognitive Maturity, Aging Awareness, Independence, Eudaimonia, and Social Convoy（CARES）を用いて，現代の成人観を検討した。

しかしながら，わが国の大学生において「自分を大人だと感じること（主観的成人感）」に，どの成人観が必要条件となるかは明らかでない。本研究では，MoA 22 項目，CARES 25 項目，独自に作成された 10 項目を用いた必要条件分析（Necessary Condition Analysis: NCA）により，主観的成人感のボトルネックとなる項目を検討した。

2. 方法

2026 年 6～7 月に日本人大学生 267 名（平均年齢 19.51 歳，SD = 1.41）を対象にオンライン横断調査を実施した。質問紙は，基本属性，MoA 22 項目，CARES 25 項目，独自 10 項目，Patient Health Questionnaire-9（PHQ-9），主観的成人感等から構成された。主観的成人感は 5 件法で測定され，子どもだと思う（評定 1～2：n = 137），どちらでもない（評定 3：n = 72），大人だと思う（評定 4～5：n = 58）の 3 段階に分類した。主観的成人間を従属変数，それ以外の各項目を独立変数として，NCA（Dul, 2016）を実施した。NCA は Dul（2016）によって提唱された，ある水準の結果（従属変数）に到達するために説明変数が最低限どの程度必要であるかを検討する手法である。本研究では Ceiling Envelopment-Free Disposal Hull（CE-FDH）により，必要条件効果量 d および各主観的成人感水準に対応するボトルネック水準を算出し，5,000 回の置換検定により統計的有意性を検討した。本研究は，第一著者の所属する大学の倫理審査委員会の承認を得て実施された。

3. 結果

MoA では 7 項目に d > 0 の効果が認められ，「家族を経済的に支える」「信念や価値観を自分で決める」「能力や短所を理解する」「生活費を自分で支払う」「感情をコントロールする」の 5 項目で効果量が大きく（ds = .250），次いで「長期的に続ける仕事やキャリアに落ち着いている」「生活に必要なお金の管理や家事をこなせる」の 2 項目が含まれた（ds = .125）。このうち，「家族を経済的に支える」のみ有意であった（p = .009）。

CARES では 7 項目に d > 0 の効果が認められ，「過去の経験を活かしてよい判断ができる」「自分の考えを持ちながら他者の意見も尊重できる」の 2 項目で効果量が最も大きく（ds = .375），次いで「自分の意図に沿って行動している」「生活の中で起こる問題を解決できる」「目の前のことだけでなく全体の状況をふまえて考えられる」の 3 項目（ds

= .250)，「自分らしさに合った生き方をしている」「自分が何を好きかをわかっている」の 2 項目(ds = .125)が含まれたが，有意な項目はなかった。

独自項目でも 7 項目に d > 0 の効果が認められ，「自分自身の幸せや生き方を自分なりに考える」「人生の選択には得るものだけでなく失うものもあると理解する」の 2 項目で効果量が最も大きく(ds = .375)，次いで「まだ十分な力がなくても，今を本番として生きる」(d = .250)，「親とは異なる価値観や生き方を持つことを受け入れる」「社会の中にある不公平さや理不尽さに気づく」「わからないことや予想通りにいかないことに出会っても逃げずに向き合う」「身近な大人の考え方や生き方を理解しようとする」の 4 項目(ds = .125)が含まれた。このうち，「自分自身の幸せや生き方を自分なりに考える」のみ有意であった(p = .044)。

CARES および独自項目の上位各 2 項目では，主観的成人感が「子ども側」「中間」「大人側」と高くなるにつれて，各項目に求められる最低限の水準も 1, 2, 3 と段階的に高くなった。すなわち，自分をより大人だと感じる水準に達するほど，これらの要素もより高い水準で必要となる可能性が示された。

4. 考察

本研究では，日本人大学生において，成人になるために重要と考えられるさまざまな要素のうち，主観的成人感に対して必要条件となる要素を検討することを目的として，日本人大学生 267 名を対象に，オンライン横断調査を実施した。その結果，主観的成人感の高さには，経済的役割に加え，経験を判断に活かすこと，他者を尊重しつつ自分の考えを持つこと，自身の幸せや生き方を考えること等がボトルネックとなる可能性が示された。これらの項目は，先行研究でも重要性が示されており，海外の大学生と同様に日本人においても主観的に大人であると感じるために重要であると言える。一方，独自項目「自分自身の幸せや生き方を，自分なりに考える」の効果量は d = .375 かつ有意であり，日本の大学生の成人感には既存尺度だけでは捉えにくい自己決定的・内省的側面が関わる可能性がある。ただし，多くの項目では必要条件としての効果(d > 0)がみられたものの，置換検定では有意ではなかった。つまり，主観的成人感が高い人に一定程度必要となる可能性はみられたが，その結果が偶然ではないと統計的に判断できるほど明確ではなかった。そのため，現段階では「成人感をもつために必要な要素である」と結論づけず，可能性を示す探索的な結果として捉える必要がある。今後は，属性による追加分析や PHQ-9 を考慮した感度分析を行い，同様の結果が安定して得られるかを検討する必要がある。

文献

Arnett, J. J. (2000). Emerging adulthood: A theory of development from the late teens through the twenties. *American Psychologist, 55*(5), 469–480. https://doi.org/10.1037/0003-066X.55.5.469

Dul, J. (2016). Necessary condition analysis (NCA): Logic and methodology of "necessary but not sufficient" causality. *Organizational Research Methods, 19*(1), 10–52. https://doi.org/10.1177/1094428115584005

Faas, C., McFall, J., Peer, J. W., Schmolesky, M. T., Chalk, H. M., Hermann, A., Chopik, W. J., Leighton, D. C., Lazzara, J., Kemp, A., DiLillio, V., & Grahe, J. (2020). Emerging adulthood MoA/IDEA-8 scale characteristics from multiple institutions. *Emerging Adulthood, 8*(4), 259–269. https://doi.org/10.1177/2167696818811192

Wright, M., & von Stumm, S. (2025). Perceptions of adulthood: What does it mean to be grown-up? *Journal of Adult Development, 32*, 1–14. https://doi.org/10.1007/s10804-024-09477-8

中学生・高校生の同性友人関係における状況に応じた切替の 4 類型の特徴

大谷宗啓 [1・2]・若松養亮 [2]
([1] 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科・[2] 滋賀大学)

Characteristics by the Four Types of Situational Changeovers in Junior and Senior High School Students' Same-gender Friendships.

Munehiro OHTANI[1・2], Yosuke WAKAMATSU[2]
([1]Joint Graduate School (Ph. D. Program) in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education [2]Shiga University)

1. 問題と目的

同性友人関係において状況に応じて関係対象(友人)を切り替える「対象切替」と自己のあり方を切り替える「自己切替」の高低を組み合わせた，不使用型・対象切替偏用型・自己切替偏用型・両用型の「切替 4 類型」の類型別の特徴は，その多くが大学生から高齢者まで一貫している(大谷他，2024; 大谷・若松，2025b)。本研究では中学生・高校生を回答者として，大学生～高齢者との異同を検討する。

2. 方法

調査の概要　滋賀大学研究倫理委員会の許可(承認番号: B250016)を得て，2026 年 3 月に web 調査を実施した。調査会社の登録モニターである中学 1・2 年生と高校 1・2 年生 685 名の回答を得た。友人数を 0 名と回答した 12 名と，ストレートライニングが見られた 49 名を除外した 624 名(中学男性 112 名，中学女性 164 名，高校男性 79 名，高校女性 269 名)を分析対象とした。

調査の内容　友人数:「今現在，あなたが一緒におしゃべりをしたり，何かをするような同性の友人(直接会ったことが一度もない友人は除く)の内，今，具体的に思い浮かべられる友人は何名ぐらいおられますか」の単項目。整数で回答。状況に応じた切替:SCSM(大谷・若松，2025a)の対象切替 4 項目(例「どこに何をしに行くかによって，最初に誘う友人は違う」)と自己切替 6 項目(例「どんな友人と一緒にいるかによって，自分のキャラが変わる」)。「あてはまる」(5 点)～「あてはまらない」(1 点)の 5 件法。多様性志向:「色々なタイプの友人と付き合いたい」の単項目。SCSM と同じ 5 件法。アタッチメント行動スタイル:児童版 ECR-RS-GO(中尾，2018)の不安 3 項目と，回避 6 項目。項目文中の「人」に「友人」を代入した。「あてはまる」(4 点)～「あてはまらない」(1 点)の 4 件法。孤独感:LSO(落合，1983)から大谷・若松(2025b)と同じ 2 項目を除外後の，LSO-U を 9 項目と，LSO-E を 5 項目。「はい」(+2 点)～「いいえ」(-2 点)の 5 件法。発達主題得点:EPSI 再改訂版(中西・佐方，2002)の内，勤勉性，同一性，親密性，生殖性について，大谷他(2024，p.29)記載の各 5 項目。「とてもよくあてはまる」(5 点)～「全くあてはまらない」(1 点)の 5 件法。

3. 結果と考察

SCSM の構造の確認　探索的因子分析の結果，大学生～高齢者(大谷・若松，2025a)と同じ因子構造が抽出された。中学生・高校生の多母集団同時分析では測定不変モデルの適合度が最良であった。

切替 4 類型の分類　大谷・若松(2025b)に従い，下位尺度得点の少なくとも一方が中性値である者を分類不能とした上で類型化した。人数分布の校種差($\chi^2(4)=1.59$，$p=.810$)，性差($\chi^2(4)=3.09$，$p=.543$)は有意ではなかった。全体の人数分布は，不使用型 6.4%，対象切替偏用型 19.7%，自己切替偏用型 2.7%，両用型 60.1%，分類不能 11.1%であり，大学生～高齢者と比べて不使用型が少なく，両用型が多かった。

LSO 類型の分類　落合(1983)に従い，下位尺度得点の少なくとも一方が中性値である者を分類不能とした上で類型化した。C 型の者はいなかった。分布

は中高生を対象とした先行研究と整合的であった。

切替類型と LSO 類型の関連　少人数の自己切替偏用型を除外し，男女込み，校種別に分析した。中学生では有意傾向（$\chi^2(4)=8.76$，$p=.067$）ながら，残差分析の結果，両用型の A 型が少なかった（$p=.007$）。高校生では有意（$\chi^2(4)=25.87$，$p<.001$）であり，対象切替偏用型の A 型が多く（$p<.001$），B 型（$p=.007$）・D 型（$p=.040$）が少なかった。また，両用型の B 型（$p=.023$）・D 型（$p=.020$）が多く，A 型が少なかった（$p<.001$）。

切替４類型×校種別の各指標得点　少人数セルの発生を避けるため男女込みで分析した（Table 1）。なお，発達主題得点については中西・佐方（2002）の基準を準用し，校種別の 30 パーセンタイル値以下を，注意を要する低さとみなす基準とした。

不使用型の特徴　大学生以降（大谷他，2024；大谷・若松，2025b）と同じく多様性志向と不安が低かった。一方，大学生以降で高かった回避は低かった。以上の結果は，中学生・高校生では安定型的な者が多く，大学生以降では拒絶型的な者が多いことを示す。高校生の勤勉性の値は 30 パーセンタイル値を下回り，注意を要する低さであると考えられる。中学生～高齢者まで一貫して不使用型を特徴づけたのは，多様性志向の低さであった。

対象切替偏用型の特徴　大学生以降と同じく不安と回避が低かった。一方，大学生以降で見られた勤勉性の低さは見られなかった。先述した LSO 類型との関連と考え合わせれば，高校生では心理社会的な適応感は良好であるが，それは自他融合的な意識（LSO-A 型）を前提としており，その前提が崩れると適応感が揺らぐのではないかと考えられる。中学生～高齢者まで一貫して対象切替偏用型を特徴づけたのは，不安と回避の低さであった。

自己切替偏用型の特徴　不安と回避が高く，中学生の同一性と，高校生の勤勉性，親密性，生殖性の値は 30 パーセンタイル値を下回った。自己切替偏用型は校種が高いほど，複数の発達主題で不全感を抱えていることが多いと考えられる。

両用型の特徴　大学生以降と同じく多様性志向が高く，不安が高かった。一方，大学生以降で見られた生殖性の高さは見られず，大学生以降で見られなかった同一性の相対的な低さが見られた。両用型は校種が高いほど，心理社会的な適応感が良好である。また，LSO-A 型から D 型への移行（伊藤，1995；落合，1989）が他の類型に比べて早いこと（大谷他，2025b）が，本研究の結果からも読み取れる。中学生～高齢者まで一貫して両用型を特徴づけたのは，不安の相対的な高さと，多様性志向の高さであった。

Table 1
各指標得点を従属変数とし，切替4類型と校種を要因とした個人間2要因分散分析

従属変数	切替4類型	中学生 *M* (*SD*)	高校生 *M* (*SD*)	要因の効果	*F*値	ES:*f*	Holm法による多重比較(5%水準)
友人数 (1 - 200)	1. 不使用型	12.65 (23.06)	7.96 (6.96)	切替4類型	0.90	0.07	
	2. 対象切替偏用型	14.81 (16.60)	12.72 (14.06)	校種	0.89	0.04	
	3. 自己切替偏用型	8.38 (10.36)	12.11 (11.50)	交互作用	1.14	0.08	
	4. 両用型	18.49 (26.99)	10.75 (10.66)				
多様性志向 (1 - 5)	1. 不使用型	3.35 (1.62)	2.83 (1.40)	切替4類型	4.80 ***	0.16	1<4
	2. 対象切替偏用型	3.70 (1.28)	3.61 (1.32)	校種	1.48	0.05	
	3. 自己切替偏用型	2.88 (1.81)	3.00 (0.87)	交互作用	0.84	0.07	
	4. 両用型	3.93 (1.24)	3.50 (1.13)				
不安 (1 - 4)	1. 不使用型	2.33 (0.97)	2.54 (0.76)	切替4類型	12.76 ***	0.26	1･2<3･4
	2. 対象切替偏用型	2.78 (0.75)	2.64 (0.80)	校種	0.04	0.01	
	3. 自己切替偏用型	3.21 (0.64)	3.15 (0.56)	交互作用	0.57	0.06	
	4. 両用型	3.08 (0.78)	2.99 (0.65)				
回避 (1 - 4)	1. 不使用型	2.02 (0.59)	2.35 (0.66)	切替4類型	8.37 ***	0.21	1･2･4<3, 2<4
	2. 対象切替偏用型	2.00 (0.60)	2.11 (0.57)	校種	7.84 **	0.12	中学生<高校生
	3. 自己切替偏用型	2.46 (0.91)	2.91 (0.68)	交互作用	0.75	0.06	
	4. 両用型	2.23 (0.60)	2.36 (0.56)				
勤勉性 (1 - 5)	1. 不使用型	3.16 (0.55)	**2.78** (0.66)	切替4類型	2.67 *	0.12	(類型間に有意差なし)
	2. 対象切替偏用型	3.21 (0.80)	3.06 (0.67)	校種	7.22 **	0.11	高校生<中学生
	3. 自己切替偏用型	2.98 (0.59)	**2.42** (0.44)	交互作用	1.49	0.09	
	4. 両用型	3.14 (0.73)	3.10 (0.63)				
同一性 (1 - 5)	1. 不使用型	3.28 (0.70)	3.05 (0.76)	切替4類型	7.06 ***	0.20	3･ 4<2
	2. 対象切替偏用型	3.23 (0.67)	3.13 (0.76)	校種	0.24	0.02	
	3. 自己切替偏用型	**2.63** (0.84)	2.76 (0.82)	交互作用	0.56	0.06	
	4. 両用型	2.91 (0.70)	2.91 (0.59)				
親密性 (1 - 5)	1. 不使用型	3.58 (0.81)	3.30 (0.60)	切替4類型	14.15 ***	0.28	3<4<2, 3<1
	2. 対象切替偏用型	3.65 (0.70)	3.56 (0.64)	校種	9.29 **	0.13	高校生<中学生
	3. 自己切替偏用型	3.15 (0.75)	**2.40** (0.51)	交互作用	1.86	0.10	
	4. 両用型	3.29 (0.62)	3.22 (0.60)				
生殖性 (1 - 5)	1. 不使用型	3.13 (0.67)	2.68 (0.53)	切替4類型	1.79	0.10	高校生<中学生
	2. 対象切替偏用型	2.87 (0.63)	2.69 (0.63)	校種	12.44 ***	0.15	
	3. 自己切替偏用型	2.85 (1.05)	**2.09** (0.78)	交互作用	2.60	0.12	
	4. 両用型	2.83 (0.70)	2.78 (0.63)				

注）従属変数欄の括弧内は得点可能範囲，但し数値記入回答による友人数は最小値 - 最大値。切替4類型の主効果と交互作用（$df=3,547$）はES:$f \geq .14$で1-$\beta \geq .80$，校種の主効果（$df=1,547$）はES:$f \geq .12$で1-$\beta \geq .80$。校種別の30パーセンタイル値を下回る勤勉性・同一性・親密性・生殖性の値は枠付き太字で示した。
$^{*}p<.050$　$^{**}p<.010$　$^{***}p<.001$

文献

大谷・若松（2025a）．日本心理学会第 89 回大会，3C-072-PO

大谷・若松（2025b）．日本青年心理学会第 33 回大会，44-45.

大谷・渡部・若松（2024）．青年心理学研究，*36*(1)，5-29.

日本青年心理学会第34回大会　ハラスメント防止のための基本方針

日本青年心理学会第 34回大会準備委員会および大会運営改革検討 WG は，本方針を大会運営の基本方針とし，すべての参加者に周知します。

1. 趣旨

本大会は，多様な立場・専門・世代の研究者が集い，対話を通して新しい知を創造する場です。私たちは，すべての参加者が安心して発表・討論・交流できる環境を確保することを重視します。

2. 本大会におけるハラスメント防止のための基本的立場

(1)すべての参加者の人格と尊厳を尊重します。

(2)性別・年齢・国籍・職位・障がい・性的指向・価値観・研究分野など，いかなる違いによる差別・排除・侮辱的言動を認めず，すべての参加者に対してそのような行為を行わないよう呼びかけます。

(3)研究の発展に欠かせない自由な意見交換と建設的な批判的対話を尊重します。ただし，個人攻撃や威圧・嘲笑・排除的態度となる場合は，学問の自由の名の下でも容認しません。

3. 対象となる行為とその範囲

(1)「ハラスメント」には，セクシュアル，パワー，アカデミック，マタニティ／パタニティ・ハラスメント(出産・育児に関するハラスメント)など，身体的，精神的，社会的に人格を侵害する行為を含みます。

(2)対面だけでなく，オンライン上での発言ややり取りを含みます。

(3)発表，議論，懇親会，SNS 上の発言など，大会に関連するすべての場面を含みます。

4. 発言と議論における留意点

本大会では，多様な参加者が集い，自由な意見交換を通じた学術的対話が行われます。発言や議論に際しては，以下の点にご留意ください。

- ●自由な議論は，参加者が安心して発言・参加できる環境の中でこそ成立するものであり，相互の尊重に基づいて行われる必要があります。
- ●発表者や発言者に対し，属性・立場・経験等を揶揄・軽視するような発言は控えてください。
- ●批判的な視点を提示する際にも，対話的な理解を促す表現を心がけ，対人攻撃とならないようご配慮ください。
- ●発言の意図と受け取り手の感覚が一致しない場合もあることをふまえ，他者を意図せず傷つける可能性があることを常に念頭に置いてください。

5. 相談先

この基本方針に反する言動があった場合は，以下の二名の会員までご相談ください。
連絡先メールアドレスが必要な場合は，大会受付までお問い合わせください。

・日本青年心理学会事務局 ： 池田幸恭
・日本青年心理学会 大会担当常任理事 ： 藤井恭子

研究は，他者との対話を通して進化する営みです。本大会が，立場や背景を超えて安心して学び合い，互いの探究を尊重しあう場となることを願い，ここに本方針を掲げます。

日本青年心理学会 第 34回大会準備委員会
日本青年心理学会　大会運営改革検討 WG



なぜ心理学は重要なのか

リチャード・ワイズマン［著］
本多明生［訳］
四六判／並製／176 頁　◉定価 3,080円

世界的に著名な心理学者が、心理学という学問の意義と社会的役割をわかりやすく解説する格好の入門書!

NOW PRINTING
2026 年 11 月 刊行予定

状況の心理学ハンドブック

「状況」から読み解くパーソナリティと人間行動

ジョン・F・ラウスマン、ライン・A・シャーマン
デイビッド・C・ファンダー［編］
堀毛一也、小塩真司、松田英子、山形伸二、渡邊芳之［監訳］
B5判／上製／738 頁　◉定価 19,800円

新たな研究領域「状況研究」。第一線で活躍する各研究分野の専門家が状況の心理学的側面に関する最先端の知識を体系的にまとめた研究者必読の基本図書。

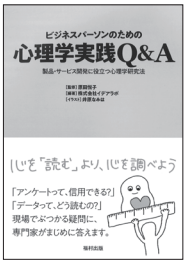
NOW PRINTING
2026 年 11 月 刊行予定

カスタマーハラスメント 強い組織のつくり方

先進事例に学ぶ、カスハラ対策実践ガイド

島田恭子［監］
一般社団法人ココロバランス研究所［編］
A5判／並製／200 頁　◉定価 2,750 円

カスハラ対策の法制化動向と 5 業種の実践例をたどり、働く人を守る備えから良い顧客対応への転換を説く。



ビジネスパーソンのための 心理学実践 Q&A

製品・サービス開発に役立つ心理学研究法

原田悦子［監］
株式会社イデアラボ［編著］ 井原なみは［イラスト］
A5判／並製／288 頁　◉定価 2,970 円

実験・調査・面接・観察――製品・サービス開発に効く心理学研究法を Q&A で学ぶ。イラスト多数収録。



心理職の「こころ」を耕す ワーク・ディスカッション

安心感に守られた対話で考える力を育む

長谷綾子、若佐美奈子、橋本貴裕［編著］
A5判／並製／190頁　◉定価 3,300円

感情労働により疲弊しないよう心理職の心の素地を養う、対人援助職の教育プログラムWDの導入可能性を探る。



組織の体験学習と AIアプローチ （Appreciative Inquiry）

アプリシエイティブな「まなざし」と「問いかけ」で組織が変わる

垣内芳文、津村俊充［著］
A5判／並製／290頁　◉定価 3,190円

人や組織が理想的な変容を実現するために、意図的に関与し働きかける AIアプローチと簡単なワークを紹介。



新・小学生の生活とこころの発達

「子どもらしさ」の心理学

心理科学研究会［編］
A5判／並製／292頁　◉定価 3,080円

小学生を取り巻く環境と発達を正面から取り上げ好評を博した初版を、昨今の急激な社会の変化に即して改訂。

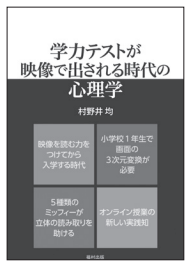


こども・若者と薬物

「それ知らなかった」をなくす本

野田哲朗［編著］
園田　寿、谷家優子、吉田　緑［著］
四六判／並製／276 頁　◉定価 2,750 円

薬物使用の背景にあるスティグマ、孤立、依存症等について、こども・若者のために何ができるのかを考える。



学力テストが映像で出される時代の心理学

村野井 均［著］
四六判／並製／208頁　◉定価 3,080円

子どもは本当に映像を正確に理解しているだろうか。学校教育のデジタル化に不可欠な映像理解への対応を提言する。



「子ども点描」 子どものこころのカタチ

子育て・孫育て・親育ちの心理学

河合優年［著］
四六判／並製／328頁　◉定価 2,200円

産経新聞連載のコラムが一冊に。子どもの行動の背景にある心の働きをやさしく語り、子どもの今を描き出す。

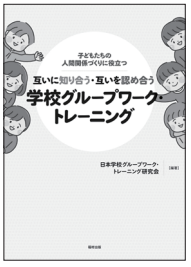


施設内高齢者虐待の研究

ケアを受ける側と与える側における「自立と依存」の関係性からの検討

大村 壮［著］
A5判／上製／264頁　◉定価 6,050円

ケア労働者と要介護高齢者への調査に基づく、施設内高齢者虐待への心理学からの原因解明と防止モデルの提言。



子どもたちの人間関係づくりに役立つ 互いに知り合う・互いを認め合う 学校グループワーク・トレーニング

日本学校グループワーク・トレーニング研究会［編著］
B5判／並製／108 頁　◉定価 2,530 円

小学校の子どもたちの発達段階に応じた、1 単位授業で実施できる楽しい 15 のグループワークを紹介。



もう悩まない！大学生のための 論文・レポート作成ワークブック

12 のワークでやさしく学ぶアカデミックライティング

田島弥生、福田みのり［著］
B5判／並製／86 頁　◉定価 2,420 円

論文・レポートの書き方を分かりやすく解説。豊富な例題と解答例で実践的に学べる初学者向けワークブック。

NOW PRINTING
2026 年 11 月 刊行予定

愛・アイデンティティ・魂について （仮）

大野 久［著］
A5判／並製／予 292 頁　◉予価 3,080 円

エリクソンの漸成発達理論を軸に、愛することとアイデンティティについて、さらに死後のアイデンティティまでを論じる。

詳細は第 34 回大会書籍展示ブースで!

福村出版 | 〒104-0045 東京都中央区築地4-12-2
TEL 03-6278-8508 FAX 03-6278-8323 https://www.fukumura.co.jp ※定価は税込み価格です

日本青年心理学会 第 34 回大会

大会準備委員会
委員長　　平石賢二（名古屋大学）
事務局長　河野荘子（名古屋大学）
　　風間惇希（三重大学）
　　亀田　研（朝日大学）
　　川上知子（長崎国際大学）
　　川島一晃（椙山女学園大学）
　　齋藤　信（鈴鹿大学）
　　信太寿理（同朋大学）
　　杉浦祐子（愛知工業大学）
　　鈴木絵理奈（椙山女学園大学）
　　渡邉賢二（皇學館大学）

日本青年心理学会・大会運営改革検討 WG
　　藤井恭子（関西学院大学・大会担当常任理事）
　　藤野遼平（鈴鹿医療科学大学）
　　溝口　侑（関西大学）
　　茂垣まどか（帝京大学短期大学）

共催　　名古屋大学教育学部・大学院教育発達科学研究科

協賛　　福村出版株式会社

日本青年心理学会第 34 回大会発表論文集

2026 年 11 月 2 日発行

オンライン版のみ

発行者　日本青年心理学会第 34 回大会準備委員会
　　e-mail: jsyap34am@gmail.com
　　日本青年心理学会　大会運営改革検討 WG
　　e-mail: jsyap.conference@gmail.com